

ヒューメインエデュケーション 寄り添う心を創る

■日時：大阪 2011 年 11 月 12 日（土）10：00～17：00
東京 2011 年 11 月 13 日（日）9：30～16：30

■開催場所：大阪 大阪府立大学りんくうキャンパス
東京 ヤマザキ動物専門学校レインボーホール

■講師：ディーパシェリー・バララム氏（Dr. Deepashree Balaram）
ジョイ・レネイ氏（Joy Leney）

■対象者：各自治体動物愛護担当職員／獣医師／動物看護師／教育関係者（学生含む）

■参加費：無料

■主催：公益社団法人日本動物福祉協会／公益社団法人 Knots

■後援：環境省／文部科学省／東京都教育委員会／大阪府教育委員会／泉佐野市教育委員会／社団法人日本獣医師会／公益社団法人日本動物病院福祉協会

■特別協力：公立大学法人大阪府立大学生命環境科学研究科獣医学専攻

■協賛：

- 講師紹介 -



■ディーパシェリー・バララム氏 (Dr. Deepashree Balaram)

ACTAsia for Animals(アクトアジア、共同設立者)、Animal Defenders International (アニマル ディフェンダーズ インターナショナル)、World Society for the Protection of Animals(WSPA 世界動物保護協会)など、様々な国際的な動物保護団体に関わってきており、プロジェクトの戦略、開発、キャンペーンのコーディネーション、コンパニオンアニマル問題、教育開発などの課題にあらゆるレベルで対応。獣医とMBAの資格を持つ。現在インド在住、動物保護の分野でコンサルタントとして活躍中。



■ジョイ・レネイ氏 (Joy Leney)

人的資源管理分野における理学修士。生涯教育やマネジメント学ディプロマコースなど大学院レベルでの教員資格を持つ。37年間に渡り動物に関連する分野で、獣医の事務職から英国の主要チャリティー団体であるウッドグリーン アニマルシェルター (WGAS) の総支配人、ギリシャ動物福祉財団 (GAWF) の管理責任者などを務め、12年間 World Society for the Protection of Animals(WSPA 世界動物保護協会)の国際プロジェクト部長。野良犬(猫)動物問題、ヒューメインエデュケーション(人道教育)、そして旅行に関心が高い。英国ケンブリッジ州在住。ACTAsia for Animals(アクトアジア)の相談役である。

HCI セミナースケジュール

2011年11月12日(土),13日(日)

■ 10:00-10:10

ご挨拶

■ 10:10-13:00

<前半> 同時通訳付き

座学『ヒューメインエデュケーションとは?』

●福祉とはなにか

●ヒューメインエデュケーションの原則、必要性

休憩 15分

●ヒューメインエデュケーションのプロセス

1) 研究・調査

2) 一般向けの教育

3) 学校におけるヒューメイン教育

●ビデオ上映

●パネルディスカッション (1時間)

座長：山口千津子氏 (公益社団法人日本動物福祉協会/獣医師)

パネリスト：外国人講師 2名

(ディーパシェリー・バララム氏/ジョイ・レネイ氏) + 日本人講師・各会場 2名

大阪会場講師

犬伏 源氏 (兵庫県動物愛護センター淡路支所/獣医師)

藤井 敬子氏 (奈良県桜井保健所動物愛護センター/獣医師)

東京会場講師

柴内 裕子氏 (赤坂動物病院院長/公益社団法人 日本動物病院福祉教会顧問)

山下 千恵氏 (東京都動物愛護相談センター所長/獣医師)

■ 13:00-14:00

昼食

■ 14:00-17:00

<後半> 同時通訳付き

100名限定のワークショップ 必ず事前にお申込み下さい

●ケーススタディ

●6~10名のグループに分かれ、実際のテーマに取り組む

休憩 15分

●各グループの報告と説明

●まとめ

※会場内で、日本で実際に取り組んでいるヒューメインエデュケーションのマテリアルを展示、紹介致します。

※(東京会場は、以下のプログラムより30分早くなります。)

ヒューメインエデュケーション・寄り添う心を創る

日時：2011年11月12日（土）10:00～17:00

場所：大阪府立大学りんくうキャンパス



○司会

皆さん大変長らくお待たせいたしました。お時間となっておりますので、レクチャーを始めさせていただきますと思います。

本日はお忙しい中、ヒューメインセンタージャパン事業「ヒューメイン・エデュケーション～寄り添う心を創る」にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

まず初めに、大変残念なことを申し上げなければなりません。来日予定でしたアメリカ・タルジ先生が御体調不良のため、急に来日がなくなりました。皆様には改めましておわび申し上げたいと思います。アメリカ先生も大変残念であるということで、皆様によりよく伝えていただきたいということでメッセージをいただいております。

本日は、イギリスよりジョイ・レネイ先生、インドよりディーパシェリー・バララン先生より講座をいただきます。これからお二人のことを親しみを込めて、ジョイ先生、ディーパ先生とお呼びすることを許していただきたいと思います。

さて、講座に入ります前に幾つか連絡事項を申し上げます。

それでは、早速講座に入らせていただきます。

まずは主催者を代表いたしまして、公益社団法人日本動物福祉協会獣医師の山口よりごあいさつを申し上げます。山口先生、お願いいたします。

○山口千津子

皆様、おはようございます。御紹介いただきましたHCJの一翼を担っておりますノッツとともに活動しております、日本動物福祉協会の山口と申します。本日は、おいでいただきましてありがとうございます。

私どものヒューメインセンタージャパンといえますのは、人と動物がともに幸せに暮らす社会を目指してということで活動を続けてきております。こういうセミナーも、その活動の一環として行っております。今回は特に、私どもの活動の根幹をなしますヒューメイン・エデュケーションをテーマに、欧米でこの分野で大きな業績を残されておりますディーパ先生、ジョイ先生をお迎えして、ヒューメイン・エデュケーションについて、ヒューメイン・エデュケーションとは何かという話をいたさんとともに、お二人の御努力で実際のケーススタディを中心に、ワークショップで皆様に御経験をいただいて考えていただく時間を設けております。

今、本当に日本ではいろんなことが起こり、大人だけではなく、若い人の間でも命を軽視する風潮が広まってきております。これはもう日本の皆様、懸念している状態ですけれども、やはり文科省もこういうことに懸念しまして、命を大切に、思いやりの心をはぐくむという言葉が指導要領の中に入れてきております。これは日本でもそうですが、世界でもいろんな問題が起こり、同じようなことが起こってきております。

そこで、世界的にも今、この生命への、命への感性と共感をはぐくむということがとても大切になってきておまして、そのヒューメイン・エデュケーションがとても大きく認識されてきているところですが、日本ではまだまだヒューメイン・エデュケーションって何だろうという段階にあります。でも、世界でもまだすべてのところに行き渡っているというわけではないですが、既にもうその努力が続けられているということで、日本でもその努力の芽生えはもう既に始まっております。皆さんも、横にいろんなグッズが展示されておりますけれども、日本でも既に始めてくださっている先生方を、きょうはお昼前に先生方をお二方、兵庫県と奈良県からお呼びして、

ディーパ先生、ジョイ先生とともにパネルディスカッションをいたしますので、ぜひディーパ先生への御質問、ジョイ先生への御質問とともに、日本の先生方にも、実際こうなるにはどうするのかということも御質問いただけたらと思っております。

本日は、このお二人のディーパ先生、ジョイ先生からそのエッセンスを御指導いただいて、ぜひ御参加いただいた皆様方の中で情報を共有しまして、この時間を日本へのヒューメイン・エデュケーションの震源地とさせていただけたらなというふうに思います。そして、ここにお集まりの皆様方がいつでも御連絡をとり合うことができ、悩んだときにはお互い教え合う、相談し合うことができるようなネットワークがここから広がればなというふうに思っております。どうぞ本日は1日よろしくお願いたします。

○司会

山口先生ありがとうございました。

続きまして、特別協力としましてこのレクチャーを支えてくださっております、大阪府立大学獣医学専攻 笹井教授より一言お願いいたします。



○笹井和美

おはようございます。府立大学の笹井と申します。

本日は大阪の南の果てのりんくうまで、ようこそおいでくださいました。

この講演は、本来ですと大学が主体になってさせていただかないといけないんですけども、なかなかそこまで手が回っておりませんで、きょうはうちの学生の人も何人かこの講義を拝聴して、さらに理解を深めさせていただけると。

また、大阪府立大学は公立でございますので、地域の方、あるいは大阪の方、あるいは近畿地方の方に広く広報させていただいて、この機会を持たせていただきました。この力、ヒューメイン・エデュケーションという新しい発想、日本人にとってはちょっと新しい発想なんですけども、芽生えて、どんどん日本じゅうに広がっていくようにということをお祈りいたしまして、最初のあいさつにかえさせていただきます。本日は遠いところありがとうございました。

○司会

笹井先生、ありがとうございました。

最後に、このHCJ事業全体をサポートくださり、皆様に貴重な学びの場を御提供くださっております、マースジャパン、ペディグリーブランドマネージャー望月様にあいさつをお願いいたします。

望月様、お願いいたします。



○望月

ただいま御紹介にあずかりました、マースジャパンというペットフードメーカーから参りました望月と申します。

なぜペットフードメーカーがというふうに思ってしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちが取り扱っておりますペディグリーというブランドでは、犬のためにできるすべてをということのスローガンに、人とペットが幸せに暮らしていけるような世界をつ

くっていこうということを目指しております。ただ単にペットフードを販売するだけではなくて、どういったらそういう世界がつかれるかということに関して世界的に取り組みを行っております。

昨年度から保護犬の支援活動を始めまして、HCJさんの事業をサポートさせていただいております。今後も人と人間の共生ということをテーマに活動を支援させていただきたいと思っております。

今回は、このすばらしいセミナーに著名な先生方に御協力いただきまして、一緒に勉強させていただけることを非常にありがたく思っております。ぜひいいセミナーにしたいと思っておりますので、皆様よろしく願います。

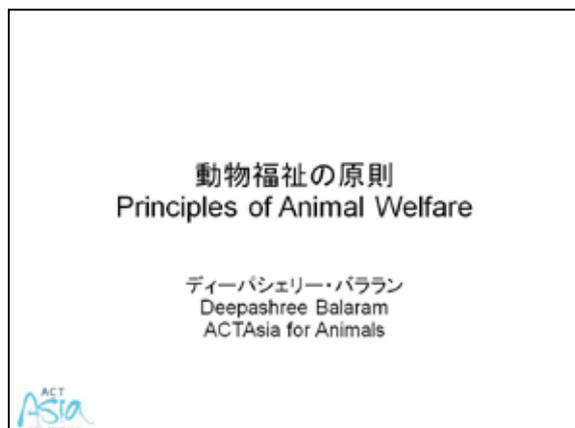
○司会

望月様、ありがとうございます。

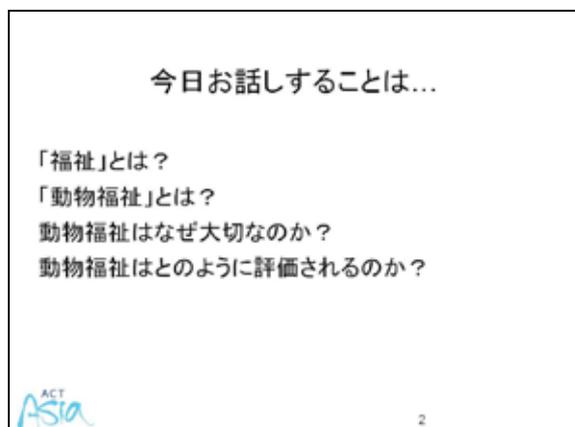
それでは、レクチャーを早速始めさせていただきたいと思っております。

まずは、ディーパ先生に動物福祉の原則についてお話しさせていただきます。

ディーパ先生、お願いします。



【スライド1】



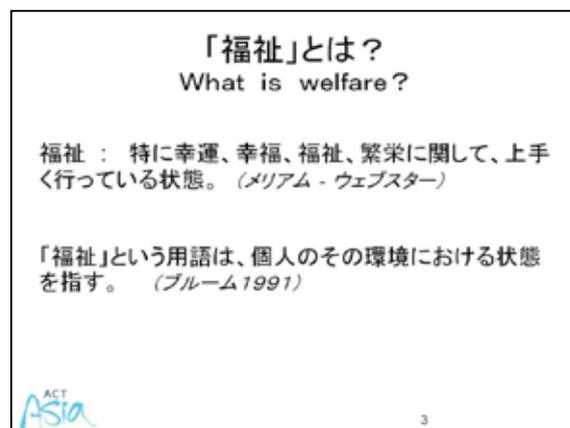
【スライド2】

○ディパシェリー・バララン

皆さん、おはようございます。私、アクトアジアを代表して、このプログラムが大阪で開かれることを感謝いたします。

皆さん、このヒューメイン・エデュケーションに非常に興味を持っていただいたということも感謝いたします。とても大事なテーマです。

この部分では、動物福祉の原則についてお話をしたいと思っております。動物をどのように扱うのかというのは大事なんです。人を教えるということは、動物をどう扱うかを教えることともつながってまいります。そして、それをどのように評価するのもお話をしていきたいと思っております。【スライド2】



【スライド3】

じゃあ、福祉といった場合、福祉って何なんですか。最初の定義を見ていただきたいと思っております。

これは我々が、人の福祉について話すときに使う言葉です。でも、この中にはほかの動物にも適用できるものがあります。福祉とは尊重の念を持ち、尊敬の念を持ち、そして幸運、幸福、福祉、繁栄に関してうまくいっている状態を指します。もう少し科学的な定義としては、ドナルド・グルーヴがケンブリッジ大学で定義しています。忘れてはならないこと、それは、福祉というのは、我々の環境における状態だけではなく、その環境に対して我々がどう反応するか、それも含まれているということです。【スライド3】

動物福祉とは、その動物が住んでいる状況にいかに対応しているかということに関係しています。例えば動物が健康であるか、快適であるか、栄養状態がよいか、痛み、苦しみ、ストレスに苦しんでいないかどうか、これがすべてその動物の福祉のよい状態なんです。それを考えてみると、人の福祉のよい状態もこれらの項目で規定されることがわかります。なので、動物の基本的なニーズは、実は人の基本的なニーズと似通っているということです。我々すべて動物です。【スライド4】

「動物福祉」とは？
What is animal welfare?

動物福祉とは、その動物が、住んでる状況にいかに対応しているかということに関係している。

福祉の良い状態(科学的根拠に基づいて)にいる動物は、

1. 健康である。
2. 快適である。
3. 栄養状態が良い。
4. 安全である。
5. 本能的行動を出すことができる。
6. 痛みや恐怖、苦悩など不快なことに苦しんでいない。

American Veterinary Medical Association/World Organisation for Animal Health(OIE)



4

【スライド4】

**なぜ「動物福祉」について
考えなければならないのか？**
Why should we care about animal welfare?

- 動物は感覚力のある生き物であり、多くのことを人間と同じように感じることができる。
- 動物はさまざまな形で人間に使われている。 - 我々には彼らの福祉を守る責任がある。
- 他の生き物(人間とその他の動物)の福祉を向上させることは、先進社会、文化社会の証の一つである。
- 動物への慈しみを教える(特に子どもたちに)ことは、他人を思いやり、尊敬する心を育てる。
- 日本には「動物愛護法」がある。



5

【スライド5】

この分野、ヒューメイン教育、もしくは動物保護の世界で仕事をしている人たちは、よくこういう質問を受けます。なぜ動物福祉について考えなきゃいけないのか、人間の問題だって多いのに、なぜ動物ということを知られるんです。私たちみんな動物じゃないですかということも一つですが、動物は感覚力を持つ生き物です。したがって、多くのことを人間と同じように感じ、共感することができるということ。例えば食べ物だとか、それから衣服だとか、そういった形で動物が扱われているケースがあります。そのときに、動物には感覚力がないと思っているケースがある。すべて我々の社会に生きるものとして尊敬をしていかなければならないということなんです。我々がさまざまな形で使っている動物を守る責任があります。

また、他の生き物の福祉を向上させるということ、これは精神社会や文化社会のあかしの一つです。そこにははっきりとした理由があります。ヒューメイン教育を行うこと、それにもしっかりと理由があるんです。なので学校や、また、その他の場のプログラムとしてこのヒューメイン教育を使っていくこと、それを訴えていかなければなりません。日本もほかの国と同じように動物

愛護法があります。国のレベルで、国の政府は動物福祉が重要であるということを信じているから、そういった法律が生まれているのです。【スライド5】

動物の感覚とは？
What is animal Sentience?

動物は知っています。
自分が、
どう感じているのか。
どこにいるのか。
誰といるのか。
どのように扱われているのか。



6

【スライド6】

動物は何が感じられるのか？

良い感情と同じように、
痛み
その他、空腹、のどの渇き、暑さ、寒さ
恐怖、不安、ストレスを感じる。
本能的なイライラ感。
喜び、快楽。
社会的な絆。



7

【スライド7】

科学的根拠
Science-based

現在の科学的コンセンサスによると、脊椎動物は少なくとも痛みを感じ、苦悩を経験する能力がある。

常に新しい科学研究がなされ、動物の認識能力や感情について続々と新たな発見がある。



8

【スライド8】

さて、動物の感覚についてまず考えてみましょう。動物は自分がどう感じているのか、どこにいるのか、だれといるのか知ってます。動物はどのように自分が扱われているか知っているんです。これは科学研究に基づくものです。動物は、人とこの点で全く違ってはいないということなんです。動物は痛みも空腹も、のどの渇きもストレスも感じます。また、喜びも快楽も感じています。ともに遊ぶことの喜びも感じています。ディスカバリー

チャンネル、もしくはアニマルプラネットのチャンネルを選んでいただくと、こういった番組がたくさん流れているかと思えます。決して新しいことではないんです。そして、科学的な研究もたくさん行われています。動物に感覚があると疑う人、その人はぜひ科学的な文献を見てください。必ず科学的な根拠がそこにはあります。

【スライド6】【スライド7】【スライド8】



【スライド9】

じゃあ、ちょっとそういった側面、動物の感覚について見てみましょう。

鳥には人と同じようにそれぞれの性格がある。正しいと思う人、手を挙げてください。すばらしいですね、皆さん正解です。

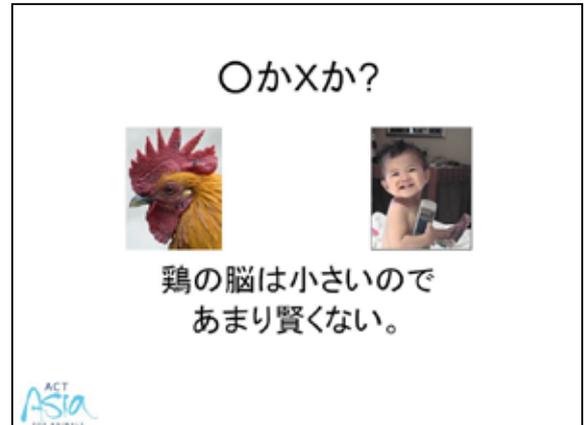
鳥にも、やはりペキオダーと呼ばれるヒエラルキーがあります。そのヒエラルキーの中で、秩序の中で自分を置いています。また、鳥は顔を覚えています。100種類の鳥の顔を理解して、知っているんです。そして、社会的なランキングがあります。また、例えば非常に人づき合いのいい社交的な鳥もいれば、恥ずかしがりの内気な鳥もいるんです。【スライド9】



【スライド10】

鳥と卵、お互いに話すことができる、そういう人手を挙げてください。鳥と卵はお互いに話すことができます。2人の人が手を挙げましたね、挙げた人は正解です。鳥というのは、母親として子供を育てることに、卵の中

にいるときから子供を育てることに一生懸命専心しています。鳥と卵はお互いに話してるんです。もちろん卵からかえったときに、母親はひな鳥に対してどう食べるのか、どう飲むのか、それから敵をどう避ければいいのかを教えていきます。【スライド10】【スライド11】



【スライド11】



【スライド12】

次はどうでしょうか。豚は汚いことを楽しんでいる、そう思う人、それが正しいと思う人は手を挙げてください。獣医さん、間違いですよ。実際にこれは間違い、ペケなんです。豚は汚いことを楽しんではいないんです。実は豚ってきれいな動物なんです。十分なスペースがあれば、絶対自分が住んでいるその空間、食べてる空間で排せつはしません。こういった泥箱好きですけども、これは体を冷やすためであって、汚くなるために泥箱に入ってるんじゃないんです。【スライド12】

犬は豚より利口である、そう思う人手を挙げて。3人ですか、手を挙げた人。これは間違いです、ペケです。豚も犬と同じぐらい利口なんです。犬より利口だとは言わないけれども、ドブルムによりますと、豚は3歳の子供よりも高い知恵を持っていると言われていました。

【スライド13】

○か×か？

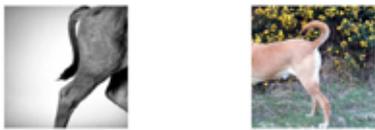


犬は豚より利口である。



【スライド 13】

○か×か？



牛は尻尾を
犬の尻尾ように使えない。



【スライド 14】

○か×か？



牛は単独行動する
動物である。



【スライド 15】

どっちの動物が？



知性・自信・経験などの特性が
社会的階級の上下関係を決めるのに
役立つ動物はどっちか？



【スライド 16】

じゃあ、これはどうでしょうか。牛は単独行動をする動物である。丸かペケか、どうでしょうか。それはそうではありません。クパナの研究から、人間と同じで、牛も小さな仲間と一緒にグループをつくることを好むと、非常に近い仲間ですね。お互いになめあったり、そして人間ではありませんけれども。ですから、まさに人間と同じようにグループをつくって行動する動物であるということが言われています。【スライド 14～16】

○か×か？



象は仲間が死ぬと
すぐに立ち去る。



【スライド 17】

動物は仲間が死ぬとすぐに立ち去って、そのことを忘れてしまうと。そうだと思う手を挙げてもらえますか。いわば仲間が亡くなると、それに対する悲しみを示します。そして、枝を取ってきて、その体をカバーしたりします。【スライド 17】

魚は??



- ・ 知性がある
- ・ 道具を使える
- ・ 長期記憶力がある
- ・ 複雑な社会構造をしている
- ・ 鳥や哺乳動物のように痛みを感じる。



【スライド 18】

魚です。魚についてはどうでしょうか。魚はかなり誤解されていると思います。全く知性がないとか、何も痛みを感じないとか、そうではありません。鳥、あるいは哺乳類と同じで、魚も痛みを感じます。【スライド 18】

もう一つ、なぜ動物福祉を考える必要があるのか、これは社会的な問題なのか。動物は感覚を持っている、感受性を持っているということで、これは個々の人間の感受性、感情の発達にも関係するところです。【スライド 19】

動物福祉は社会的な問題か？
Is animal welfare a social concern?

- ・ 動物をケアすることは、個々の人間の感覚力と感受性を発達させる。
 - 我々が動物をどう扱うかが、我々が人間社会で他の人間をどう扱うかに反映しているのだということが、ますます明らかになってきている。
 - 多くの研究が、動物いじめと人への暴力行為との関連を明確にしている。
 - 動物虐待はすでに人格障害の診断基準である。深刻な動物虐待は少年犯罪のリスク要因である。

 19

【スライド 19】

動物の福祉と管理に関する法律
Welfare and Management of Animals Act
(1973年10月5日)

第1条: この法律の目的は:

- 国民の間に動物を愛護する気風を招来する。
- 生命尊重、友愛および平和の情操への貢献。
- 動物虐待の防止、動物の適正な取扱い、その他動物の愛護に関する事項に対応する。

第3条: 政府と地方自治体は以下のことを努力する。

- 動物の愛護と適正な飼養に関し、相互に連携を図りつつ、学校、地域、家庭等における教育活動、広報活動等を通じて普及啓発を図る。

 21

【スライド 21】

動物福祉は社会的な問題か？ (2)
Is animal welfare a social concern?

- ・ 良いマネージメント(管理)は、より健全な社会をつくる。

以下のような利点がある。

- 動物をケアする人を肉体的、精神的により健全にする。
- 反社会的行動を減少させる。
- 人畜共通感染症の制御。
- 抗菌薬抗体の拡散のリスクを減少させる。

- ・ 伴侶動物と質の高い生活をするには、経済にも利点をもたらす。
 - 福祉の充実が治療の必要性を減らすので、伴侶動物を飼うコストを下げる。

「国家の偉大さと道徳の進化は、動物の扱われ方で判断できる。」
- マハトマ ガンジー

 20

【スライド 20】

次のプレゼンテーションで動物と環境ということでも話をしますが、ここで確認したいのは、この精神科領域において、動物虐待というのは、いわば一つ、人格障害の診断基準になっているということです。動物虐待をするということ、これが非常に危険な兆候であると。そして動物をケアするという、これは社会にとって役に立つのかということですが、身体的な、また心理的な、また、より安全な健全な社会をつくることになります。

例えば動物をしっかりとケアしていくと、特に下のところですね。これはもう60年も前になりますけれども、国家の偉大さと道徳の進化は、動物の扱われ方で判断できるというふうに述べています。まさに、これは真実だというふうに考えます。【スライド 19】【スライド 20】

ということで、日本のこの動物愛護法を見てみましょう。これはもう40年以上になりますが、あるいはそれ以上前ですが、政府のほうで実際に動物愛護ということを考えています。ほとんどの国において、私のところもそうですが、こういった動物愛護法があります。これは、ただ最初のステップです。これは紙に書かれたものであって非常にいいツールではありますが、使わなければいけないものであり、これを実行しなければいけない。我々全員がここでこの法律に書いてあること、これを実行し

ていく必要があります。そして社会を変化させていくということで、また、法律においてもその改正が必要であるということになります。

ここで、特にヒューメイン教育に関連するところを抜き出しました。まず第1条ですが、この法律の目的は生命尊重、友愛及び平和の情操への貢献であるということです。そして第3条、これもヒューメイン・エデュケーションに関連するところであります。こういった関連するところであります。こういった活動を政府が必ずしもすべていつも行っているとは思いませんけれども、もっとさらにこういった活動、努力を広げていくことが必要だと思います。日本全体において、こういったことを実現していくということです。

また、動物愛護週間が日本にもあったようですね、ほかのところでは見ないところです。これはどんどん世界全体に広げていくべきものだと思います。これも法律に関連するものですが、人間の責任ということで、先ほどの条項にも関連するところです。そして、罰則ですね。実際に何か悪いことをした人を罰するだけではなく、ほかの人たちに対して、そういうことをしてはいけないということを強調する必要があります。

例えばインドの場合ですが、非常にいい動物愛護法があります。しかし、これは何年も前に行われたものですが、ただ動物虐待をしたからといって、そこで払う罰金はもうコーヒー1杯にもならないということで、だれも気をつけない、何も気をつけないんですね。失うものが全くないからです。ですから、しっかりと罰則を与えるということも重要であります。【スライド 21】

そして、この動物愛護、あるいは動物保護がなぜ重要か、つまり動物の福祉がなぜ重要かということですが、これは身体的、また精神的なニーズにこたえることが動物福祉にとっては重要だということです。そのカバーすべきところ、いろいろとあるわけですが、ここでは時間がありますので、少し絞り込んでいきたいと思っています。

動物の福祉と管理に関する法律(2)
Welfare and Management of Animals Act

第7条：動物に所有者または占有者は、命あるものである動物の所有者または占有者としての責任を十分に自覚し、その動物をその種類、習性等に応じて適正に飼養し、または保管することにより、動物の健康および安全を保持するように努める。



22

【スライド 22】

良い動物福祉に必要なもの:
Good animal welfare requires:

1. 病気の予防、獣医学的治療
2. 適切なシェルター、管理、栄養
3. 人道的な扱い、人道的な屠殺

American Veterinary Medical Association/World Organisation for Animal Health(OIE)



25

【スライド 25】

動物の福祉と管理に関する法律 (3)
Welfare and Management of Animals Act

第44条

1. 愛護動物をみだりに殺し、または傷つけた者は、一年以下の懲役または100万円以下の罰金に処する。
2. 愛護動物に対し、みだりに給餌または給水をやめることにより衰弱させる等の虐待を行った者は、50万円以下の罰金に処する。
3. 愛護動物を遺棄した者は、50万円以下の罰金に処する。



23

【スライド 23】

福祉の評価
Measuring welfare

福祉の評価インプット

動物に提供しなければならない基本的な条件がある。
しかし、良い福祉を保障するには、その動物の状況とその動物がどのように環境に反応するかを考えなくてはならない。(アウトプット評価)



26

【スライド 26】

ここに書いたものは非常に基本的なものです。これだけで十分ということではないですけども、まず最初のスタートのポイントだと言えます。ヒューメイン教育は、しっかりとした福祉の基準を支えることです。そして、実際に教育を通してこういった動物福祉を実践していくということが重要です。動物に対して責任を持つということは、例えば動物が死ぬときには痛みがないように、恐怖がないようにするという、これも我々の責任、ケアする立場の責任となります。【スライド 22】【スライド 23】

福祉を評価することになるわけですが、二つのポイントがあります。一つには、実際にどういったものを与えることができるか、これはインプットですね。あるいはリソースの問題だと言えます。シェルターであるとか十分なスペース、水、そして適切な食事、すべて動物に与えるものということ。これは与えなければいけない。もう一つの福祉の側面として、アウトプットというのがあります。動物がそういった与えられたものに対してどういう反応をしているかですね。これも評価しなければいけない。それがまさに動物の真実の状態をあらわしているからです。【スライド 24】【スライド 25】【スライド 26】

福祉の評価をする際考慮すべき事項
Considerations when measuring welfare

- 動物の福祉を提供するとは、肉体的精神的ニーズに応えるということである。
- 動物福祉には多数の見地があり、それは人間の価値観と経験に影響されるものである。
- 動物福祉の評価の尺度もさまざまである。(健康、出産、行動、生理現象など諸々)

American Veterinary Medical Association



24

【スライド 24】

Five Freedoms
5つの自由

1. 飢えと乾き、栄養失調からの自由
- 健康と活力を保つための新鮮な水食事がとれるようになっている。
2. 不快からの自由
- シェルターや快適な休息場所を含む適切な環境が提供されている。

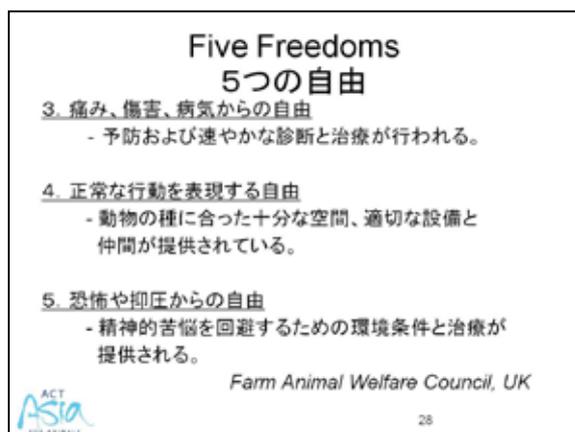


27

【スライド 27】

恐らく五つの自由、聞いたことがあるかと思います。日本の教育マテリアルの中でも述べられているわけですが、こういった動物福祉について話をするにしても、まず重要な点です。人間として、我々の義務として、こういった動物に対する我々の提供する義務があると。

まず一つ、犬、猫にかかわっている人が多いかと思いますが、まず常に水、食事等にアクセスできるような自由、そして不快のない自由ということです。十分な温度、また換気、スペースといったようなものを提供することが必要になります。動物保護の組織にしても、非常にたくさんの動物を扱う、狭いところで扱うのは難しいとは思いますが、こういった原則が非常に重要だということです。【スライド 27】



【スライド 28】

3番目の自由ですね。これはもちろんワクチン接種をするということ、そして痛み等、病気があれば病院に連れていくというようなことです。何か調子が悪いということになると、どうも動物の状態が違う、何かおかしいということを感じます。犬自体には犬のニーズがあって、人間とは違うということで、人間としてはベストの状況を提供しようとするわけですが、ただ人間と犬とは感じ方が違うということですね。つまり、動物種によってニーズが違うということも理解して、こういった原則を理解する必要があると思います。

そして、恐怖、抑制からの自由ということですね。何か恐怖を感じている。例えば子供が動物をいじめる、からかうといったような場合。我々はある意味ラッキーですね。奈良に行ったんですけども、数日前、奈良に行きました。皆さんも行ったことがあるかと思いますが、非常にたくさんのシカがいます。自由に公園の中で、いわば聖なる動物として扱われると。子供たちですが、子供たちがシカを、いわばいじめるわけですね。あるいはからかうといいますが、そういうふうに動物をからかう、あるいは遊ぶということが、必ずしも動物にとってはよくないことかもしれない。つまり子供がそういうことを

するということについて、動物の反応、期待するものが違うかもしれないということを理解する必要があります。【スライド 28】



【スライド 29】

ここで少し日本の例を挙げたいと思います。五つの自由に関連するものですが、こういった国においても非常にたくさんの事例があります。つまり、悪い動物福祉の例ですね。こういった日本での状況は日本でも見たことがある。また、これを是正することに皆さんが関与できるかもしれない。

これは日本にあるクマ公園ですね。これは数年前に写真に撮られたものですが、ここで非常に不快な状態に飼育されている。コンクリートですね、コンクリートの床です。また、正常な行動を示すことは、こういった状態ではできません。ですから、五つの自由ということを考えて、そして今、動物がどういう状況にあるかということを考えれば、果たしてその動物の福祉が達成されているかどうか、その判断がつくと思います。

【スライド 29】



【スライド 30】

これは上のほうですね、イルカショーです。これは決して正常な行動とは言えません。こういったトレーニング訓練が行われているのか、場合によっては残虐な方法が使われているかもしれない。イルカが通常こういうところで住んでいるわけではありませんし、またスペース

も少ないということで、水にしても、あるいは食料にしても、自由がとて守れてるとは思いません。

これは水族館ですが、プライバシーがありません。通常、こういった状況では住んでいないわけです。非常にストレス、恐怖を感じるという状況に置かれています。

【スライド 30】



【スライド 31】

こちらですが、これは日本でのホッキョクグマの例です。ウェブサイトで資料として渡されたものですが、実際に行ってみると、どういうふうに福祉を評価するかということですね。ウェブサイトのほうでも非常に細かく説明されています。ここに書かれていますように、いろんな自由の条件が達成されていない、正常な行動がとれない、不快である、また恐怖を感じる、ストレスを感じるといった状態にあります。【スライド 31】



【スライド 32】

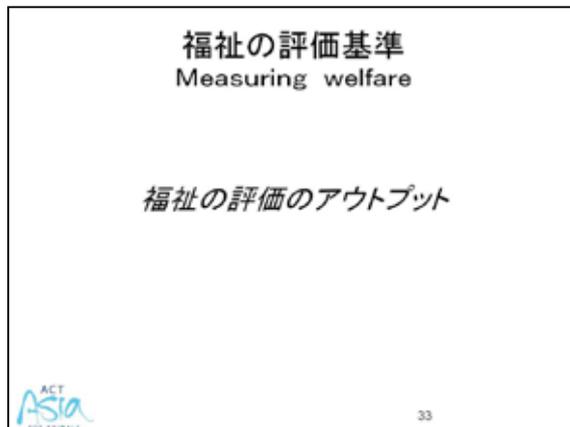
これはアメリカのウェブサイトからとってきたものです。闘牛ですね、よく御存じかと思いますが。ここで申し上げたいのは、これは大変悲しい残念な写真ですね。非常に多くの恐怖、苦痛を味わっていると。最終的にはマタドールがやりで突いてということで、これはもう恐怖、また苦痛を味わっていることは明らかです。

これもまた、ウェブサイトを読んでいただくといんですが、ブライアイズという牛ですね。今こういったやりで突かれて、そしてもう息も絶え絶え、そして何とか

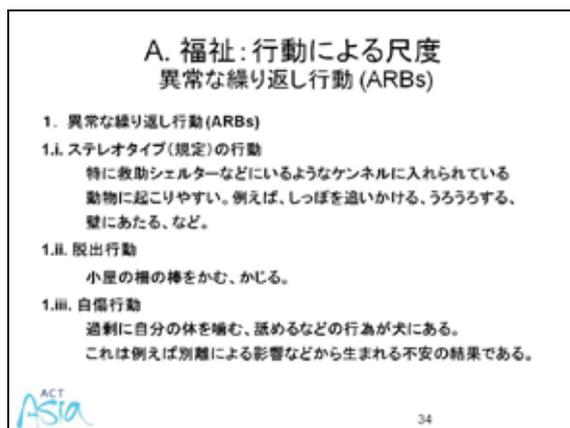
の恐怖、苦痛から逃れようとしているということです。壁のほうに、いわばぎりぎりのところに逃げ回って、そしていろんな人からなじられる、あざけられるということが行われている。そして、この写真で上に人が見えなくても、この自由が、いわば侵されているということ、そこに人間がかかわっていると。ほかの動物をあざ笑っているわけです。こういったことを続ける、あるいは受けとめることがいろんな国、地域において行われているということがあります。

ですから動物愛護、あるいはヒューメイン教育という観点から、このヒューメイン教育を、あるいはプログラムを実行していくという場合に、実際には動物ではなく、そこに参加している人間の教育でもあるというふうに言えます。より思いやりのある、また、暴力の少ない社会に向けての教育であるというふうに言えます。

【スライド 32】



【スライド 33】



【スライド 34】

それでは、ここで簡単にアウトプットの評価ということで考えてみましょう。

これは、より正確に動物の福祉を評価している方法だというふうに言えます。一つ標準的な方法としまして、動物の行動を見る、評価するという方法があります。ここにリストを挙げていますけれども、異常な行動ですね。動物が自分の置かれた環境、条件に対応できないときに

どうなるか。コンパニオンアニマルでもそうです。ウェブサイトの資料がありますので、いろんな評価方法について、あるいは評価について説明がありますが、ここで重要なのは、ですから動物のどういう行動が正常であって、そしてそれが異常になった場合、どういった福祉が妨げられているか。例えば動物においても、また、その他のところにおいてもそうであります。

【スライド 33】【スライド 33】



【スライド 35】

例えば、これはさくをかむということで逃げようとしている。動物がストレスを感じているということです。二つのはっきりとした状況がここで示されています。

【スライド 35】



【スライド 36】

A. 福祉：行動による尺度
攻撃的、怖がる行動
 Aggressive and fearful behaviour

2. 攻撃的な行動

- 不適切な、強制されたグルーピング(複数)で飼われている動物では、動物間で攻撃的な行動をする。
- その他の要因は不十分な社会性や恐怖などがある。
- 犬同士の攻撃性について、最も多くペット行動カウンセラー協会に報告される問題である。

3. 怖がる行動

- 恐怖が継続的に存在している、そして恐怖から逃げられない場合、それは重大な苦悩の原因となる。
- 恐怖心に関連する行動は、ケネルにいる犬にとって、悪い福祉状況の行動的尺度である。

ACT Asia

【スライド 37】

もう一つ、動物が恐怖、苦痛を感じているという場合、逃げようとするわけですが、例えばグループハウス、シェルターなどで見られる行動です。こういった行動は、すべてこの五つの自由に関連する、そこからスタートしていると言えます。きょうはカバーしませんけれども、その他の動物福祉の尺度として、例えば医療、病理的なグルココルチコイドを評価するとか、あるいは全身状態、心拍数を診るといった方法もあります。それもまた、ハンドアウトのレポートのほうで詳細が書いてあります。英語のものなんですけれども、恐らくまた翻訳していただけるでしょう。

したがって、人として、我々はもっと動物に対して責任を持たなければいけないということなんです。ヒューメイン教育をすべての子供たちの学習の中に取り込む必要があります。これは動物を育てるだけでなく、我々の周りにいる人たちとの接し方にも重要な意味を持ってまいります。【スライド 36】【スライド 37】

B. 福祉：精神的側面の尺度
 Physiological indicators of welfare

C. 医療・病理学的尺度
 Clinical and Pathological Indicators

(Companion Animal Welfare Council, UK)

ACT Asia

【スライド 38】

ヒューメイン教育の必要性
 The need for humane education

- 若い人たちに人生そして社会の中での動物の役割を理解してもらい、動物福祉に前向きに貢献してもらうためには、動物福祉教育を子どもの公教育に正規に組み込むべきである。
- ヒューメイン教育は、動物の役割と我々が尊厳を持って動物そしてまたその動物の住む環境に接するというのを、我々の生活の中に浸透させる。
- ヒューメイン教育は、若者を活動的で責任感のある社会人になることを奨励する。
- 優しさと動物への虐待をさせないことを促進することで、先生は社会人としての姿勢と技能を見本とすることができる。

ACT Asia

【スライド 39】

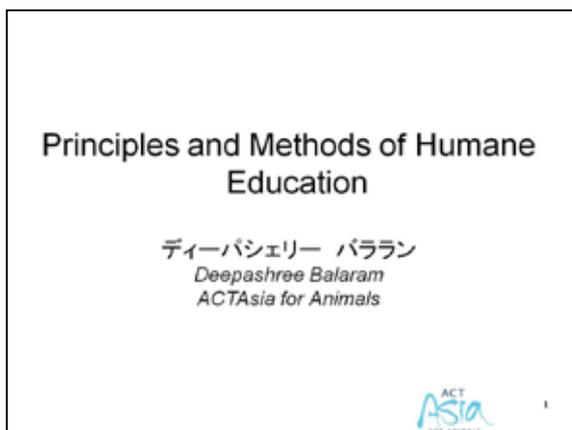
そこで、短いビデオを見ていただきたいと思います。ヒューメイン教育に関するビデオです。これはヒューメイン・エデュケーションとして、一体、我々が何を達成しようとしているのか、真のヒューメイン・エデュケーションとは何なのか、人に対する思いやり、動物だけでなく、人に対しても思いやりを持たなければならないと

いうことを示しています。ちょっとこれを見ていただきたいと思います。

(ビデオ上映)

このビデオですべてのことが語られていたと思うんです。これはすばらしい方法だと思えます。我々が何を達成しようとしているのかを示しています。

Principles and Methods of Humane Education



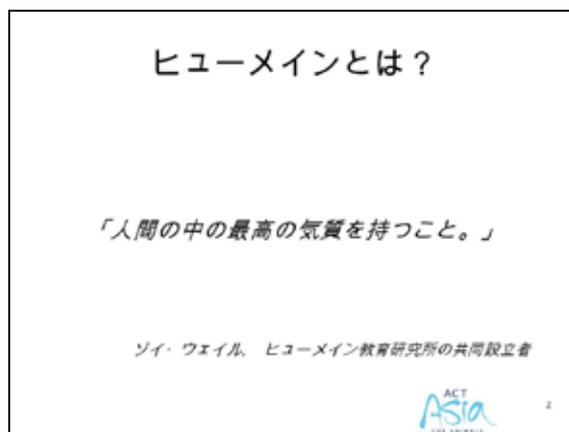
【スライド 1】

そこで、ここからヒューメイン・エデュケーションの原則、原理を少し見ていきたいと思います。プログラムをどのようにデザインしていくか、それからどういったアイデアを取り込めばヒューメイン・エデュケーションのプログラムが組めるのか、そういったところをお話をしていきたいと思います。

皆さん、いろんなバックグラウンドを持ってる方が集まってらっしゃると思います。教師の方もいれば、動物愛護に携わってらっしゃる方もいらっしゃると思いますので、余り深くはお話はしませんが、原則をお話したいと思います。

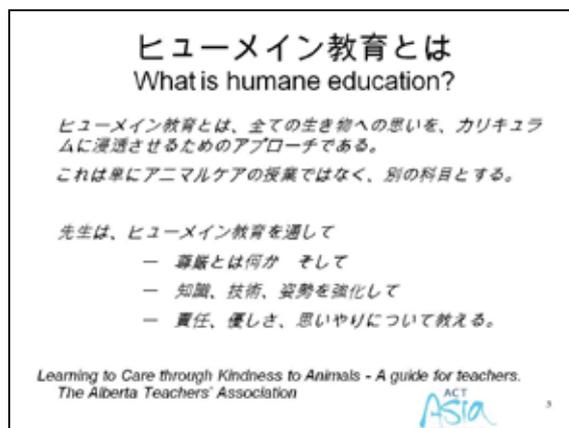
ヒューメインの定義をもう一度お話をしたいと思えます、とても簡単です。人間としての最高の資質を持つことなんです。でも、これが我々がやろうとしていることなんです。優しさ、勇気、情熱、我々が人間として最高の資質を持つこと、それがヒューメインであるということなんです。【スライド 1】【スライド 2】

このスライドでは、ヒューメイン教育とは動物に対する教育だけではないということです。動物保護だけではなく、動物の保護も環境保護も人権も、それから尊重も、すべてが統合されたもの、これがヒューメイン

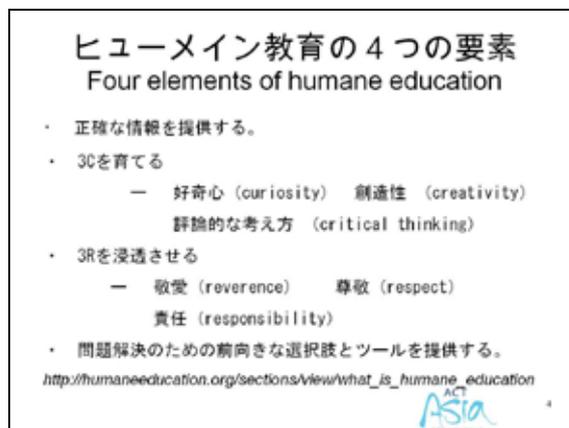


【スライド 2】

教育です。よりよい社会をつくるための教育なんです。こういった側面をすべて包含するのがヒューメイン教育です。【スライド 3】



【スライド 3】



【スライド 4】

先生によって、先生がこれを教えるときに、先生はモデルを示さなければなりません。いろんな原則を一つに統合したモデルとして、先生は存在する必要があります。ヒューメイン教育をする人はファシリテーターです、そしてはぐくむ人です。人々にいろんな問題を考えてもらおう、ヒューメイン教育は人に押しつけるものではないです。論理的に考え、自分で決定する。そのためのツールを提供するのがヒューメイン教育者です。非常に

幅広い役割、そしてとても難しい役割ではありますが、たくさんの資源を使うことができます。また、いろんなプログラムが既にいろんな国で実施されていますので、それを使って、それを参考にしながら、自分のプログラムを始めることも、また自分のプログラムをさらによいものにすることも可能なんです。【スライド 43】

ヒューメイン教育の特色

Characteristics of humane education

1. 「前向き」な考え方
若者に自分たちの住む広い世界と関わりを持たせる。
2. 「行動すること」が根底にある
ヒューメイン教育の着地点はしばしば社会活動プロジェクトである。
3. 「学際的つながり」を育てる
ヒューメイン教育は一つの特定の概念ではない。それは賛否を超えた様々なアイデアの複合体であり、人間、(その他の)動物、そして関連するリソースについて野論的に考えるものである。



【スライド 5】

じゃあ、ヒューメイン教育が適切に行われたらどうなるのか。ヒューメイン教育とは何なのか。まず、これは前向きな考え方です。人々が自分の周りの世界とかかわりを持つことです。そのことによって、新しい視点を持つことです。私が勝たなきゃいけない、相手は負けるんだということではないです。学生として生徒として、みんなが勝てる、それがヒューメイン教育です。みんなというのは、ビオトープも動物も人もすべて含まれます。

また、学生はこういったことを聞くかもしれません。いろんな質問を先生にするでしょう。これ、私の生活とどう関係してるのと言うかもしれません。ヒューメイン教育ではこの質問は出てこないです。ヒューメイン教育とは、すべてその人の生活と密接につながりがあるものだからなんです。

ヒューメイン教育、これは行動するということが根底にあります。多くの方はプロジェクトをやったり、また、社会活動プログラムを行うことになるでしょう。というのは、行動そのものが変わるからです。人々が、今こそ行動しなきゃいけないんだ、考えて行動しなきゃいけないんだと考える、これがヒューメイン教育の特徴です。例えば学校でリサイクル活動をやったり、また、パンフレットをつくって動物実験に反対するチラシを配ったり、また、恵まれない子供のために何かの行動をする、子供たちがいろんな意味でよい行動をする、これがヒューメイン教育の特色です。

また、ヒューメイン教育というのは、一つの特定の概念ではありません。数学も理科も人類学も経済も、すべてを一つに統合することができます。

我々はCDがあります。いろんなレッスンプランが入ったCDも用意しております。これはいろんな教科の中に、いろんなカリキュラムの中に、また、いろんな学年の中に取り入れることができます。すべて英語ですが、もしコピーをしたかったら Knots のほうに連絡をしていただきたいと思います。それから、ウェブサイトでもいろんなレッスンプランが見られますので、ウェブサイトからダウンロードしていただくことも可能です。

【スライド 5】

ヒューメイン教育の特色

Characteristics of humane education (2)

4. 「身近なこと」である
自分たちの内、外、周辺に関することである。蓄積された知識は学生が消費者になったときの情報となり、どのように時を過ごすかに影響する。
5. 現在の出来事に反応した、活力あるカリキュラムを生む。
学生は人間、その他の動物、環境問題と自分たちの関連性を見出し、メディアリテラシーを発達させる。

A Case for Humane Education Tim Donahue <http://www.najs.org>



【スライド 6】

ヒューメイン教育とは、我々自身についてなんです。子供たち、学生たちは、自分の食べ物はどこから来ているのか、自分の着ている服はどこから来ているのか、何を買っているのか、それを知るようになります。我々の体の中に入ったらどうなるのか、それを意識することで、我々はより意識を持った消費者になることができます。ヒューメイン教育とは、我々の買うものに対して倫理的に考えるようになります。これ、100円だ。でも、地球にはどれだけの負担をかけてるんだろうか、ほかの国にどれだけの負担、環境コストをかけてるんだろうか、ほかの国の人たちにどれだけの痛みを与えてるんだろうかということを考えるようになります。全体的な考えを持つことができます。それによって、より人間的で、より倫理的な選択ができるようになります。

また、ヒューメイン教育はメディアリテラシーを発達させます。我々はいろんな情報、ウェブサイト、ブログ、テレビ、ニュース、みんながいろんな視点があって、いろんな情報が我々に衝突してきます。でも、必ずしも人の言っていることが正しいわけではないんです。ヒューメイン教育をすることで、そのメディアが伝えていることが正しいのかどうなのか、それを見る目も育てることができます。人の言っていることをうのみにすることはなくなってきます。ヒューメイン教育を学べば、必ずしも自分の周りの体制をただうのみに信じるということとはなくなるんです。これはいいことなんです。やはり一人

一人の個人が、この地球をよりよいものにしなければいけない。自分にだけ焦点を当てるんじゃなくて、もっと広い視点を持つことが必要です。そういったことをはぐくむのがヒューメイン教育です。【スライド6】

ヒューメイン教育は動物のことだけじゃない
Humane Education is not just about animals

ヒューメイン教育は、以下の側面から、我々の持つ課題の総合的な対応策を見つけさせてくれる。

- I) 人権
- II) 環境保護
- III) 動物愛護

これらは、健全で公正な社会において、連携した、完全無欠なものである。

Institute for Humane Education (IHE) 

【スライド7】

ヒューメイン教育は「考えさせる」
Humane Education encourages thinking

「ヒューメイン教育とは、正解を教えるためのものではない。答えを自分たちで追究することを奨励するものである。

一つの正しい道をしめすものではない。

各人が情報をもとに、賢く思いやりのある選択ができるよう、オプションを示すものである。」

Institute for Humane Education (IHE) 

【スライド8】

もう一度、これ出しましょう。ヒューメイン教育は動物のことだけじゃないんです。環境も人も、そしてそのつながりを考えることがヒューメイン教育です。これも非常にすばらしい方法です。ヒューメイン教育を説明するときに、これもいい言葉だと思います。ヒューメイン教育とは自分で答えを探す、それを奨励するものだけということです。そして、オプションを示すものです。なので、一人一人の個人が情報をもとに懸命な選択ができるようにすること、これがヒューメイン教育なんです。自分が考えられる、何が考えられるのか、それを示すものがヒューメイン教育なんです。ヒューメイン教育というのは、何かプログラムを実行しようと思ったときに、なぜヒューメイン教育が必要なのか、それを周りの人に伝えていくことも大事で、そのときにもこの言葉は大事です。【スライド7】【スライド8】

動物虐待がよく起きています。特に家庭内暴力、DVとの関連、それからまた、他の薬物乱用であるとか武器を持つとか、そういった犯罪行動と動物虐待が結びついていることもよくあります。ここに書いてありますよう

動物虐待とその他の暴力の関係
Link between animal cruelty and other violence

- ・ 動物虐待とその他の暴力的行動には関係があるという研究結果が増えている。
- ・ 暴力をふるう人には、子どもそして思春期に頻繁に深刻な、そして複数回の動物虐待の歴史を持っている。
- ・ 動物虐待は、子どもが暴力に走る兆しがあるという警告であることが広く認められている。
- ・ 動物をいじめる多くの子どもに、いじめられた経験がある。



【スライド9】

に家族内での暴力、また、子供の虐待、パートナーの虐待が、実は動物虐待歴を持っている人に起きることが多いんです。なので、大事なことは、いろんな組織が、いろんな団体が手を組んで、こういったことにつながりをはっきりさせていく必要があるんです。動物虐待をするということは、人に対するいじめにもつながるといことなんです。【スライド9】

動物虐待とその他の暴力の関係
Link between animal cruelty and other violence (2)

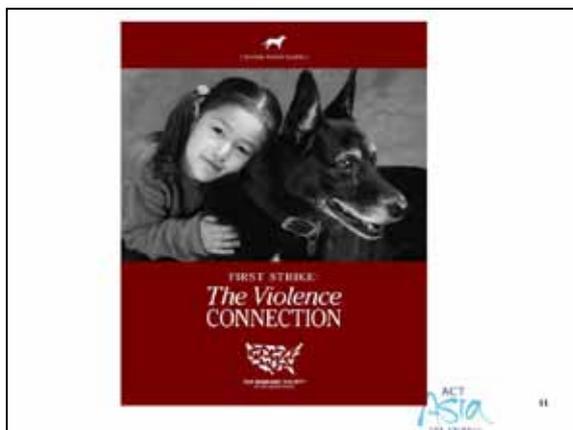
- ・ 動物虐待を目撃した子どもも暴力的になる危険性がある。
- ・ 家庭のペットはよく家庭内暴力の対象となる。
- ・ 家庭内暴力の被害者の多くは、ペットや家畜の安全を心配して、虐待から逃げられない状況にいる。

Learning to Care through Kindness to Animals - A guide for teachers.
The Alberta Teachers' Association 

【スライド10】

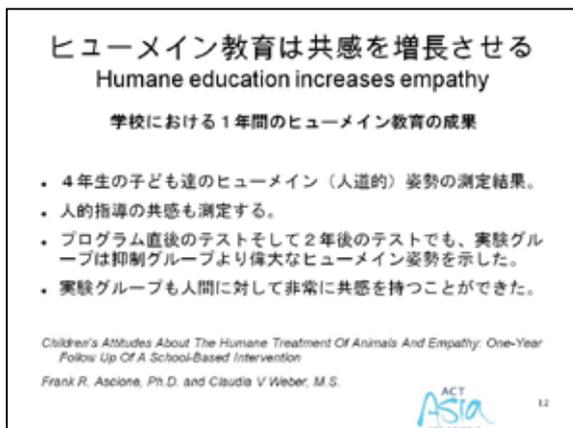
また、こういったこともわかっています。これは家庭内の暴力との関連でわかっていることです。最後の言葉、非常に怖いですがね。家庭内暴力の被害者の多くは、ペットや家畜の安全を心配して、虐待から逃げられない状態にある。なので、人の保護と、それから動物の保護を、このシナリオの中でどちらも取り込んでいくことが大事だということなんです。【スライド10】

ヒューメイン教育によって暴力の輪を断ち切ることができます。これはアメリカの団体、ファーストストライクというすばらしいプログラム、アメリカのヒューマンソサエティーがやったものです。動物虐待に対するワークショップです。いろんな利害関係者が参加をしています。この中には教育者も含まれます。獣医、医師、法律家、司法家、さまざまな人たち、実際に虐待を目にする人たちが集まって、ほかの組織に自分たちが経験したことを話します。



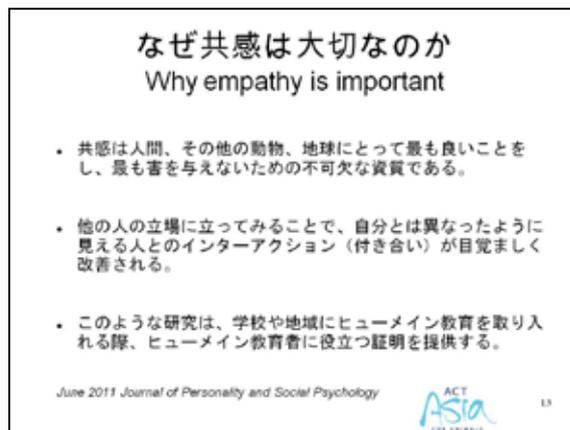
【スライド 11】

例えば医師が子供の虐待を目にしたとします、子供が運ばれてきたときに。そうすると、その家にはペットがいる。そしたら、関連する獣医さんとか動物保護の団体にも連絡をします。子供の虐待と、それから動物の虐待が同時に起きている可能性があるということで、それに対する連携を深めていくということです。動物が家の中で非常に残酷な扱いをされている。それを目にした人は、ソーシャルサービスや地方の自治体に連絡をします。そうすることで、家族内に動物だけではない、他の暴力が存在しないか目を向けてもらいます。家庭内暴力、それから動物の暴力といったもの、それにかかわる人たちが一緒に手を組んでいるプログラムです。ほかの多くの国でもたくさん行われていると思うんですが、日本にこういう組織があるでしょうか。まだないんでしょうかね。【スライド 11】



【スライド 12】

また共感性、これもやはり自分を人の立場に立って考える大事な資質です。これは大体9歳から10歳向け、4年生の子供たちのプログラム、その結果を測定したものです。ヒューメイン教育を行うことで、動物に対する共感を増長させるだけでなく、他の人に対しても共感性を高めることができました。繰り返しが大事だということで、これ1年間続いて行われている継続的なプログラムです。大事なことは、一貫性を持ったプログラムで、



【スライド 13】

何度も何度も復習をするということなんです。そうすることでいろんな活動が続いていきます。繰り返しをする、復習をすることで、それをよりよく覚えておくことができます。なので、何回か繰り返して授業をする必要があるということです。共感性というのはとても大事です。特に世界の市民となるためには、共感性を持たなければなりません。自分とは違った人たちがこの地球に住んでいます。共感性というのは、国によって人々は違うんだ、また、社会階級が違えば、文化が違えば、人は違います。その人たちの立場に立って考えられるということです。

【スライド 12】 【スライド 13】



【スライド 14】

そして、ヒューメイン教育ですが、学校、あるいは政府に働きかけるということです。子供たちは非常に重要なスキルを身につける。後になって、ほかの人を助けるというスキルを身につけることになります。ヒューメイン・エデュケーションということで、これは余りスタディーに私はかかわっていないですが、成績を上げるということです。これは当然だと思います。子供に、動物に関心を持つ、また、愛情を持つということになれば、より多くのことを学ぶようになるでしょう。そして、ヒューメイン・エデュケーションのプラン、それを実際に科学、あるいは英語、算数に組み入れていくということで、子供はよりいろんなことを覚えて、そしてそれを

実行していくということになるわけです。【スライド 14】

ヒューメイン教育は成績を上げる
Humane education can improve grades

- ジェフリー・フェスラーは、米国ヒューメインソサエティより、2008年度の『全国 KIND先生』に任命された。
- 彼の4年生のクラスは安定的にフロリダ州の公立学校成績評価（FACT）で平均以上の成績を取った。
- フェスラーはこれはヒューメイン教育の成果だと言っている。
- ヒューメイン ソサエティ ユースのステファニー・クラーク氏は、以下のようにコメントしている。

「子どもはもともと動物への興味を持っているものだ。動物を授業に入れることで、子どもは楽しんで成果を上げながら、彼らの関心を最高レベルにすることができる。それが彼らの学習を助ける。」

<http://www.languagestudies.com>



14

【スライド 14】

他に調査の示すもの
Research also shows:

ヒューメイン教育は、

- 動物虐待行動を変える。
- 一回の長時間よりも、頻度のある訪問の方が効果的。
- ロールプレイや その他インターアクティブ（相互作用）な方法で教えるほうが効果的。



15

【スライド 15】

実際、アメリカのある学校においては、すべての教育、科目において、ヒューメイン教育を基本として使うということを行っているところがあります。こういったリサーチ、御存じの方がいらっしゃるかもしれませんが、これはカレッジ、大学生を対象にしたものであります。この結果を見ると、やはり行動が変わってくるということを示しています。動物愛護、あるいは環境団体に入ったり、あるいはベジタリアンになったり、つまり工場農場においてどういった動物、扱いを受けているかということを知った後、その行動が変わるということがヒューメイン教育の一つの結果、目標であります。

そして、ヒューメイン教育は、何度も何度も同じ人、同じ場所で繰り返す必要がある。そのことによって、より大きな効果を発揮することになります。従来、皆さんもそうだと思いますが、教師が一方向的にしゃべって、生徒はじっと座ってそれを聞いていると。こういった伝統的な形は、ヒューメイン教育ではうまくいきません。やはり双方向で一緒にディスカッションする、物事を考えていく必要があります。ロールプレイングですが、これが非常に効果的であるということが明らかになっています。いろんなこと、物事を考えることができます。

【スライド 15】

実施にあたっての検討事項
Some practical considerations

- 子ども達に回答するのにもっと時間が必要かもしれない。授業の後にジャーナル（写真や記事、質問や検討事項など）でフォローすることが最良かもしれない。
- 年上の学年には時間を延長する。いくつかの課題は彼らの信じていたものを揺るがしたり、カリキュラムの内容によっては更なる議論を必要とするものもある。
- 動物に対して不適切な行動をしたり、個人的に援助が必要な子どもに対応できるようにしておく。
- 最初の週にバインダーとその他必要なものを配布する。



16

【スライド 16】

実施にあたっての検討事項
Some practical considerations

- 多くの授業は既存の通常のカリキュラムに連動させることができる。学校の職員と協力して、どのように各授業を連動させるかを検討する。
- この授業を受ける大半の子ども達や若者は、ペットで個人的に動物と触れる経験がある。この動物を飼った経験がヒューメイン指導者にとって効果的なツールになる。
- 子ども一人一人が参加できていることを確認する。円になって座ると学習するときも討論するときも、全員が参加しやすい。



17

【スライド 17】

このスライドですね。いろんなレポートであります。例えばヒューメイン教育ということで幾つかの点を考える必要があります。まず、必要には時間ですね。プログラムにどれだけ時間をかけるか、ヒューメイン教育は既に自分が信じていること、また、世界がどうであるかということに関して、いわばチャレンジとなります。生徒に対して、子供たちに対して、そういった投げかけをするということは、そこから疑問を沸き起こすということになる。それに対して答えていくには非常に時間がかかる、時間をかける必要があるわけです。

ここでもう一つ言いたいのは、これも明らかで、リサーチから明らかですけども、いろんなレッスンですね。ヒューメイン教育は、今あるカリキュラムに組み込んでいくことができる、そのほうが学校においてはやりやすいでしょう。

2番目の点として重要なのは、すべての子供を巻き込むということです。また、より相互的に、インタラクティブに行っていくと。例えば半円形に座って、実際に子供たち……ながら、つまりだれも取り残し、積み残しの子供がいないようにして進めていくことが重要です。

【スライド 16】【スライド 17】

何が効果的か？

What will work for you?

- ・ 人と、その人の動物への考え方を考えようとする方法はたくさんある。
- ・ その人の状況に合った、最も効果的な方法を見つける。
- ・ 既存の素材の中から何が使えるかを定める。世界中から膨大な量の素材がある。
- ・ ニーズにあうように修正する。必要な場合は新たに素材を作る。
- ・ いつもこれが長期の解決方法であることを念頭に入れておく。結果は何年も見えてこないかもしれない。



【スライド 18】

じゃあ、こういった正式な、あるいは公式な教育であるのか、あるいはもっとパブリックな形であるのか、これはその状況によって変わってきます。場所が変わって、その環境の中でうまくいかないということもあるでしょう。そうすると、こういったニーズがあるのか、そのうまくいかない理由は何なのかということの評価して、プログラム、計画を変えていく必要があります。それからソースですね。こういったプログラムをするためには、リソース、これは人為的なリソースも含めて非常に重要となってきます。福祉に関するものですね、いろんな人がここで関与することができます。【スライド 18】

ヒューメイン教育の種類

Types of humane education

1. 啓発プログラム「動物愛護週間」
2. 学校/大学での公式教育
 - a. 独立した教科として
 - b. 理科、数学、文学、公民など現行の教科に組み込む
3. 課外活動としての非公式教育
4. 教育の中での動物の活用



【スライド 19】

これは少し違うタイプのプログラムですが、ヒューメイン教育のプログラムの一貫です。いろいろなオーディエンスですね。学校の子供だけではなく、例えば成人、大学生、それから成人の中でもペットオーナーを対象にするといった形で、いろんな形でヒューメイン教育を展開していくことができる。また、事業の一環として、課外活動として行うこともできます。

そして、最後ですね。動物に関する、教育の中で動物をうまく使っていく、動物実験が一つあります。これは学校の教育、大学の教育でも使われるわけですが、動物を使って実験をすると。多くの場合、必ずしもその必要

はないと。例えばラット、ネズミにせよ、あるいはゴキブリにせよ、インドではそういうことはネズミですね。ゴキブリ、虫等を解剖して、クロロホルムに入れてということで、動物が苦痛を感じるだけではなく、子供も傷つくわけです。そして科学が嫌になってくる、こんなことをするんだったら嫌だということなわけです。それが、例えば動物実験の一つの危険性であります。ですから、例えば感覚もなくて、そしてそのまま解剖して、そのまま捨てるといったようなことが行われているわけです。【スライド 19】

内容 Content

- △プロジェクトマネジメントの要領でヒューメイン教育プログラムを開発
- △「効果的」なヒューメイン教育プログラムを開発

↓

The APE Approach
APE方式



【スライド 20】

APE方式とは？

What is APE Approach?

- △ Analysis 分析
- △ Preparation (& Implementation) 準備 (&実施)
- △ Evaluation 評価

ヒューメイン教育プログラムの企画にあたりガイドラインとして使える。



【スライド 21】

Analysis 分析

- △ 初期段階 - 案を批判的に検討する。
- △ リアリティ（現実性）の確認。
- △ 効果的プログラムの実施の機会を増やす。
- △ 不可欠であるが、長い必要も複雑にする必要もない。
- △ できるだけたくさんの質問をする。
- △ ステークホルダー、影響をおよぼす人たち、専門家などと話をする。



【スライド 22】

例えばプログラムのデザインについてですけども、このデザインの基本的な方針ということで見ることができます。

そして、E-プアプローチというのがあります。ヒューメイン教育というのは、非常に長期にわたるプロジェクトです。しかし、一生涯続いていくことでしょう。しかし、そのための原則というもの、管理の原則が必要になります。E-プ方式というのは、まず状況を分析するということが、そして準備をします、リサーチですね。そして、どういったオーディエンスかということをはっきりと、そして実施して、そのプログラム、結果を評価するということが、評価は非常に難しいところ。また後で話をしますけれども、非常に重要な部分でもあるわけです。どういった違い、結果を生み出すことができたか。分析、これはそんなに時間はかかりません。ただ、いろんな人と、エキスパートと話をします。どういったふうにするのか、ステークホルダーと話をします。そうすることで、スタートする前にまずしっかりとデザインするということが、

【スライド 20】 【スライド 21】 【スライド 22】

分析にあたっての質問
Questions for analysis

- △ 何を達成したいのか?
- △ 他の団体は同じようなプログラムを行っているか? 何かカバーしなければならないギャップがあるか?
- △ 既存のプログラムを連動することができるか?
- △ 応援してくれるステークホルダー(人々)はいるか?

ACT Asia

【スライド 23】

そして分析に当たった質問ですが、いろんな作業があるわけですが、リソースを共有する、協力することで、このステップは非常にやりやすくなります。もちろん、どういったリソースが必要なのかということですね。人材、予算、実際に達成できる現実的なもの考える必要があります。

そしてオーディエンス、対象となる人ですね。ヒューメイン教育、学校では子供が対象になります。4年生、5年生ということで、それに対する教材、あるいは方法があります。それは比較的やりやすいでしょう。しかし、パブリックな場での教育になると、市民全体を相手にするのか。であれば、余りいいレスポンスはないかもしれない。もう少し責任のあるペットオーナーについて、

例えばワクチン接種の話をするとか、もっとスペースをつくって下さいといった形ですとか、ペットオーナーを例えばフォーカスにする場合、それからペットショップをフォーカスにするとか、ですからそのオーディエンスを絞り込むということ、そのほうがメッセージは伝えやすくなるというふうに言えます。【スライド 23】

分析にあたっての質問
Questions for analysis (つづき)

- △ どのような専門知識や経験が必要か? それらをどこで得ることができるか?
- △ 時間、予算、人材は大丈夫か? 予算はどうするか?
- △ 団体の使命と合っているか?
- △ 自分の年間仕事計画に入れてあるか?
- その他

ACT Asia

【スライド24】

Preparation & Implementation
準備と実施

- △ 主要なリサーチ要因
- △ 対象者
- △ 目標
- △ 主要な人々とのコミュニケーション
- △ 方法
- △ 公式または非公式教育の過程(プロセス)
- △ リソース(資源)

ACT Asia

【スライド25】

適応性の重要性
The Importance of Adaptation

ACT Asia

【スライド 26】

そして、どういった人がプログラムに影響を持っているのか、また助けになるのか、あるいは障害になるのか、また、自分がやろうとしていることにだれが同意をするのかを先に考えることによって、後の問題、これを避け

Preparation & Implementation
準備と実施 (つづき)

- △ 人と時間とお金があること。
- △ 主要な人達の役割や責任分担を決めておく。
- △ 実施の責任者を決めておく。

 27

【スライド 27】

なぜ「効果」を評価するのか？
Why Measure Effectiveness?

- ・ 行動 (Action) is ≠ 具体的な変化
- ・ 自分たちの行動が動物に変化をもたらしているかどうかを評価する必要がある。

 29

【スライド 29】

効果的なプログラムのために
For effective programmes

「私のために何になるの？」に答える。

- 一 どうしたら人々が動物とやさしい行動によって得をし、そのような行動への抵抗を少なくすることができるのかを考える。
- ・ メッセージだけでなく、着目点を与える。
 - 一 地域を訪れる動物を使わないサーカスのリストを持つなどして、人々に動物にやさしい行動を理解し受け入れられやすいようにする。

www.HumaneSpot.org  28

【スライド 28】

Evaluation 評価

- △ 最もチャレンジングな仕事である。
- △ 評価の重要性を認識すること。
- △ 評価測定には注意深く考える必要がある。
- △ 評価はプログラムの一部として実施されるべきである。
- △ 短期・長期的評価 — HSUSは長期評価の例やひな型を持っている。
http://www.humanesociety.org/parents_educators/humane_education_research_evaluation.html

 30

【スライド 30】

る、予防することができます。そして、プログラムを状況に合わせるということが重要です。【スライド24】

これは、二つのシェルターの例ですけれども、一つは個々に分けて飼育している。もう一つはグループでの飼育です。ここで、状況に合わせてその内容を変えていくことが必要になります。そして、これも確認すべき点です。いろんな人がいろんなアイデアを持っているということで、実際のお金、仕事、いろんなものが生じてきます。ですから、だれがどういう責任を持つかということを確認しておくということです。

そして、オーディエンスですね。対象者の理解、考え方を理解するということです。動物に対してケアしない、どうでもいいという人に対しては、どうしように対応するのか。ファッショナブル、ファッションということで関心を持っている人であれば、それに対しての福祉の伝え方があります。例えば健康に関心を持っている人であれば、その健康にフォーカスを置いた話をする。つまり、相手の視点に合わせていくということです。そして、いろいろな選択肢を持つということです。例えば動物を使わないサーカスのリストをつくと、動物に優しい行動とはどういうものかを具体的に示していくことになります。

そして、行動ですね。最終的にはその行動を変えるということにつながっていくわけですが、それでもってプログラムの効果を評価することができます。

一番下のところですね。この評価のためのテンプレートですけれども、状況に合わせて当然修正して、変えて使っていただくわけですが、それを計画ですね。一番最初の段階から組み込んでいきます。

二つ、ここでポイントがあります。実際にどういった成果を生み出すのか。それから、人々に対してプログラムを継続していくわけですが、これが役に立つんだと、プログラムがこういうふうに関係に成果をもたらしたんだということで、さらにそこにいろんなリソースを集めていくことができるというふうに言えます。

【スライド 25 ~ 30】

これは南アフリカでの例です、これは非常にいい例だと思います。ヒューメイン教育をカリキュラムに入れるということですが、パイロットプロジェクトをある1地域で行いました。そしてその中でローカルの、政府もかわっていたわけです。ワークショップで、指導者ですね。先生がワークショップを実施しました。そして評価したということで、これも政府が最終的にその報告を受けて、そして国の教育カリキュラムに導入しようという

実例 - 南アフリカ Practical examples - S. Africa

- ▲ ヒューメイン教育財団がヒューメイン教育をカリキュラムに入れることを働きかけた。
- ▲ ウェストケープで、地元教育課の合意の下、試験プロジェクトを実施した。
- ▲ 教材を制作し指導者(先生)のワークショップを実施した。
- ▲ 専門家(心理学者)と評価を組み込む。
- ▲ 政府にプロジェクト結果を報告。



【スライド 31】

ことになったわけです。これは理想的な状況ですね。教育をする、ヒューメイン教育を行うということで、社会がそれを受入れる、ヒューメイン教育が、いわば一つの問題として非常に重要だということが理解されるようになった例です。【スライド 31】

実例 - 台湾 Practical examples - Taiwan

- ▲ ヒューメイン教育プログラムは2008年以来、台湾の環境と動物協会によって実施されている。
- ▲ 7教科の国の指導要領とカリキュラムを調査を実施した。
- ▲ 対象者と方法を決定するための調査を行なう。



【スライド 32】

実例 - 台湾 Practical examples - Taiwan (つづき)

- ▲ イギリスの素材を適用し、ワークショップでは地元の課題に注目した。
- ▲ 成功に貢献している主な要因
 - 教育省を巻き込み支持を得た。
 - EASTの長年に渡るキャンペーンで、動物愛護が社会問題として受け入れられている。



【スライド 33】

台湾の例です。これも後で詳細を述べられますけれども、いろいろな方法等について、内容について、また後で説明があります。他国の例を利用して、あるいはそれをベースに、さらに自国例、自国の状況に合わせて展開していく。最初から、1からスタートするわけではありま

せん。英語版のこういったいろんな教材がありますので、これもウェブサイトからとることができます。

今、ヒューメイン教育というものはいろんなところで継続的に行われています。そのサポートも、支援も立ち上がっているということで、山口先生から話がありましたように、ネットワークですね。お互いに協力する、また助け合う、非常にいいネットワークが築かれつつあります。【スライド 32】【スライド 33】【スライド 34】

では、ここで休憩ですね。休憩の後、実際にプログラムで利用できるような教材について具体例を示していきたいと思います。

米国・その他の国々の前向きな取り組み Positive developments in USA and other countries

- ▲ いくつかのヒューメイン教育課が立ち上がった。
- ▲ いくつかのグループがヒューメイン教育を奨励している。
- ▲ ヒューメイン指導者のための支援やコース、ネットワークが設立された。
- ▲ カリキュラムに基づいた素材を含む多くのリソースができた。
- ▲ 様々な方面からのデータが提供され、それらがヒューメイン教育の学校導入の強力な基盤を提供している。



【スライド 34】

○司会

15分の休憩をとらせていただきます。

今日は、奈良県の動物愛護センター、そして兵庫県動物愛護センターからパネリストの先生をお招きしておりますけれども、そちらのほうから、実際に教育で使われているマテリアルも持ってきていただいております。この時間にまた皆さん見ていただけたらと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(休憩)



【スライド 35】

○ディパシェリー・バララン

では、ここからちょっと幾つか、いろんなキャンペーンで使われたビジュアルを見ていただきたいと思います。

これは市民啓発のキャンペーンです。いろんな動物虐待の問題についてのものが使われています。非常にクリエイティブなものが多いので、それを選ばせていただきました。でも、必ず大きなプランの一貫として、その国の、そしてその文化の中で考えていかなければなりません。ほかの国から来たいろんなアイデアをそのまま使うのではなくて、それぞれの国に合わせて、文化に合わせて活用してください。

この左側のポスターです。これはとても賢い方法だと思います。犬は生涯にわたって飼うものですよ、クリスマスだけじゃないですよと書いてあるんですね。これは30年以上前のものなんですけど、とっても賢明なポスターだと思います。動物を飼うということ、その責任を書いています。

私の国でも、日本でもそうだと思うんですが、多くの人が動物、特に犬をステータスシンボルとして使ってる人が多いんですね。例えばセレブはこういう犬を飼ってるとか、こういう犬を飼ってますよと、それを公告に使って、みんながその種の動物を飼う、その種の犬を飼うようになるということがあるんです。でも、犬は生涯生きていくわけですから、子供と同じようにずっと面倒を見なきゃいけないということなんです。もう広告の時期が過ぎたからといって捨てていいというものではないんです。それを訴えているポスターです。

右側は、別の市民啓発のキャンペーンです。ここには3年後には、そして3歳4カ月で1匹の避妊をしていない雌と1匹の避妊をしていない雄がいれば、4年と3カ月で、犬なら512頭、猫なら392頭生まれると書いてあります。これも、やはりちゃんと避妊をしましょうと、

動物をブリードするんじゃなくて避妊をしましょうなんですよね。その広告なんです。この動物、こういった絵を使ったほうが、言葉よりもずっと説得力があることを示しています。【スライド 35】



【スライド 36】

これはインドのキャンペーンの例です。メッセージがどういったものであるのか、それから町のどこにこういった看板を立てるかによって、人々の注目度は変わってきます。ここではこう書いてあります。ホームレスの動物たちが死んでいる間、ブリードしたり、飼ったりしないようにしようとして書いてあるんです。ホームレスの犬が亡くなるまで、まず迷い犬、野良犬を保護することから始めましょうと書いてあるんです。日本ではそんなことはないんでしょう。日本では、日本の町ではそんな問題ないかもしれない。でも、ここで言いたいこと、それはこういった看板を使って啓発をしていく。そして、こういった看板には一つのメッセージだけを載せることが大事だと思うんです。まず、野良犬を自分のところで飼いましょう。そして、その野良犬は避妊しましょうと二つ書いてしまうと、大事なメッセージが伝わらなかったり、人々がそれを覚えていないということが起きてしまいます。

動物保護の人間としては、たくさんのことをやらなければいけない、たくさんのことを伝えたい。もちろんこうやっちゃいけない、こうやっちゃいけない、こうやらないといけない、もっとヒューメインにならなきゃいけない、もっと優しくやらなきゃいけない、もっとこういうふうに飼わなきゃいけない。でも、たくさん情報を看板に書き込んだら、これは余り説得力はないということなんです。もしくは、覚えていなかったり気づかなかったりするかもしれない。だから、こういったキャンペーンでは一つのことだけを訴えていくことが効果的です。

【スライド 36】



【スライド 37】

これは農業動物の福祉に関するものです。これはオンラインで、アニメーションで流れている映画です。これを見ると、非常にシリアスなメッセージ、例えば集約的なこういった農業動物を飼うこと、これは動物にとっても、環境にとっても優しくないということを示しているアニメなんです。子供たち、このアニメを見た後、例えば食料生産について話すことができるでしょう。それは環境の授業になるかもしれない、理科の授業になるかもしれない、もしくは保健の授業になるかもしれません。

左側にはいろんなリンクが張られていまして、もっとこの問題について知りたかったらここを見てくださいます。また、どういう行動が自分でとれるかも書いてあります。ヒューメイン・エデュケーションは、人々の行動を変えることです。情報を提供することで何が出来るかを伝える。でも、それだけだとフラストレーションを高めてしまいます。非常に残酷な行動について、また残酷な行為について知る、そこで終わってはいけません。どういう行動がそこからとれるのかということにまで付言する必要があります。

もう一つのポイント。これは、いろんな問題が、実はヒューメイン教育の中でつながっていることがわかります。動物、環境、人の健康、すべてはつながっているのだということを示しています。【スライド 37】

これもまた別の例で、農業動物の例です。左側、よりよい扱いをしましょう、よりよく食べましょう、よりよく寝ましょう、レストランを選びましょう、ヒューメインな、人間的な食べ物を出すレストランを選びましょうと書いてあるんですね。動物がちゃんと扱われなかった、集約的な畜産がなされた十分な空間が与えられないまま、そして自然な行動がとれないまま飼われていた動物、その動物を食料として出すところは避けましょうと。よりよい扱いをしましょう、よりよく食べましょう、よりよく眠りましょう、そういった食料を私たちが食すれば、



【スライド 38】

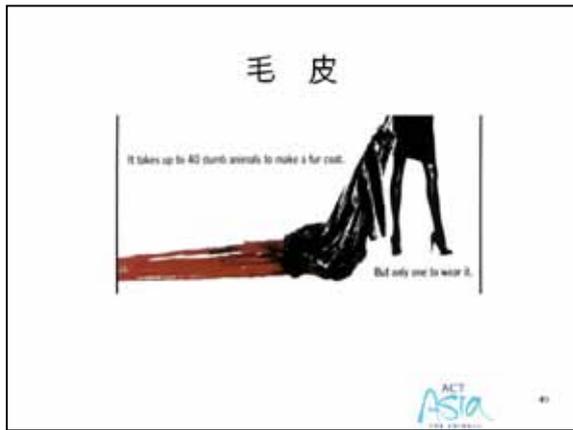
私たちが健康になることを示しています。動物と、そして地球を守りましょう。もちろん、ベジタリアンになることができるかもしれない。でも、動物の福祉と環境と、それについても考えましょうというのが、今度は右側のスライドでした。【スライド 38】



【スライド 39】

これは二つの例です、これは毛皮に対するキャンペーンの例です。どちらも非常にかわいい動物が示されています。一つは、彼女も毛皮が必要なんです。あなたが必要とする以上に、この動物が毛皮を必要としていますと書いています。私の毛皮を盗まないで、そして、まだ私終わってないんだからと書いてあります。かわいいビーバーです。国によって、これがアピール力を持つかもしれません。ああ、そうだ、毛皮着ちゃいけないんだと感じられるかもしれません。右側、これはウェブサイトにも出ています。バッジだとかマグカップだとかTシャツ、これも同じメッセージが書かれたものが入手できるようになっています。キャンペーンでいろんなものを使って、例えば看板やポスターだけじゃなくて、人が買って着れたり、使えるものをつくることも大事です。それによって、公教育、一般啓発キャンペーンのための資金集めをすることができます。また、それを着て歩き回ると、そ

のキャンペーンを宣伝することができ、より多くの人にメッセージを伝えることができます。【スライド 39】



【スライド 40】

これはまた毛皮のキャンペーンですが、全く違ったビジュアルの使い方をしています。毛皮のコートをつくるのに 40 頭の動物が必要なのです。でも、それを切る人は 1 人しかいないんですと書いてあるんです。これはすばらしいと思います。動物の血が毛皮のコートの後ろに続いてきている。毛皮のコートをつくるためには動物の血が流れているということを示しています。でも、人によってはこれを見ると、これは余りにもショッキングで、この血は見たくない、こんなこと知りたくないという人がいるかもしれない。そうすると、このキャンペーンは効果的ではないかもしれません。だから、皆さん考えなきゃいけないのは、オーディエンスがそのキャンペーンにどう反応するか。皆さん自身がこれを格好いなどと思っても、それは効果を持たないかもしれないということです。これは、実は英国では非常に成功しました。その後、毛皮の使用が大きく減ったんです。でも、皆さん日本人の場合には、イギリス人と違った反応をするかもしれません。【スライド 40】



【スライド 41】

これも動物研究に使われている実験動物です。こう

いった実験動物を育てる農場を閉鎖しましょう、実験動物のためのウサギを飼っているところを閉鎖しましょうということなんです。写真が示されています。この写真、実験動物でどういう状態で育てられているか、それから実験動物としてどのような実験がなされているか、ラットやマウスの様子が示されています。これもやはりだれが見るかによって、余りにもこれは現実的かもしれない。なので、皆さんがメッセージを伝えたい人を背けさせてはいけないということなんです。

それから、一番下を見てください。農場で毎週デモンストレーションをしていますということで、こういった怖い、恐ろしい状態を示すだけじゃなくて、それに対して何ができるのか、行動も示されているということです。これも実験動物に関するキャンペーンですが、もう少し優しい方法で、動物に残酷さのない生活を提供しようというふうに示しています。よりヒューメインなその生活スタイルを提供しましょう。なので、キャンペーンを見る人たちがどういった反応を示すかによって、この前のものか、これか選べるかもしれない。もちろんその両方を使うこともできるかもしれない。ターゲットを幼い子供たちにするのか、年齢の高い人にするのか。毛皮をつくっている人、だけど気づいてない人を対象にするのか。なので、だれを対象にしたプログラムかを考えてビジュアルを選んでいきます。【スライド 41】【スライド 42】



【スライド 42】





【スライド 43】

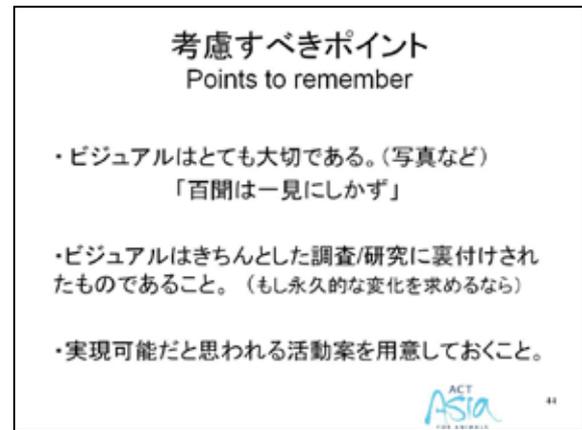
イベントを行うことも啓発には非常に有効的です。ヒューメイン・エデュケーションのプログラムで反復が必要だと申しました。そして、長期的に継続する必要があります。イベントも同じです。1年に1回のイベントをして、あと364日は忘れてるというのではいけないんです。写真は美しいです。また、ウェブサイトに報告書は出てるかもしれない。でも、本当にそれで人々の行動が変わるかどうかわかりません。キャンペーンを計画するときには、必ずそういった継続性を考えてやっていただきたいと思います。

これは世界動物の日、10月4日に行われています。いろんな国でいろんなことが行われています。左側がカンボジアです。子供たちの絵画のコンペが行われています。真ん中は、これは予防接種のプログラムです。日本ではこういったキャンプがあるかどうかわかりませんが、動物のキャンプで予防接種をしているところ。そして右側は、子供たちが動物の仮面をかぶって、動物の福祉について訴えているところ。こういったイベントを使ってください。

日本は幸いです、日本は動物愛護週間があります。少なくとも多くのところで動物に優しくしなければいけない、動物愛護が重要だということを知る機会を日本人は持っています。したがって、こういったメッセージをプログラムの中でもさらに強調していくことが大事です。

【スライド 43】

これは意識啓発のプログラムで忘れてはならないことです。よいビジュアルを使うということは大事です。文字は余り人々は見ません、読みません。特に最近そうなんです。でも、時には一つのいい写真と、そして一つのキャプションがあればしっかりとメッセージは伝わります。もちろんこういったビジュアルを使う場合には、十分に調査・研究をして、それに裏づけられていなければなりません。そしてまた、しっかりと聴衆が覚えらる



【スライド 44】

アクションを入れておくこと、予算をつけることも大事です。【スライド 44】



【スライド 45】



【スライド 46】

また、学校や大学で教育をするときの方法もあります。例えば動物の福祉、これを一つの教科としてカリキュラムの中に置くこともできます。これは動物福祉の概念ということで、シラバスです。動物福祉の教材についてのシラバスです。先生が使えるものです。これを使って、動物福祉を一つの教科として教えることができます。例えば大学のカリキュラムの中に、獣医学のカリキュラム

の中に入れることができます。これは別の一つの教科として行う場合ですが、それはなかなか難しいんです。これが取り入れられたところはまだないと思うんですが、そういった取り組みは行われていると思います。なので、現実的に考えないといけません、何ができるか。これはゴールとしてはいいんですが、すぐそこまで行けないかもしれない。なので、現行の今ある教科の中に、今あるカリキュラムの中に取り入れることも短期的には大事かと思えます。

これはRSPCAの教育プログラムの例です。どの年齢も結果が示されています。キーステージ1は5歳から6歳向けです。どういう教科で使えるかが書かれています。ここでは公民の授業の中にこれを取り入れます、理科に入れることもできるでしょう。真ん中には、どういったカリキュラムの目標を掲げているかと。日本の場合には文科省から指導要綱が出ていると思いますので、その指導要綱に合わせて教科を教えていかなければなりません。すべての人にはニーズがある、そして動物にもニーズがあるということを学びます。そして、グループディスカッションでいろんな意見を交換し合います。

【スライド 46】



【スライド 47】

これは教育目標です。日本の指導要綱の中で、その目標に合わせてこのプランに手を加えることができます。先生たちには教材、資源があります。なので、そんなに先生方の負担がふえるわけではありません。同時にヒューメインな教科を教えながら、ヒューメイン・エデュケーションもできるということです。また、教材をダウンロードすることもできます。日本語でも読める、そういった同じようなものができるかもしれません。

もう一つの例です。もう一つの教育、特にこれは生徒に対するもので、課外活動としての教育です。これはルート・アンド・シューツのプログラムです。皆さんも同じようなプログラムがあるかもしれません。このプログラ

ムも非常に効果的です。ここでも動物の問題、環境の問題を取り上げることができます。こういったプログラムは成功しています。というのは、維持されているからです。もう長い間やられてるところも、既に国によってはあります。

先ほど申しました皆さんは幸いです。奈良の動物愛護センターに参りました。そうしますと、素晴らしいヒューメイン・エデュケーションの資料、資源がありました。すべてとは言いませんけれども、あちらに並べられています。奈良の動物愛護センターからお借りしているものです。兵庫の動物愛護センターからもお借りしているそうです。藤井先生、それから犬伏先生が、そのプログラムについて後で御紹介をさせていただきますので、私からは余り今は説明しないでおきましょう。

でも、こういった資源がありますから、それを活用なさを考えていただきたい。そして皆さんのプログラムの中で、もう既に先達の経験から、ぜひそれを活用して計画を立てていただきたい。それから、何回も何回も同じグループに指導することが大事です。そうすることで行動変容が生まれてまいります。でも、やはり現実を考えなきゃいけません。実際に学校でどれぐらいの時間をヒューメイン教育に割いてくださるのか。1年に1回か2回しかできないかもしれない。そこで、その後フォローアップの何かをしなきゃいけないということなんです。そうすることで、皆さんのプログラムが長く継続するようにしなければなりません。【スライド 47】【スライド 48】

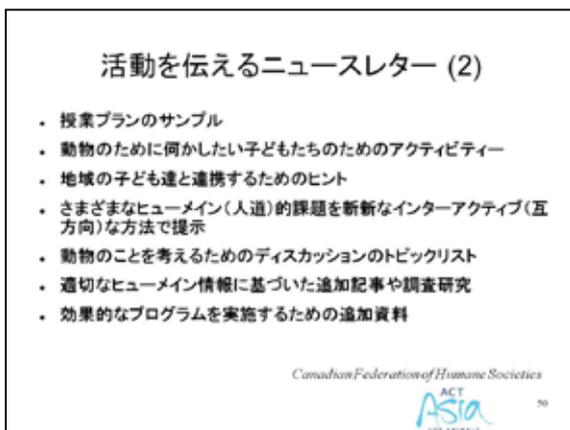


【スライド 48】

これはカナダの例ですが、ニュースレターを使っています。カナダヒューメインソサエティー連盟がつくっているニュースレターです。これを学校に配布します。既に訪問した学校、その他の学校に配布をしています。そうすることで、例えば授業プランのサンプルが示されています。動物のために何かしたい子供たちのためのアクティビティー、それから楽しい事実、それからどういっ



【スライド 49】



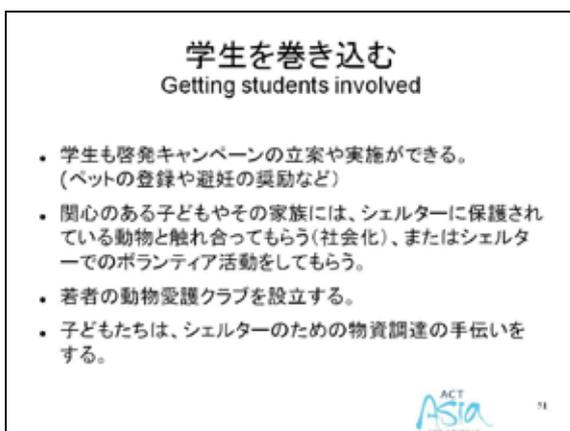
【スライド 50】

た。英語の授業の質問に答えてくださいと書いてあるんですね。先生がこれを子供に渡して、観光客に渡して、子供たちの英語の力を伸ばそうということなんですね。とってもかわいかったですね。だれもそれに、いや、忙しいからだめですなんていう観光客はありませんので、名前は何ですかとか、どの国から来ましたかとか、それから富士山はどれぐらいの高さですとかを教えてくださいました。そして富士山の写真を見せて、最後に、これプレゼントですと私に渡してくださったんです。これは非常にクリエイティブなやり方だと思うんですが、これをヒューメイン教育にも使えると思うんです。【スライド 51】



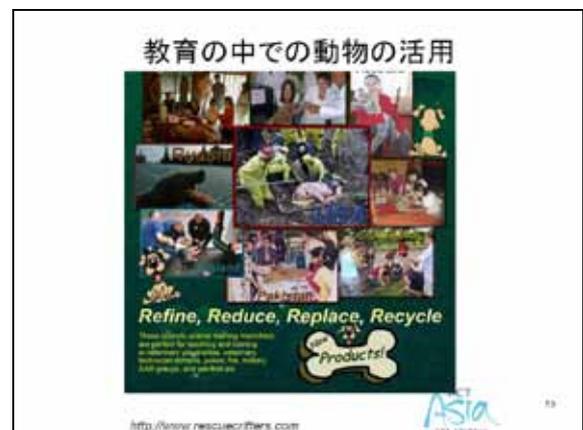
【スライド 52】

た資源があるか、そういったものを提供しています。もし何回も訪問できないのであれば、このような手段でもヒューメイン・エデュケーションをより持続可能な形に変えることができます。【スライド 49】【スライド 50】



【スライド 51】

もう一つ、ヒューメイン・エデュケーションを持続可能なものにするために、学生を巻き込むことを考えることも大事だと思います。きょう私、持ってこなかったんですが、奈良に行ったときに小さな子供たちが来てました。5歳から6歳ぐらいの子供たちです。この子供たちが、小さな観光客の皆さんへと書いたチラシを持ってきまし



【スライド 53】

例えば犬について、猫について、そこで話をすることもできるかもしれない。そして、自分の飼っている猫や犬の写真、それを見せることもできるでしょう。そうすれば、英語を勉強しながらヒューメイン教育もできるだろうと思うんですね。だから、私たちもクリエイティブに学生を巻き込む、そして学生の、子供たちの興味を高めることを考えていかなければなりません。

また、いろんな資源があります。動物を使うかわりに、そして学校で動物を使って実験するかわりに、ほかの手段が使えるんですね。例えばコンピューターモデルを使うとか、モデルを使うとか、いろんな技術を使えるかと

思うんです。

これは一つの例です。これは非常におもしろい代替のものです。これは解剖してるんですが、こんなものを使ったほうが子供たちは楽しむんじゃないですか、動物を解剖するよりも。

これは一つのモデルです。バッテリーが入っていて動くんですね。これはもう少し進んだクラス、例えば農業大学で学んでいるところですが、例えば心拍数であるとか呼吸数であるとか、それををはかる。それからまた、I Vカテーテルを挿入する、カテーテルの挿管をする、それをモデルを使ってやる。実際の動物ではなくてモデルを使って、動くモデルを使ってやるということなんです。

【スライド 52】【スライド 53】

誰でもヒューメイン教育者になれるのか？
Can anyone be a humane educator?

ヒューメイン教育者に必要なものは

- ・ コミュニケーション能力
- ・ 動物、人権、環境に関する知識

これらは育成することができる。
- 研修が大切である。



【スライド 54】

教えるということは決して簡単ではありません。教えるためにはいろんなスキルが必要です。コミュニケーションスキルが必要です。ヒューメイン教育者になるためには、やはりコミュニケーション能力が必要です。同時に、いろんな問題の知識を持たなきゃいけません。動物について、環境について、人について、人権について、知識を持たなければいけません。でも、ヒューメイン教育者を育成することはできます。大事なことは、国によってやってるところもありますが、トレーナーのトレーニングをすることです。【スライド 54】

これは教師を対象にしたワークショップの例です。教師に指導するときには、その指導者をつくって、その指導者がまたほかの教師を指導していくと。そうすれば、より早く、このヒューメイン教育が広がっていきます。なので、教師のワークショップを行う。例えばどういったレスンプランを使うかということ、そこで指導していくことも大事だと思うんです。【スライド 55】

指導者を育てる



<http://humaneeducation.org>



【スライド 55】

ヒューメイン教育：共感の輪を広げる

「私たちの孫めは、この牢獄から自らを自由にするのだ。それには全ての命ある物と自然の全てを、その美しさの中で包み込むような共感の輪を広げることだ。」
アルバート アインシュタイン

「歴史的に人間は、無知と困窮から遠ざかるにつれ、その倫理的配慮の範囲を、最初に家族、部族、そして宗教、人種、国家へと広げてきた。」

「多種の生物をこのような判断の枠内に持ち込むことは、今日の見解では考えられないかもしれない。しかしこれから数十年、数百年後のいつの日にか、それはただ単に求められている'文化的な'行動以上の何物でもないものとなるかもしれない。」

エコノミスト「人は動物にどんな借りがあるのか」
The Economist, "What Humans Owe to Animals," 19/5/95



【スライド 56】

最後に、私たちが覚えておかなければいけないこと、ヒューメイン教育とは共感の輪を広げることです。我々自身、我々家族から、さらに他の生き物へと広げていくことです。

最後のところも大事です。歴史的に、人間は無知と困窮から遠ざかるにつれ、その倫理的配慮の範囲を、最初に家族、部族、そして宗教、人種、国家へと広げてきた。多種の生物をこのような判断の枠内に持ち込むことは、今日の見解では考えられないかもしれない。しかし、これから数十年、数百年後のいつの日にか、それは単に求められている文化的な行動以上の何物でもないものとなるかもしれないと書かれています。どうも御清聴ありがとうございました。

○司会

もう一度拍手をお願いします。

それでは、引き続きましてフィルム上映ということで、Earthlings を上映したいと思います。そのために、まずジョイ先生にお話をいただきたいと思います。

ジョイ先生、よろしくお願いします。

○ジョイ・レネイ

皆さん、おはようございます。

大変素晴らしい日本に来ることができてうれしく思っております。動物愛護という観点からいろんな国に行くことができるんですが、でも日本にはまだ来たことがなかったんですね。75カ国に行きました。本当にこれはもうこの40年間、一つの特権だと思います。素晴らしい人たちとお会いして、どういう活動をしているか、動物保護、愛護に関して、その社会、国について学ぶことができました。

国ということに関して、我々はいろんな国に行って動物を愛護すると。人によっては嫌いなことがあります、それを嫌いとは言いません。動物においては、全く嫌いということがありません。動物での動物愛護ということで、英国と同じようなんですけども、すぐに思い浮かぶのが、山口先生、じゃあ知ってますか。というのか、彼女は本当に動物愛護のサイクルにおいては、英国においても非常に有名なんです。山口先生の名前は、常に何か活動しようということにすぐにつながります。ですから、山口先生にはその努力、非常にお礼を申し上げたいと思います。

スコットランドですけども、そこで日本に来てはどうかということで話があったんですが、8年かかりました。ここで少し映画を見せたいと思います。非常にパワフルな有名な映画ですが、その一部です。非常に感動的なものでありまして、ただここでは、いかに重要かですね。人、動物、環境が、これが一体となって、それを一体化して活動するとか、いかに重要かということをお話したいと思います。

Earthlingsという映画で、聞いたことがあるかもしれませんが、これは地球における一つの生き物という意味です。ですから、我々動物、それからその他の生き物すべてを含んでEarthlingsということになります。これがつくられたのは、実際、監督、作成した人がいるわけですが、その人がまずリサーチをしました。実際、去勢・避妊手術ということで、アメリカでキャンペーンがあったんですけども、そこでいろんなシェルターを訪れて、動物が保護されているところを見ました。そこで非常に大きな心配、懸念を感じたわけです。

そこでこのドキュメンタリーのフィルムをつくらうということで、そのテーマとしては、ペットだけではなく動物、それから実際に人ですね。例えば食料とか衣服、実験、サーカス、娯楽その他で、人間によって動物が扱われている、そういった動物をすべて対象としようと思いました。長くかかりますので、すべてをここでお見せす

ることはしませんが、15分ほどですね。全体としては1時間半ぐらいになります。15分ほどのクリップでありますけれども、実際にどういう生活、我々が住んでいるのか、そしてどういった考え、考察をしなければいけないか。そして、そこからつながる行動、考え方を考える非常に大きな機会になると思います。

ヒューメイン教育は、あしたすぐに何か変わるものではありません。一つのプロセスであって、その中でより生活を、あるいは生命を地球全体でよくしていこうというものになるわけです。短い映画ですので、それ以上の説明はやめて、この後、またいろんな教育についての話がありますので、また、ロールプレイもありますので、そこのところはまた午後に残して、映画アースリングスを早速始めたいと思います。ありがとうございました。

(ビデオ上映)

○司会

すごく長い講義の後にこういうのを見て、何か感じられたと思うんですけども、これこそが、もしかするとヒューメイン・エデュケーションなのではないですか。

それでは、Earthlingsの意味というのが、ほかの天体から見た地球人という意味があるということで、今、記者のほうからコメントがありました。そういう意味でも、ほかのところから見たら我々の星は大変素晴らしい星だと思いますし、そこに住む我々はどのように見られているのかということをお話したときに、ヒューメイン・エデュケーションというのは他者に対してどう思うかということも大変気になると思いますので、そういう目で、もう一度我々の星を見直してみるという意味でも大変素晴らしいフィルムだったと思います。ジョイ先生、ありがとうございます。

それでは、引き続きましてパネルディスカッションのほうに移りたいと思いますので、済みません、御準備のほうをよろしくお願いします。

○山口千津子

それでは、これからパネルディスカッションに移らせていただきます。

ディーパ先生、ジョイ先生、それから皆さん、そちらですごく感心しておられました教育グッズ、それを中心になってつくられました奈良県桜井保健所動物愛護センターの藤井先生、それから兵庫県動物愛護センター淡路支所において、やっぱりヒューメイン・エデュケーションに努力されております犬伏先生、お二人をお迎えして始めさせていただきます。

まず、藤井先生からお願いできますか。

それぞれの日本のお二方の先生に、まずということ

をやってらっしゃるか簡単に、もう時間がちょっと迫っておりますので、10分ずつぐらい、今現在センターでやってらっしゃることをお話しいただいて、その後、皆様から御質問をそれぞれ4人の先生に、同じ質問でも結構でございますのでいだけ、それにお答えいただくというふうにさせていただきたいと思います。

では、藤井先生からお願いします。

○藤井敬子

皆さん、こんにちは。奈良県動物愛護センターの藤井です。

ちょっと私いつもそっち側で、はあと聞いている立場だったので、こっちへ来てすごい緊張してますし、あんまり話すのが上手でないのだからにうかかなと思うんですが、私ども動物愛護センターは3年前に立派な施設をいただきましてオープンしました。

それ以前に、私は平成7年から自称動物愛護教育をやっておりました。しかし、私がずっとやってきた動物愛護教育は、実は動物愛護教育ではなかったというのに気づいたのが、10年ほど前ですか、イギリスのRSPCAに福祉協会の山口先生たちと一緒に訪れたときです。そこで私が見たものはとても衝撃的なもので、私が今までやってきたのは、動物に無理をさせて子供たちだけが喜ぶ、先生や親は私たちが満足する教育だったんだなということに気づきました。

そこから私はちょっと方向を変えて、いわゆる動物の福祉に配慮した本当の動物愛護教育を模索し始めました。それをいろんな方々の協力を得て、きょう、会場にもたくさん私の協力者が来ておられるんですけども、そういう方たちのお力をいただいて、ちょっとそこら辺に展示させていただいているグッズも、幸いにしてオープン当初、愛護センターのオープンをきっかけに潤沢な予算もつきました。そんな関係で、恐らくほかの自治体の愛護センターさんから見たら、もう本当によだれの出るようなお金がついて、いろんなものをつくることができました。



きょうはちょっと私の話をしてもしょうがないので、グッズを順にびっぴっと。

これは子供たちにちょっと、愛護センターに来てよねという宣伝を兼ねて、お土産用に開発していただいた立体模型みたいなやつです。これは、私ども動物愛護センターは非常に広い敷地を持っておりますので、また後で興味のある方にはゆっくりとお話をさせていただこうと思うんですが、実は野生動物、それから愛玩動物、それから産業動物、三つの動物、いわゆる先ほどのEarthlingsじゃありませんけども、地球の中に私たちがかわり合っている動物たち、3種の動物を取り込んだ動物愛護センターというか、うだ・アニマルパークという形で開園しておりますので、そういったところを順次回ってもらって、動物について学ぶきっかけづくりにつくりましたスタンプラリーになります。

あと、これも動物愛護かるたということで、オリジナルでいろんな伝えたいメッセージをかるたにして、学校なんかで使っていただくということで、50音すべてオリジナルでつくりました。デザインはもちろんプロの柳谷先生のほうにお願いしたんですけども、こんなものもつくりました。

それから、こちらが10種類の学習シートをいろんな形で作りました。先ほど講演の中にあつたような、RSPCAの教材からもヒントをたくさんもらっています。また、展示もしてあるので見てください。

これはアクティビティーということで、うだ・アニマルパークの中にいる動物たちについて知ってもらおうということで、クイズ形式で子供たちに動物になってもらって、あなたはどのような動物なのよという説明のゲームに使っています。

これも展示してありますが、私たちはそういう授業を行うときに、子供たちもスタッフもゼッケンをつけるようにしています。このゼッケンをつけてもらうことによって参加者と非参加者を区別すると同時に、いろいろメッセージを、このゼッケンもたしか十何種類つくったと思うんですけども、すべて裏表でメッセージを入れています。参加してる子はもちろんですが、それを見ている周りの方たちも何か一つ持って帰っていただきたいと、とっても欲張りなんです。

獣医さんになろうというイベントもやってまして、子供たち、コスプレ、子供はあんまり喜ばないんですが、これ親がすごい喜んでですね。親に着てもらって、そこにちょっといろんなことを、マイクロチップ入れたほうがいいですよとか、登録してくださいねなんていう話をするのに使います。

これもオリジナルなんですけど、私はずっと動物を連れて学校回りをしていました。そこで動物たちに非常な無理をさせました。その苦い経験から、生の動物使いたくないな、来てもらって、そこにいる適正にケアをされた動物に触れてもらうのは構わないけれども、わざわざ連れて行ってストレスをかけて、子供たちにさわりまくられて、またそれを連れて帰ってきて、帰ってきたら下痢をすとかいうのは嫌だなということに気づきまして、リアルドッグを、これまた依頼してつくっていただきました。1頭連れてきてますので、持っていただくと結構重たくていい感じです。これもそうですね。

こういう縫いぐるみたちを使って、十分に子供たちで感情移入してくれるので、これで十分いけるかなというのがこれまでの実感です。最初に動物を連れていっちゃうと、確かに生の動物にかなうものはないんです。でも、最初からこれで行っちゃえば、子供って結構感情移入してくれます。

これは今開発中のプログラムですけども、私たちに取り巻く動物という形で、これ今一遍しかないんですが、実はこれは野生動物。出てるのは犬もいてるので野生動物だけじゃないんですけど、野生にはこんな子がいるねとか、あと町と農場、それこそ私たちうだ・アニマルパークの野生動物、伴侶動物、産業動物のエリアを分けて、子供たちに、自分たちは好もうと好まざると、そういう動物たちとかかわっているんだよということを伝えるのに使っています。

これも先ほどのゲームのげっけんなんですけど、私はだれと書いてあるのを表につけて、裏に自分の動物をつけてゲームをします。

これはふれあい教室を毎週土日に行っています。パートナードッグさんという、犬と人と一定の基準を設けまして、そこでオーケーの方たちに毎週来ていただいて、動物たちの正しい接し方、危害防止を伝えています。これもゲームで、そこにも展示してあるんですけども、いろんな指令があったりとかクイズがあったりということで、子供たちが園内を回ってくるというアクティビティになっています。

これはちょっとわかりにくいんですが、風船が、牛の絵なのでわかりにくいんですが、かぶり物といって、これも奈良県にこういう業者さんが実はいらっちゃって、チャッピーさんというんですが、かぶり物、犬とかウサギとか猫とかのかぶり物をつくります。ナンバー6の学習シートを使うんですが、これを子供にかぶらせてなりきってもらうんですね。あなたがうさぎだったらどんな気持ちとか、犬だったらどんな気持ち、猫だったらどん

な気持ちというアクティビティをします。

これが愛護センターが誇るポップ次郎、ポップ三郎兄弟なんですけれども。パペットになってまして、やっぱりつかみって大事なので、教室に行ったときに子供たちがわっと自分に集中してくれるのに使います。

これは動物愛護センターで待っていますというツールなんですけど、動物のニーズを伝えるということと、それから世界で1匹しかいないわんちゃんたちが、ねこちゃんたちが動物愛護センターにはいてるよという、動物愛護センターの仕事について説明するためのものです。

透明犬なんですけど、展示してあるんですけど、透明のわんちゃんたちですね。最初に出てたスライドにもあったと思うんですけど、本当の犬の散歩体験なんてさせられないんですよ、子供には、危ないし。それをさせようと思ったら、スタッフがすごくたくさんいるし、犬にも負担がかかるし。だったら、透明の犬だよと言ったら、子供って結構これで大丈夫なんです。あんたの犬はこんな犬だよっていうカードまでつくって、ペットボトルもぶら下げさせて、うんこ袋も持って行って、行っというのとぴゃあっと走っていきますので、こんなことで適正飼養を啓発しています。

これはワンダフル博士という、うちの啓発のためのキャラクターです。さっきのかるたの、子供たちが遊んでいる様子ですね。楽しそうでしょう、すごくおしゃまさんで。これは実際に学校でやっている様子です。こんな本とかも、結構蔵書をたくさんどんどんふやしていつて楽しんでいただいています。

これ、さっきの透明犬です。本物のわんちゃん、これ、パートナードッグとお母さんなんですけど、来ていただいて、わんちゃんと一緒に歩く。ここは動物愛護センターの中にリビングスペースがありまして、ここに実際パートナードッグさんと飼い主さんと来ていただいて、犬との暮らしをお話ししてもらったり、体験してもらうための施設です。

○山口千津子

ありがとうございました。どうぞ拍手を。

それでは、兵庫県の動物愛護センター淡路支所の犬伏先生からお話をお伺いしたいと思います。

○犬伏 源

兵庫県動物愛護センター淡路支所の犬伏です。時間がなくて資料を作ってきていないのでしゃべりだけになります。

名前が犬伏ということで、名字だけ見たら犬、人、犬、つまり両手に犬ということでこれだけで現場では結構つかみはけます。



兵庫県の場合は、動物愛護センターが平成10年に設立されています。設立当初は幾分財政に余裕があったのですが、もう今はありません。なので、機器もそろそろ故障したり、作った物品も若干古くなってきていますが、それを新しくするだけの予算もなく、我々がない知恵を絞って、不要品から啓発物品をつくる、そういうこともやっていますが、所詮素人です。美術力もなく創造力もなく、いつもできたときは「いいのができたな」と思うんですけども、半年後に振り返ったら、「こんなんでもやっとなんかいな」という落胆に常に襲われています。

私からは、藤井さんと違って、実際に現場でどういうことをしているかお話をしたいと思います。

兵庫県の場合は動物愛護センターが本所、支所合わせて県内に4カ所あります。兵庫県は結構広いので、東の尼崎市に本所がありまして、中央の三木市に三木支所、西の龍野市に龍野支所、南の淡路島に淡路支所、この4カ所です。支所はまだできてから5年ぐらいなんですけども、地域によって全然実情が異なります。都会の持つ問題、それから地方の持つ問題もそうですし、愛護センターに要望される啓発内容というのかなり差があるんですね。

私自身が獣医の道を選んだのは、野生動物にすごく神秘性を感じて、それからイギリスのBBCテレビの動物番組とかTBSの野生の王国、そういう番組に影響されて、野生動物を救いたい一心で獣医になったんです。今この仕事をしている中で、やはり子供たちに自分と違う生き物の神秘性とか彼らの持つ独創性、そういうものを伝えたいという思いがあるので、私は啓発現場であえて生き物を使います。ただ、愛護センターのモデル動物の犬やねこを使うことについて、現場ではやはり道中の輸送ストレスや触られることによるストレスがかかるので、彼らの様子や体調を見ながら休憩と継続を判断します。

でも、先ほど藤井さんが言われましたけれども、子供たちってやっぱりさわりたいんですよね。でも、さわり方がもうめちゃくちゃなので、5分もたてば犬は猫はお

びえてしまう、そういう状況がありますが、現場から要望されるのは触れ合いなんです。学校、地域ともに、とにかく子供たちに犬や猫をさわらせてあげたいという希望が多い。確かに家庭の事情で生き物を飼えない方、ペット不可の集合住宅に住まわれている方もたくさんいらっしゃいます。飼いたくても飼えない、触れたくても触れられない、そういう中で触れ合いの場を提供することによって、もし将来彼らが生き物を飼うときに気をつけなくてはいけないこと、そういうものを学んでいただければ一つでもプラスになるかなと思って触れ合いを行っています。

啓発の対象が、幼稚園児、あるいは小学校の一、二年生であれば、私の場合は現場の生き物観察を取り入れます。というのは、例えば学校から「せいかつ」の授業を任せられることがあります。1年生、2年生の「せいかつ」の教科書の中には【生き物探し】があるのですが、生き物を探ること、それを自分の目で確かめることによって、自分の周りには名前は知らないけれども、たくさんの命があるんだというのを知ってもらうために実施します。その際は、実施日の二、三日前に現場に出向いて、校庭、あるいは学校の周り等を我々が歩き回って、どういう生き物がいるかを確認して、それを写真に落として、大体A4の紙に裏表50種類ぐらいの生き物が載った【生物図鑑】を作ります。当日、それを子供たちに1枚ずつ渡して、「自分で見つけた生き物の上にシール張ってごらん」という形で、20分から30分間生き物探しをさせて、教室に帰ってきたときに「たくさんの生き物がいるでしょう、みんなに命が一つずつあるんだよ」という形で命へのアプローチをします。

対象が3年生、4年生になると、今度は理科の授業になります。理科になると、学校で生き物を飼うんですね。モンシロチョウとかカブトムシとか。私の息子も今3年生なので家で理科の教科書を見ることができます。生き物を飼うことを啓発に取り入れるということで、淡路島では比較的簡単に採れるカブトムシを最近よく使います。幼虫を捕まえてきて、ペットボトル等を用いて飼育容器をつくって、蛹から成虫になる過程を観察しつつ飼育します。成虫になり、卵を産んでくれたら、命の継体という形で自分が飼い切ったという自信になります。

対象が5年生、6年生になると、「チャレンジ一日獣医さん」とか「動物愛護センターの仕事体験」、「犬のプトレナーになってみよう」といった企画も行います。

対象が中学生、高校生になると、我々愛護センターのもう一つの仕事であります管理業務の方に主をおきます。命というものがどれだけ尊いものなのか、それから

生き物を飼うという責任感を、愛護センターに来ていただいたり、関連資料を用いて伝えていきます。

対象が大学生、専門学生になると、愛護センターの職業体験などを通して、今起こっているペット問題等についても検討課題を与えたりして考えてもらいます。

社会人が対象になると、ペットの飼い主さんが多いので、適正飼養の部分が主となります。それから、我々は立場上公務員なので法令上の決まり、規制、それから周りに迷惑をかけないためのマナー講座、そういうものを中心にやっています。

どうしてもヒューメイン・エデュケーションといいますが、動物愛護教育といいますが、こういうことにかかりっきりになれればいいんですけども、そうはいきませんし、時間の制約等の問題もあります。それから、我々も兵庫県に勤める者なので、転勤を命じられれば、事業遂行途中であっても離れなければなりません。それから、一緒に学校のほうで進めてきた先生方も同じように転勤がありますので、プロセスの途中でまた振り出しに戻ってしまうということもあります。

それでも、やっぱり私のモットーとしては、子供たちのなぜ？なに？というクエスチョンマークを一つでも解明してあげたい、それによって動物イコール命を大切にすることを養ってほしい。それが友達を、家族を大事にする心につながるんじゃないかと思います。私は別に学生の時に教育課程を履修しているわけじゃないんで、自己満足の延長のようではあるんですけども、そういう気持ちを持って啓発活動をしています。――

○山口千津子

先生、どうもありがとうございました。

それぞれの地で、それぞれのやり方で一生懸命、どうしたら日本にヒューメイン教育が行き渡るか、本当に出発点にいらっしゃる先生方だと思います。

それでは、これから皆様のほうから御質問をディーパ先生、ジョイ先生、それから藤井先生、犬伏先生にございましたらお受けしたいと思います。それぞれの先生にか、あるいは四方全員にとかいうことをおっしゃっていただいて御質問いただければと思います。

お手を挙げていただけますか。どうも日本の方って最初に手を挙げにくい。

○参加者

大阪経済大学のtktと申します。

初めてこういうところに来させていただいたんですが、それぞれの先生方に聞いてよろしいでしょうか。

大学の学生に少しゼミでこういうことをやりたいなと

思って参加させていただいたんですが、犬伏先生と藤井先生に、大学生の施設見学とかそういうことも受入れてくださるのかということ。

あとは、ディーパ先生とジョイ先生。動物福祉ということで、食べることに関して究極の議論になると思うんですけども、先生たちはベジタリアンなんですかということ、ちょっとお聞きしたいなと思います。

○藤井敬子

奈良県では受入れております。ただし、個人で来ていただいてもそれは無理ですので、例えば学生さんということであれば、あらかじめ目的であるとかそういったことを文書で依頼をしていただければ対応ができると思います。過去にも何校かは来られておりますので。

施設見学も、例えば先ほど犬伏先生がおっしゃったように、私ども管理部門もやっておりますので、処分の現場もあります。処分しているところを見る必要はないと思うので、そういう全体的な施設はもちろん見ていただけますし、その前にやっぱりレクチャーは必要だと思いますので、事前学習も当然ですけども、こちらのほうでもそれなりのスライドなどを用意して、御説明の後、回っていただくという形になるかと思います。

○犬伏 源

兵庫県も、尼崎の本所でもう何年も前から大学生、専門学校生の課外学習、それから高校生の体験学習等の受け入れをしています。奈良県と同じように前もって連絡をいただいて、希望内容の確認、時間調整等を行い、当日は、3時間ほどかけて施設見学及び講習を受けていただいています。

○ディパシェリー・バララン

私はベジタリアンです。実際にはかなり厳しいビーガンということで。

ビーガンというのは、すべて動物を使ったものは使わないということです。基本的には肉、牛乳、それから皮等ですね。つまり動物を使ったものは全く何も使わないということです。ということは、実際社会で生きていくと、あるいは町にせよ、最終的には動物を使うということになるんですね。全くピュアに生きていくということは無理なんです。実際的には使うものは使うということで、何らかの形で動物の搾取にはかかわっているわけですが、私としてはプロセスだと思うんです。どういうふうに動物が痛みを感じているか、環境をダメージしているか。それをいかに抑えていくか、小さくしていくかというそのプロセスだと思うんです。

ですから、私は大きくなると、家族の中で肉も食べましたし、そしてだれかが、例えば牛がこういうふうに

扱われているということを知り、それで牛乳、牛肉です。最初、牛肉をやめました。それから鳥肉ですね、鳥肉についても同じことだということで。それで、動物がそういう扱いを受けていると、動物のそういう状況を知らずに食べることを続けるのかということで。ですから、いろんな選択肢を考える必要があると思います。ですから、人によって、あるいはグループによって、例えば肉のない月、肉なし月というのをやって、つまり肉を食べないというような。月曜日ですね。月曜日には例えば肉を食べないというやり方をしている人もいますし、ですから、それは特に極端なことだとは思いません。例えば女性にしても子供にしても、それが物だと言われれば、それはもう決して受入れないでしょう。ですから、物事は変わっていくということです。

2番目として、自分自身の教育ということです。その上で選択をします。うまくいくこともあれば、いかないこともあるでしょう。ただ重要なのは、そういう問題があるということ意識して、そしてどうするかということ判断することだと思えます。

○ジョイ・レネイ

私もベジタリアンです。でも、私はベジタリアンですが、非常に子供のときからそうでした。肉屋さんに行って、それで豚も、それからラビットもいましたけれども、ぶら下げられて、それがカットされて、もちろん死んでますけれども、肉屋さんで非常にそういう現場を見て嫌に思ったんですね。もう本当に嫌だと、さわりたくないということで、そういう非常に不快なことがあったと。それは戦争のすぐ後だったんですけども、6歳か7歳のころでした。それで、もう動物の愛護、福祉ということで、私の父親、猫がいましたけれども、子供が生まれて、それから農場にはいろんな動物がいてということで、その飼育状況もよくなかったんですけども、馬もいてといったそういう環境にいました。

でも、そこにそういった生命があると、そういうふうに住んでいたということで、その当時にはそれが虐待だ

というふうにはだれも感じていなかった。それが現実だったわけです。ディーパと同時に、私としての非常に強く感じる場所があって、もう少し緩いアプローチかもしれないけども、できるだけ何か、ほかの人のすることに関して何か判断するとか、こうしろ、ああしろということではないですが、それはもうそれぞれの人の選択ですから、ただ、これが私の選択だと。

恒常的な農業ということに関しては、家畜を虐待するという、これが世界でも動物福祉の非常に大きな問題なんですね。つまり数が違いますから、例えば屠殺場に行ってみると、もう本当に、映画でも見えますけども、本当にもう地獄のような光景です。しかし、最近になっていろいろ改善されたところもあります。そのスタンダードとして、こういったケアについて改善された点もあります。ですから、人々がやはり気づかなければいけないということです。動物も同じように感覚を持っていると、意識を持っていると。そして、もっといい思いやり、扱いを受ける価値があると。そして、社会がそういった思いやりを要求するということが必要なんだと思えます。

ですから、簡単に言えば動物を食べると、確かに食べます。何年も何年も食べてきましたし、ずっと食べていくでしょう。しかし、ここで、できるだけ育て方にしても、あるいは屠殺の仕方にも、できるだけヒューメインな形で行っていくということです。できるだけベストな形に対応していくということで、長くはかかるかもしれませんが、いつか人々は肉を食べるのをやめようということになるかもしれないと。ですから、周りの理解、目的というのは、そんなに完全に現実的に無理ということではありません。ベジタリアン、完全に厳格なものではないにしても、最終的にはそういった方向に皆さんが向いていくのではないかとこのように思います。ありがとうございます。

○山口千津子

では、じゃあ前の方から順番に。

○参加者

今、おっしゃったことに関してですが、これは教育の問題だと思うんです。知った上で選択するということが重要だということに思います。私自身、教育者、大学で教えてますけれども、我々がそこでかかわることができるんだと思います。若い人たちを教育していくということです。その上で選択するということであれば、それは彼らの問題であると。しかし、重要なのは、学際的に、教育というものすべてを含めてということが重要だと思います。



日本ではなかなかインテグレートする、すべてを包括するということが難しい状況にあります。何かそれぞれ皆さんの国において、その部分での問題はないですか。算数とか理科とかという話がありましたけど、もっと上のほうの、例えば行政的なレベルで何か問題はないんでしょうか。いわば縦割り行政ということがありますが、そういったすべてを包括するという点に関しての、何か問題は今までなかったでしょうか、ヒューメイン教育ということに関して。お二人にお聞きしたいんですけれども。

○ジョン・レネイ

お答えをしたいと思います。

これはとても難しい問題だと思います。これは状況次第だとも思うんですね。

まず、例えば県のレベル、市のレベルで導入する、できることがあるのか。それともすべて国で統一されていますか。例えば県だとか市町村のレベルで選択できるのであれば容易だと思うんですね。どの国でもなかなか統合するのは難しいと思います。ヒューメイン・エドューケーター、これが教育制度の中に入っていなかったら、それを進めていくのもなかなか難しいと思うんです。私の住んでるところでもそれができてるわけではないんです。

ヒューメイン・エドューケーションは、動物保護愛護グループがやってることが多いです。なので、校長先生に会って、何回も会って何回も会って説得をして、それから動物に関心を持っている先生方とお話をさせていただいて、やっとできるようになると、かなり時間も努力もかかります。子供のところに行くまでに時間がかかるんです。だから、インドだって容易にできているわけではありません。英国、米国のほうがやりやすいんじゃないかなとは思いますが、インドはそんなに容易ではないんですよ。

○ディパシェリー・バララン

英国の場合には随分違います、インドとは全く状況は違うんですね。

私たちはたくさんの強力な動物福祉の団体、動物愛護の団体があって、そこがもうロビー活動をやってくれています、政府に対して。そして、実際、もう多くの変化が、こういったNGOの力で生まれています。でも、やはり年月かけて学んだこともあります。我々のアプローチ、アグレッシブなアプローチではいけない。余りにも要求は強過ぎてはいけない。少しずつの変化からやっていかなきゃいけない。それが最終的に私たちの望むものではないかもしれないけれども、政府はやらなきゃいけないこと、動物福祉だけじゃないんですよ。動物福祉の人

たちが、こういうことをやってくれ、これもやってくれ、あれもやってくれと不当にまで要求したら嫌だなと政府も思うでしょう。なので、動物福祉、それから獣医の先生方が、教育のところにかかなり深くかかわっています。

変化はあります。私は獣医師ではないけれども、16年間獣医師のところで仕事をしていました。60年代、70年代のことです。その昔を考えると、当時、十分に動物のケアはできてなかったし、獣医師も教育者とは見てなかったと思うんですね、自分自身を。すばらしい人たちです。でも、当時の獣医というのは、今の獣医の態度とは違ったと思うんです。今の獣医の先生方は、動物福祉とは何ぞやということを理解してらっしゃいます。60年代、70年代、そこまで考えていませんでした。今、獣医師のところに行かれたら、ずっとすぐれた教育資料がそろっています。実際に定期的に学校に行って、獣医の先生が子供たち、それからもう少し大きな大学生に指導していたり、また、子供たちに、獣医、医師の方がやってらっしゃる動物病院に来てもらっていろいろ学んでいただくと、それから命ってこういうものだということも学んでもらうこともしています。

西洋の、欧米の獣医は、非常に高く人々から尊敬されています。なので、獣医の先生が言ったほうが人々が聞いてくれるというのもあるんですね。でも、この数年間、獣医をやってらっしゃる方々が、自分たちの重要な役割に気づき始めています。きょうの午後、またちょっとお話をします。

私どものプログラム、これは獣医の人たちが中心になってやっているプログラム、これを御紹介したいと思います。これは小動物学会で来年発表することになっています。なので、獣医がかぎを握っていると思うんです。動物についてたくさんのことを獣医の方は知っています。なので、学校の先生方ももちろん、そのヒューメイン・エドューケーションということで果たされる役割は大きいと思うんですが、教師だけが教育者ではないということです。教師は教師です。でも、教師は動物愛護団体が教育をしようとしていることにも気づいてほしいし、獣医の方々がやってることにも気づいてほしい。ランク付けじゃないんです。でも、やっぱり現実的にやらなきゃいけない。何かをやらうと思ったら、だれがやるかなんですよ。だれが変化をもたらせるかなんですよ。一番いい方法でやっていかなきゃいけない。動物愛護団体が獣医をプッシュして、獣医さんから今度は学校の先生にプッシュをしていくという形で、ドミノのように効果をもたらすことも可能でしょう。

○山口千津子

お願いします。

○参加者

大阪府立大学の獣医学科の学生のシズ ヨリと申します。

今回の講演、非常に勉強深くて、とてもありがとうございました。

それで聞きたいのが、多くの環境団体が現在は存在していますが、その中には科学的知見に基づかなかつたり、非常に重大な事実誤認をしていたり、相手の文化に対する知識が全くない中で活動している団体が多くあると思うんです。その中で、このヒューメイン・エデュケーションのような教育をするときに、指導者がそのような知識をちゃんと持っていなかったり、十分な教育が施されていない指導者が子供を教えるということは、そのような団体に加担するような子供たちを育てる危険性を持ってると思うんです。

そういうときに、学校の中に特に入って教育する場合には、指導者の資質の担保が要ると思うんですが、どのように指導者の資質とか、そういった知識とかがあるということを担保して学校に入っていかれようと考えているのかどうなのかというのをお聞かせ願いたいです。

○山口千津子

ディーパ先生、それからジョイ先生、お答えいただけますでしょうか。

○ディパシェリー・バララン

質問を理解できたとは思いますが、小さな子供の場合、例えば指導するのが小さな子供の場合には、まず優しく情熱のある人が一般的な知識を教える。動物に優しくしましょうと教えるだけで十分だと思うんです。

でも、例えば学生、それから理系の学生に教えるとなったら、これはアマチュアではできないということです。だから、私たちは。私たちはと言います。私はもう引退をしましたが、昔は、以前はそういう仕事をしていましたから、私たちは動物福祉の概念、それをまずつくるところから始めたんです。

2人の人が、私とその1人なんですが、2人が始めました。私たちが獣医のところに行って、獣医さんのところに行きました。私、実際教師でもありますけれども、獣医のところでも仕事をしたこともありますし、ほかの国に行ったこともあります。でも、獣医さんほど私は周りの人から信頼されていませんから、理系の学生さん、それから獣医学科の学生さん、私が行ってもだれも気づきませんから、一緒に獣医さんにも参加をしてもらって教育

を行いました。

一般的なアイデアを教えます。私が経験した実践の現場でのことも教えますけれども、科学者として獣医さんにもお話をさせていただきます。実践と科学を結びつけるということを行っています。例えば科学的な知識を持っていても、どうやってそれを実践すればいいかわからなかったら、これはまた理論だけになってしまいます。なので、それぞれのスキルを生かして教えていくことが必要だと思うんですね。

例えば政府を説得しようと思ったときに、やはりそういったサポートがなければ政府を説得することはできません。動物愛護団体が泣いて、猫や犬に優しくしてと言っても、だれも耳を貸してくれないでしょう。だから慎重に、だれに今伝えようとしているのか、それをしっかりと踏まえる必要があると思うんです。それでお答えになりましたでしょうか。

それと、文化の違いということもおっしゃいましたよね。文化の違いを知らないということもおっしゃったと思うんですが。ここでポイントになるのは、これは私のプレゼンでも伝えようとしたんですが、その国の中でやっている、その国でやっている人がプログラムを立てていかなきゃいけない。例えば、イギリスでやっているのをそのまま日本に移すことはできないし、例えば同じ英語を話す国にあっても、英国のプログラムをそのままインドで実践することはできないんですね。それと、都会の子供と、それから田舎に住んでる子供では、またプログラムが違うはずなんです。その人生も、それから生活経験も全然違います。だから、プログラムを開発するときに、文化の違いを知っていなきゃいけない。もし知らないんだったら、知っている人を中に引き込んでいかなきゃいけないと思うんです。なので、ベストなプログラムは何かということを考えなきゃいけない。

○参加者

ありがとうございました。



○山口千津子

ほかにございますでしょうか。

あと1問、最後の質問を。青木先生。

○参加者

獣医をやっております、青木と申します。

私の質問は、AAEとかAAAとか、いわゆるヒューマン・アニマル・ボンドとの関係なんですね。特にエデュケーションという形になりますと、AAEというものの関連性について差別化というんですか、その辺を明確に分けていただけると私も理解しやすいかなと思います。

それともう一つは、日本ではAAEにかこつけてるのかどうか分かりませんが、学校で動物を飼ってるんですね。この飼ってる動物の飼い方の問題が、ちょっと私は気になるところがございまして、これをAAEという位置づけになってるんだろうかと、御存じでしたら教えてくださいたいと思います。

○山口千津子

ディーパ先生、ジョイ先生、お願いします。

○ジョイ・レネイ

これはいいアイデアだとは思いませんね。生きた動物を学校が飼うというのは、あんまりいい考え方ではないと思うんです。確かに長年やってきました、イギリスでも。でも、学校が休みのときがありますよね。そうすると、例えばモルモットだとかジャービルだとか、どう飼えばいいのかわからない。時には、世話の仕方を知らない人が世話をするかもしれない。

英国で調査が行われています、英国で。その中で、一体こういった学校で飼っていた動物がどうなっているかという調査をしたんですね。今はイギリスの学校で動物を飼っているところはないと思います。先生が完全に全部責任を負いますと言って、ウサギなりモルモットなりを飼うのであればいいかもしれない。でも、一般には、私はこれは余りいいことではないと思うんです。

例えば教室で動物を飼うと、これは動物を恒久的に飼う

場所ではない。学校は恒久的に動物を飼う場所ではないと思います。

○ディーパシェリー・バララム

ジョイの言うとおりでと思います。動物を教室の中に飼っておくとかというのはよくないと思うんです。学校というのは、動物にとっての生活の空間ではないと思います。だから、動物保護団体に動物を連れてきてもらうということがあるかもしれない。でも、藤井先生がおっしゃったように、これも動物にとっては非常にストレスがかかる経験なんですね。だから、動物をとにかく連れていけばいいやということではよくないと思うんです。

例えば、犬が子供をかんじゃうかもしれない。また、猫がひっかいちゃうかもしれない。なので、シェルターがありますよね。シェルターにはたくさんの動物がいます。シェルターに住むようになった、だれも引き受けてもらえなかった動物がいます。非常に人の周りにいたいという動物もそこにはいるんですよ。そういう動物がいる場合、時に、その動物を連れていくと、子供好きな人好きな動物がいるかもしれない。そういう動物がいたら、獣医さんと一緒にその動物を学校に連れて行って、動物と触れてもらうという機会を持つこともできるかもしれません。でも、一般論としてはジョイが言ったとおりで、私は学校で動物を飼うのはあんまり賛成できませんね。

○山口千津子

ありがとうございました。

それから、日本側の、実際にいろいろヒューメイン・エデュケーションのことを努力していらっしゃる藤井先生にも、この議題についてちょっとお話ししていただきたいと思います。

○藤井敬子

AAEとAAAってすごく混同されやすい部分で、私もさっきも言いましたように、ずっとAAEだと思ってたのは、ひとりよがりのAAAで、全然動物のことを見てなかった。

以前に、シバノイ先生のセミナーに参加したときに質問された方が、私のわんちゃんもAAEやAAAをしたいんだけど、なかなか人前に連れていくと嫌がるんだけど、どうしたらいいですかと質問されたときに、先生がぱつぱつと、あなたのわんちゃんは向いてませんねとおっしゃって、御自身のわんちゃんを見せられて、子供さんのところにその子が寄って行って、こういう子が向いてるんですよとおっしゃったんですね。まさにそうだなと思って。

ですから、動物介在教育において私がいつも思ってい



るのは、健康な動物、健やかな動物、いわゆる福祉が守られた動物を見せなければ、その教育的効果はマイナスになるということだと思えます。苦しめる動物、傷ついている動物、無理やりやらされてる動物は、子供たちには何も訴えるものがない。それどころかマイナスの、動物ってこんなふうに対してもいいんだなということの子供に教え込んでしまうということになるんですね。

学校飼育動物は、これまでずっとそういう生きた教材という形で、日本では学校の片隅に放置されて、汚い、臭いという、あなたたちの学校にはウサギがいるのと聞くと、いる。「何匹いるの」、「さあ知らない」と。「名前は何」、「知らない」という、そんな状況だったんですね。私は学校に入ることがあって、学校の飼育動物の環境を整備して、その動物たちを教室に連れて行って授業したことがあるんですけども。子供たちが、「わあ、かわいい。ウサギを連れてきてくれたのね、先生」と言うから、「いやいや、連れてきてないよ。これはあなたたちのウサギだよ」と言ったら、「え、私たちのウサギ、こんなにかわいかったの」と言ったんですよ。

だから、大人がAAEって、大人がどれだけ命に対して一生懸命な姿を見せるかとか大切にしているかということがとても重要なことだと思います。なので、学校飼育動物をすべて否定するわけではない。私も飼わないことが望ましいと思っています。

ただ、大人が適正に管理をされて、さっきもおっしゃってたように、先生のペットが学校に来るよとかという、子供たちがちゃんと飼育の方法やルールを事前に学習した上で触れ合うというのはあるのかもしれないなと思っています。

○山口千津子

ありがとうございます。

本当にもっともとお聞きしたいことがいっぱいあるんですが、午後からのセッションのために、お昼時間をとらなければなりませんので、済みません、ここで御質問は切らせていただきます。

また、午後のセッションは2時からになりますので、こちらに2時までにお戻りいただいて、午後はもうワークショップに徹するというので、御準備よろしくお願います。

最後に、4人の先生方に盛大な拍手をよろしくお願います。ありがとうございます。

(休憩)

○司会

では、ジョイ先生にさっそくワークショップを始めていただきたいと思えます。よろしくお願います。

○ジョイ・レネイ先生

皆さん、こんにちは。皆さん、この数日間、私たちはたくさん御飯をいただいて、今、おなかがいっぱいになっているんですが、私が話す時間になりましたので、お話をしたいと思います。

きょうの午後は、教師を中心に、教師がどのようにヒューメイン教育を教室に導入するか、もしくはその大学なり、それから単科大学で導入するかということをお話をしたいと思います。こういった情報を提供するためには、私どもの政府のほうが、カリキュラムを政府のほうからもらうというのはなかなか難しい。これをカリキュラムに入れてくれなきゃ困るんだと言っても、なかなか起きないですよ。簡単にすぐには入らない。だからといって、ヒューメイン教育、これが起きていない、これを行うことはできないというわけではありません。そこで、どうやればこのシステムの中にうまく取り入れていけるのか、そしてこのヒューメイン・エデュケーションの教材を教室に持ち込めるのかというお話をしたいと思います。

教師は、ある教科の指導法を学びます。ヒューメイン教育においても同じことが言えます。私からの提案です。皆さんの中で、ヒューメイン教育を導入したいと思っていらっしゃる方はいらっしゃると思うんです。ぜひ、会議を開いたり、ワークショップを開いて、教師向けの会議、教師向けのワークショップを開いていただきたい。その領域で、まず皆さんの専門性をしっかりと生かしていただきたいと思えます。

さて、1995年、私たちは台湾で仕事をしていました。台湾で仕事をしたんです。ヒューメイン教育、これは新しいテーマでした。当時、動物福祉ということ自体が新しい活動でした。ちょうど民主化が起きた後だったので、台湾で。民主化が行われて、人々は意見だとか、それから自分が考えていること、これが新聞に載ることを非常にこを恐れていたんですね。それが何か挑発的に見られるんじゃないかと思っていました。なので、当時はみんな、目が家族に向いていました。政治的な状況のゆえもあるでしょう。

しかしながら、同時に民主主義について、いろんな話をしてはいました。でも、民主主義が根づくには時間がかかる。そして、民主主義が人々の意識に上って、人々が話せるようになるには時間がかかると思っていました。そこで私たちは、たまたまそのときに最初のグループと話をしていた、人権についての取り組みをしていました。そして、その人権と環境権、これは最終的には動物の福祉、動物の権利へとつながっていくのですが、そ

のグループと仕事をしていました。ここでは、政府に対して挑発的に話をするのではなくて、教師向けのワークショップをしようと決めたのです。350人の教師を招きました。このワークショップに参加をしてもらいました。台北で開いたワークショップです。

このワークショップのときには台風が来まして、たくさんの方が来れなかったのですが、それでも150人が集まりました。学校で指導している先生たち、私立の学校の先生、それから公立の学校の先生もいらっしゃいました。7歳から11歳の子供たちを教えている先生でした。そういった年齢に、きょうは焦点を絞ってお話をしたいと思います。

台湾では、アメリカの人の協力を得て、教師向けの手引書がつくられていました。教師向けの手引書の中には、いろんなものが入っていました。教師が動物のケアをするに当たって、犬や猫の世話をするに当たって、何をしなければいけないかが盛り込まれていました。そこで、それを使いました。これは、実はデザイン的にもよく似ていましたし、内容的にも我々の教師向けガイドと非常に似通ったものがありました。そこでワークショップを行いました。教材を教師に提供して、できる限りそれをうまく導入するということを考えたんです。現実的には、先生の中には非常に情熱を持たれて、こういった教材を教室で使われた先生もいらっしゃいます。将来やりましようと思った先生もいますし、全く何もなかった先生もいる。でも、これが人生というものです。

長い話を短くしますと、数年たった後、非常に大きな国際機関が、この教材の開発に支援をすることになりました。ほかの国でも使えるマニュアルをつくらうということになったんです。現在は、これが世界の多くの国で利用されています。なので、ぜひ、皆さんもこの組織と連絡をとっていただきたい。これは世界動物保護協会というところですよ。WSPAというところですよ。こちらのほうに教材があります。CDで教材を提供されています。教師向けのもので、たくさんの方の支援になるかと思えます。ぜひそれを使ってください。

そして、さらに小さな声で、うちの学校の、このヒューメイン教育のスポンサーになっていただけませんか、もう少し情報をいただけませんかとささやいてみてください。どうなるかというと、自治体なり国の政府に話しても、国の政府や自治体は喜ぶかもしれない。イニシアチブがそういった形でとられたこと、そしてそれをさらに進めるということに非常に興味を持ってくれるでしょう。国際的な機関ですから。教師向けの手引き、ティーチャーズガイドと呼んでいましたけれども、これは非常

に有用な教師向けの資料となります。

それから次に、もう一つ、すばらしいものが登場しました。これはブルドッグと呼ばれるプログラムです。このブルドッグという教材、これは獣医の方たちが立ち上がって開発をしたものです。教師と一緒に社会科学の人も協力しながら作成したもので、学校で教師が使うための資料です。ウェブサイトもあります。ウェブサイトからコピーをしていただくこともできます。

さらに、ここからまた1歩進んで、その情報をぜひ日本語にも翻訳なさることをお勧めします。背景には、獣医の先生方がついています。なので、絶対スポンサーはつくと思うんですよ。非常にいい教材です。非常に賢いやり方だと思います。

ペットのオーナーに話をするときに、また、動物愛護の団体と話をするとき、いや、犬はかみませんよ、大丈夫ですよ、そんなことは問題じゃないですよと言うかもしれない。でも、問題なんです。というのは、実は子供たちがかまれている、それは家の中で起きていることが多いですね。86%が家の中で、動物によって子供がかまれています。なぜかという、家族のほうは、どのように動物と接すればよいか知らないからなんです。なので、動物は混乱してしまいます。混乱してかみます。

例えば、動物を何かののしるようなことを言ったり、こんなことしちゃいけないとか、動物に対して残酷な扱いをするとか、そうすると動物は混乱してしまって、かむことがあるんです。皆さんの犬だって、いや、うちの犬は絶対かみませんよ、いい犬だからと言っても、その犬にかまれるかもしれない。なので、やはりほかの人にも影響を与えなさいいけないし、子供たちを動物の周りにいて、安全に生活できるようにしなければなりません。

ディーパさんがつくったCDがあります。ここにすべて、こういった情報、ブルドッグの情報は、どこに行けば得られるかということがすべて入っています。ブルドットオルグというウェブサイトがあります。

来年、たくさん、グローバルな注目が集まるかと思えます。というのは、世界小動物獣医会議のところで、これが発表されるからです。パイロットスキームは数年前から始まっています。もう既に会議についての話もしていますけれども、実際に正式に発足するのは来年なんです。

皆さんにお話をしたいこと、それは皆さんの学校で、恐らくもう既に有用な情報を持ってらっしゃると思うんです。カリキュラムの中にもいろんな情報が入っていると思います。最も成功するヒューメイン教育の教材というのは、「ブラック・ビューティー」という本です。「ブ

ラック・ビューティー」、これはもう日本語にも翻訳されていると思います。皆さんの国で、日本語で出ているのも知っています。1800年代後半に、動物について非常に懸念した女性が書いた小説なんです。当時としては珍しいことでした。馬についてのストーリーを書いています。

このストーリーは、馬が語る形で書かれています。馬が自分の人生経験について、自分に何が起きたか、例えば、ロンドンの町で馬車を引いていた、田舎で生まれた、そういった生涯について語っています。子供向けの児童図書ですが、古典図書、でも世界のベストセラーの一つでもあります。私も、この「ブラック・ビューティー」を教室で使っているという先生をたくさん知っています。優しいメッセージが子供たちに伝えられる、素晴らしい本です。日本についてはどうかはわかりません。日本の方々はどうかわかりませんが、イギリス人というのはすごく馬が好きです。本当に素晴らしい本ですから、ぜひ使ってください。

また、これに続いてもう1冊、アメリカで「ビューティフルジョー」という犬についての本が書かれています。これは、茶色い雑種犬についての本なんです。こういった本はたくさんあると思うんです。非常にヒューメインな人道的なメッセージを伝える本がたくさんありますから、こういったものをぜひ、ヒューメイン・エデュケーションの中で使ってください。複雑な科学的なものだけではないのです。人の行動というのは複雑なものですから、たしかに複雑な側面もあるでしょう。でも、こういった例を通じて、それから皆さん自身の経験、事例を通じて、文学を通じて、動物に優しくしましょうと教えることは、そんなに難しいことではありません。そして、そんなに複雑なものでもないはずですよ。

きょうは、幾つかの教材を御紹介したいと思います。皆さんも、どうやって教材づくりをすればいいかは知ってらっしゃると思うんです。そして、ここで見ている以上にたくさんの教材があるかと思っていますから、それを私の口から時間をかけて語ることは避けたいと思います。でも、ぜひ、ヒューメイン・エデュケーションにかかわろうと思ってらっしゃる先生方、ぜひ、ウェブサイト、ティーチャーズガイドを見てください。ウェブサイトのアドレスが入っていると思います。それからブルドッグ、これも非常によいものです。それから文学、学校の図書館の中で見てみてください。そんなに難しくない、いろんな実は小説や童話があると思うんです。

では、ここから簡単に短いフィルムを御紹介したいと思います。教師が子供たちにどれだけの影響力を行使で

きるのか、そして子供たちが、その影響を受けて、実際に行動に移せるということを示したものです。

これはストーリーなんですが、グレースという名前の女の子がニュージーランドに住んでいます、7歳です。グレースは、国内のコンテストに参加しました。これは、学校でこれを奨励しているものだったのですけれども、少し短いフィルムですね。ショートフィルム、自分でテーマを何でもいいので選んで、それをコンテストに出しました。この審査官は、メディア界でも、あるいは業界でも非常に有名な人ですが、「ロード・オブ・ザ・リング」の監督も審査員として入っていました。

ですから、非常にメディアの注目を浴びたコンテストだったのですけれども、グレースはテレビで、ある映画を見ました。これはアメリカで行われたドッグファイト、闘犬に関するものでした。そこで実際に、犬がこのドキュメンタリーでけんかをする場面を見たわけです。そこで自分も映画をつくってみよう、ドッグファイトについてつくってみようということになりました。実際にそれがニュージーランドで行われているのかどうか、どこでやっているのか、なぜそういったことを行っているのか、自分で調べてみようと思いました。それから、お父さんがもちろん技術的な面で助けたんですけども、実際にフィルム、映画をつくってみようということをしました。彼女は7歳です。ですから、かなりアマチュアの映画になります。教師であるお父さんが、グレースがそういうことをしたいということで、自分自身で彼女にやらせたわけです。ですから、短いフィルムですけれども、ちょっとこれを見ていただきたいと思います。ヒューメイン教育ということの活動ですけれども、7歳という子供ですね、少女でも可能だということを示すいい例だと思います。

音声入りますか、大丈夫ですか。いつも何かひっかかるんですけども、ちょっと待ってください。

こんにちは、グレースです。

パルマストンノースからドッグファイトについて



て報告します。ドッグファイティングは非常に危険で、場合によっては犬が死ぬこともあります。

音声が出ていないんですが。

まず最初ですね、私は犬が大変好きです。ドッグファイティング、闘犬というのは非常に私も心配します。1999年の動物愛護法にも反するものです。10年ぐらい私は警察をしていますが、実際に目にしたことはありません。ただ、どこかでやっているというような話は聞いたことはありますが、ほとんどニュージーランドの北部のほうです。グーグルでちょっと検索してみました。警官の人が言ったことが本当かどうか調べてみました。SPCAは批判しています。ある男性グループの人が、高齢の動物を盗み出して、それをピットブルのえじきにしたという、公園でそういったシーンがあったということでした。14歳のリンカーンですけれども、非常にひどく傷ついています。とてもかわいいリンカーンという犬なのに、どうしてそんなことができるのでしょうか。

このSPCAの仕事、活動について調べてみました。リンカーンを助けるということをしていたので、そこで彼らのところに行って、ドッグファイティングについて何を知っているのか、どういうふうにとどのぐらい行われているのかという質問をしてみることにしました。幸いにも、そんなに今、このエリアではドッグファイティング、闘犬は行われていません。

ドッグファイティングというのは、むしろ隠れたところでされているんですが、一体このドッグファイティングでは何が行われるのですか。自分で見たことはないのですが、テレビで見るぐらいしか私も知らないんですけれども、場合によっては犬が死ぬこともあるということで、非常にアグレッシブな攻撃的な犬です。非常にきば、歯もするどいですし、筋肉、あるいは体を引き裂くというようなこともあるということで、結果として犬が死ぬこともあります。このドッグファイターは、ペットドッグを盗むんですか。もう1回言ってもらえますか。盗むんですか、犬を。そうではないと思います。多分、そうではないでしょう。大抵は、そうですね、そういったタイプの血統の犬を交配させて育てるということで、特殊な犬の種類になりますが、そういった血統の犬ですね。それで非常に攻撃的な犬をつくり上げるのです。

どうすればSPCAを支援できますか。いろんな方法があると思います。例えば、時間、お金、いろんなものを寄附すると。タオルとか毛布とか、ケネルで冬は寒いですから、動物を暖めるのに必要です。いろんなことができますよ。センターに行って、非常にいろいろと作業がありますし、一般の公のいわば支援がなければ、な

かなかこういったセンターは継続していくことが難しいんですよ。

SPCAがそういった役割を果たすということで、では、私は何をやるかということで、八百屋さんをすることにしました。野菜、それから果物ですね。フェイスジョアとかグレープフルーツ、ポテト、こういったものを売ろうと思います。少しお金を集めて、SPCA、彼らの活動に寄附しました。動物が好きだし、いろいろと助けられてありがとう。寄附してくれてどうもありがとうございます。

済みません、ちょっと大変ですが、全体の考えはわかっていただけたと思います。グレースが何をしたか、リサーチをしたんですね。ドッグファイティング、闘犬についてグーグルで検索して、何が起きているか、ニュージーランドでの状況を調べました。というのが、それはニュージーランドではないという話だったので、でも実際にはされていると、ほとんどの国でされているんですが、SPCAですね、こういったところが、このリンカーンという犬を助けたということで、これは闘犬の犠牲になっているんですが、そこに行っているいろいろと聞いてみると、これはペットドッグ、ペットだったんですけど、盗まれた犬だということで、本当にそうなんですかと。通常はそんなことではないと、盗むわけではないということで、大人は、子供がこういったこの難しい問題は余り聞きたくないだろうと思ったんですが、彼女はしっかりとこれを受けとめています。そういった組織があると、SPCAという組織があるということで、それに対して何か支援をしたいとグレースは考えました。ということで、彼女とお姉さんは、庭で野菜あるいは果物を育てているということで、それを家の外で売ることになりました。少しながらお金がたまりましたので、それをためてSPCAのほうに寄附をするということをしたわけです。ということで、グレースの映画を見ていただきました。

実際には、このコンテストで勝ったんですけれども、優勝しました。非常にすばらしい映画だということで、クラスや教室でも使われると。こういった、非常にお金のかかるものを使わなくても、非常にシンプルな方法でもヒューメイン教育は可能だということです。

ピーター・ジャクソンという「ロード・オブ・ザ・キング」の監督ですね、審査員の中にいたんですけれども、彼女は本当は熱心で、何かいいことをしようというふうに頑張ったということで、優勝の賞をあげたということでした。学校のほうでも、子供たちに、こういった社会的な活動を奨励したということで、学校にも賞が与えられました。メディアも当然注目しまして、こういっ

たコンテストで優勝した学校ということで報道したわけ
です。

ということで、教室においても、こういうふうにご供
たちに影響を与えることができる。何か社会的な問題に
対して、いわば活動を促すことができるということを示
すいい例だと思います。

ここで、資料を今から渡します。この映画の簡単なま
とめなんですけれども、そして、皆さんに考えていただ
きたい問題がそこに載っています。その上で、こういっ
たテーマに関して、皆さんがどういうふうにか考えるか
ということを考えていただきたいと思います。親あるいは
教育が、こういったドッグファイトに関して、非常に不
愉快な活動ですけども、こういったことを調べるよう
に促すということがいいことか悪いことか等を含めて、
何分時間がありますか。何分ぐらい時間をかければい
いんですか。3時半までですね。じゃあ、1時間ぐらいた
っぷりありますので、各グループで、何グループ今ある
んですか、きょうは。皆さん一緒に座っているんですか。
いや、ちょっと後ろを向いていただいて、お互いに話を
できるように後ろを向いていただいて、それぞれディス
カッションしてください。では、チャンスがあれば全体
を読んでいただいて、テーマは何でも構いません、テー
マと言いますか、内容は何でも構いません。質問がすべ
てそこに書いてありますので、一覧として資料の中にあ
りますので、各配付の資料ですね。そのことについて何
でもいいですので、ディスカッションしてください。七
つ質問があります。

○参加者

……のところの、グループアクティビティー、この
14時半から15時半と書いてあるところですよ。1番から
7番まであります。

○ジョイ・レネイ先生

ちょっと各グループで、それぞれヘルプしていただ
けますか。アイデアとしては、話をするということですよ。
ディスカッションがポイントです。ディスカッションに
参加する、ディスカッションするということですよ。

ちょっと聞いていただけますか。いいですか、聞いて
ください。ケーススタディを読んで、そして質問、ディス
カッションして、レスポンス、回答、まとめを用意し
ていただくと。各グループで皆さんの考えを、その紙に
書いてください。時間が来たところで、お一人ですね、
お一人の方、そのまとめを書いた人、グループを代表す
る形で何を話したか、どういうふうにか考えるかという
ことを、後で口頭で発表してもらいます。

話ができるように移動してもらえれば構いませんの

で。

○司会

皆さん、今、お話し合いされていると思いますが、映
画が最初のほう、音声が切れていたもので、もう1回見
たいというグループはありますか。もう1回見たいそう
です。では、もう一度最初からオンエアをします。それ
で今、質問を皆さんは手にされたと思いますので、チェ
ックしながらもう一度ごらんになってください。

(ファイルNo.4)

○司会

それでは、ジョイ先生のほうが、こちらにおかけに
なりまして、皆さんのプレゼンテーションをお聞きにな
るということですので、10分ぐらいつつプレゼンテー
ションをしていただきたいと思います。まずは順番ど
おり、Aチームから行きたいと思います。では、こちら
でお名前を言っていただいて、お願いします。

○参加者

トップバッターを務めさせていただきます、Aチ
ーム所属の公益社団法人、日本動物福祉協会の代表と申
します。よろしくお願いします。

Aチームは、いろいろと意見をまとめましたところ、
これはもう順番どおりお答えしていったらよろしいの
でしょうか。

まず、1番のなぜグレースは闘犬についての映画をつ
くることを決心したのでしょうかというあたりなんです
けれども、ちょっと映画、ショートムービーからだけ
では読み取れない部分もありましたので、ちょっと資料
のほうも参考にさせていただいて、皆さんで意見をまと
めました。アメリカの闘犬に関するドキュメンタリーを
見て関心を持ったということがきっかけとなって、自分
の国でも行われているのかという疑問が、映画をつくる
決心になったのではないかとということで意見がまとま
りました。

あと、グレースの選択や行動がどの程度、家族や学校



の先生に影響されたと思いますかというあたりなんですけれども、御家族のほうは、彼女、グレースちゃん自身が発想であったり、調査方法であったり、映画の内容は考えたようですが、お父さんやお姉さんが技術面で援助をしてくれたということがちょっと背景の中にありましたので、恐らくその7歳の女の子が、こういうことをやってみたいんだと言ったときに、非常に協力的というか、そんな勝手にやるときなさいよとかではなく、非常にその7歳の女の子の純真な思いを受けとめてあげられるという、そういう家族関係があったのではないかと読み取りました。

あと、学校の先生の影響なんですけれども、ちょっとこれはチームで話し合ったところ、闘犬についてのドキュメンタリーを見るきっかけをもしかしたら学校で与えてもらったんじゃないであろうとか、あと実際に映画が賞をとってからなんですけれども、学校のほうでも教材として使われたということですので、恐らくふだんから学校の先生とも何か疑問に思ったことをちょっと、自分はこう思っているんだけど、こんなことをやりたいんだけどということを、じゃ、ぜひやってみたらみたいな、何かそういう良好な関係が築けていたのではないかなと推測いたしました。

2番ですね。また、7歳の子供が闘犬の残酷な知識にさらされるべきだと思いますかということだったんですけれども、ここも非常にちょっと時間をかけてお話しさせてもらったんですが、知識といいますが、いろいろ視覚的に入ってくるものがあつたりとか、話で聞くというような知識もいろいろあるかと思うんですけど、やはり7歳という年齢を考えた場合に、例えば闘犬に限って言いますと、血が飛び散っているような場面であつたりとか、実際に弱い犬のほうがかみ殺されてしまっているような場面であつたりとか、そういった映像を見せるかどうかという選択よりも、大人の思いとしては、余り見せたくないよねというふうに意見はまとまりました。

ただ、何か子供に聞かれたときのために、知識として大人は知っておくべきであろうし、もしかしたら子供の受けとめ方によるかもしれないんですけれども、映像を見せるかどうかまではちょっと別として、まあ知識として、やはり知っておいたほうがいいのかなというところで意見がまとまりました。

それから3番なんですけど、なぜ闘犬のようなことが世界の先進国でもまだ行われているのだと思いますかということなんですけれども、やはりギャンブルの対象になってしまっているというのは、もうだれもが知っている事実ですし、やはり何かそういうやみの部分は、なか

なか法律で規制されない限りは介入していきにくいという部分がありますので、先進国だからとか後進国だからということではなく、やはり人間が生活している以上、起こり得ることなのだろうかかと私自身も解釈をいたしました。

4番目ですね、もし自分がグレースの担任の先生だったとしたらということなんですけれども、具体的に彼女が起こした行動ですね。どういう疑問を持って、どういう行動を起こしていったのかというきっかけも含めてなんですけれども、映画づくりのプロセスを実際に映画を見ることで紹介して行って、自分が闘犬のことだけに、今回のこの映画だけに限らず、疑問に思ったことを調べて、解決に向けていく姿勢というのを学んでいけるようなアプローチの仕方が考えられるのではないかなと意見をまとめました。

次、5番ですね。もしあなたが動物福祉団体だったとしたらということですが、これが子供向けではなく、一般の、特に大人の方とか、一般の方向けであれば、もうストレートにこの映像を見せて、例えば今回のこの映像に限って言うと、闘犬を禁止していくことの必要性を啓発していくということを考えていきたいなと感じました。

あと6番ですね。ちょっとこれもチームの皆さんと話をしていたんですが、この質問の、ほかの社会的問題というのが具体的にどういう社会的問題なんだろうなというところが少しちょっとわかりにくかったので、もしかしたらちょっと私たちのチームが導き出した考えは、直接この質問にはそぐわないかもしれないんですけれども、適当に、あいまいに、何となくそうなんちゃうとかというような片づけ方をするのではなく、やはり疑問に思ったことをまず自分で調べてみる。自分で調べてみて、まだわからないことであつたりとか、そういった情報を他者から情報を得る。そして、その他者から得た情報によって、具体的に自分には、そのヒントをもらって何ができるのかということを実践に結びつけていく。

今回のグレースさんの映画でいいますと、まずその闘犬のドキュメンタリーを見た後、自分の国でも行われているのかどうのかなという疑問を感じたというのが一つ。その後、自分で調べたという、まず行動を起こしているということですね。自分で調べるだけではやはり限界があるかと思しますので、地元のSPCAの調査の方に実際に取材をする、情報を得るということ。そして、最後に、取材の中で、例えば募金とかボランティアとかいろいろできることがあるんだよということを教えてもらった上で、実際に自分でも募金集めをしてSPCAに

寄附をするという、これは起承転結というまとめ方でいいかどうか分からないんですけど、やはり疑問に思ったことを調べて解決に向けていく、そして具体的に自分で方策を探していく、実践するというところをいろんな場面で使っていけるのかなというふうに考えました。

最後の、そのほかの実践的なヒューメイン教育についての意見なんですけれども、まず、子供にとって、なぜという疑問を大事にしてあげたいねということは、もうチームの皆さんで意見がまとまりました。なぜを大事にするというのはどういうことかという、さらにそのなぜという疑問に対して、興味とか関心が沸くような何か働きかけ、導きができないだろうかというところまで話ことができました。

あと、具体的にできること、先ほどのグレースちゃんの映画でいいますと、寄附とか募金なんかも挙げられましたが、実際に具体的にできることまで行動に移すというところまで導くといえますか、ヒントを与えるというか、何か働きかけができればいいのではないかなというふうにまとまりました。

あと、ちょっと個人的に、私自身はまだヒューメイン教育という分野では、なかなかまだ経験が浅いんですけども、数少ない小学生対象のサマースクール的なものであったりとか、中学生のトライやる・ウィークな職業体験なんかを受け入れている経験から思いますと、やはり教育する、教育という言葉をちょっと私が使うのはおこがましいんですけども、やはり物事を伝えていく側が、人間のことが好きであってほしいなというか、子供のことが好きであってほしいなというのは、本当に実感した次第でございます。やはり動物保護団体とか、福祉団体とかに身を置いていますと、多くの方が、犬は好きだけど、猫は好きだけど、人は嫌いですとよく聞かれますね。私自身は、人のほうが面倒だなと思うことはありますが、しかしやっぱり自分1人でも何もできませんし、犬、猫はやっぱり人とのつながりの中で生きていけるものだと思うので、そういう動物との関係だけじゃなくて、人間関係も大事にしたいなと思っていますので、ぜひ、教育という立場で携わる方には、人が好きであっていただきたいと願っています。

また、ちょっと補足等がありましたら、Aチームが助けてくださることになっております。よろしく申し上げます。

○参加者

いや、もうないです。

○司会

最初からAチーム、さすがパーフェクトアンサーとい

うことで、ジョイさんにコメントを聞いてみたいと思います。

○ジョイ・レネイ先生

このようなやり方で子供に映画をつくらせる、動物についての映画を見せるというのは、よい考えだと思われませんか。先生が、いいスポンサーがつけば、このようなことが可能になると思われませんか。例えば、スポンサーがつけばメディアもこれに注目をするからです。ちょっといろいろようなところがあると思いますけれども、これでメディアの注目を集めることになると思います。これは日本では可能だと思われませんか。

○司会

Aチームのお答えをお願いします。

○参加者

Aチームというよりも私個人の考え方としては、特に闘犬だけを考えますと、このスポンサーが非常につきにくい。それ以外の動物福祉だとか何かについては、スポンサーがつく可能性は十分あります。

○ジョイ・レネイ先生

こんな闘犬を促進するためにここにいるとは思わないでください。これは、子供にとっては余りない選択だと思ったんです。しかし、メディアは非常に大きな影響力を持っています。だれにとってもそうですね。子供にとってもそうですね。この闘犬についてグレースが何か見たことで、このペットの犬もいましたから、理解ができたわけです。わざと犬を戦わせるようにしたいことがあるんだと。ですので、彼女としてはその選択をしたわけですね。しかし、子供としては犬が好きだったので、この現在のところは、カメラがあれば短い映画をつくることは簡単です。それほど複雑なことではないと思います。子供も技術を使うことができます。そして彼女の家族も、これは少し違う活動ですので楽しんだことだと思います。個人的には、非常にいいやり方だと思います。先生にとっても、ほかの生徒にとっても、子供たちにとっても、そういうことに参加するというのはいいことだと思いますね、これは私の意見ですが。グレースとしては犬が好きだったので、闘犬のようなことが理解できなかったから、これに興味を持ったわけです。

次に移ってよろしいですか。

○司会

何かほかに御質問がありますか。

○ジョイ・レネイ先生

そちらのほうであるんですね、どうぞ。今、私たちが言おうとしていること、皆さんのほうから何かAチームに質問はありませんかということなんです。もしくは、

Aチームの発表に対する何かコメントがほかのチームからないですか。

私のほうから質問、実はあるんですよ。なぜ、7歳は幼過ぎると思ったのですか。こういった闘犬にさらされるには年齢が低すぎると。でも、ほかにもいろんな恐ろしいことに子供たちはもう触れていると思うんですよ。だから、なぜ5歳だと年齢としては低過ぎると思われたのか、そこが私にとっての疑問なんですけれども、どうなのでしょう。

実はグループは二つに分かれました。私はそうだと思いました。とにかく、いろんなサイトに行くこともできるし、いろんなものを見ることもできると思ったんです。でも、ちょっとためらいのある人もいたんですね。やっぱり血が流れるとか、そういうのは子供に見せたくない。だから、チームとして意見が一つだったわけではありません。でもやっぱり7歳だとちょっと年齢が低過ぎるかなとは思いますが、でもいろんなものに7歳の子供の目を向ける、もしくはそれが目に入ることはたくさんあると思いますので。

ほかのチームの方から何か質問とかコメントとかないですか、Aチームに。どうですか。なかったら次のグループに行きましょう。Bチームですか。はい、じゃBチームの方、どうぞ出て発表してください。

○司会

それでは、Bグループの方のプレゼンテーションをお願いしたいと思います。所属と御紹介をお願いします。

○参加者 岡崎市の動物総合センターのものです。すばらしい発表の後で緊張しているんですけども、私たちはフレッシュな高校生と、あと行政の方で構成されるメンバーで話し合いました。

まず、一つ目の質問なんですけれども、これは、子供の本当にグレースの純粋などという気持ちからだと思います。どうして犬が死ぬほどひどいことをしているんだろうという気持ちから、この彼女は決心したのだと思います。

また、家族とか学校の先生に影響されたと思いますかという点なんですけれども、犬が好きだということで、多分これに興味を引かれたんだと思うんですけども、この動物が好きというベースは、家族からやっぱり影響されているのだと思います。そして、ふだんから家族や学校の先生が自主性を伸ばすということがあったので、彼女もここまでやることができたのかなと思いました。

2番目の7歳の子供がこのような残酷な知識にさらされるべきだと思いますかということなんですけれども、例えば、お子さんが残酷な事柄を知りたいという気持ち

が起こっても、それが残酷だからということでシャットアウトしてしまったり、大人が隠したりしてしまったりは、やはりだめだと思います。ただ、その年齢だとか、あとその子自身の理解力に応じて、実際の映像をすべて見せてしまうのか、それとも写真だけにするのか、あとはちょっとやわらかなアニメだとか絵にするのかを決めて、それを見せたりするのではなくて、その後、親とか、あと教師とかのフォローが必要になってくると思います。

また、残酷な事柄だと、どうしてもショッキングな映像だけが誇張されてしまいがちだと思うんですけども、そうではなくて、すべて最初から最後まで見せるということが必要かと思いました。

3番目なんですけれども、先進国だからこそ、このようなことが娯楽としてお金の目的でやられているのかなと思いました。あとは、文化としてずっと昔からやられていることなので、文化だからということで正当化されている部分もあると思います。

4番目なんですけれども、これは、グレースがまずここで気づいて、知って、共感して、自分にできることをみんなにこういう形で報道したということで、この一連の流れというのが、先ほど先生方がおっしゃっていたヒューメイン教育の段階を踏んでいると思われるので、なかなか言葉で言うと子供も理解が難しいと思うんですけども、グレースのこのような簡単な具体例を見せることによって、7歳のこんな自分と同世代ぐらいの女の子でもできるんだと思わせる教材として、使えるのではないかと考えました。

そして五つ目の動物福祉団体だったということなんですけれども、やはりサポートしてくださいと言うと、すごい重労働というか、大変な労働力を割いたり、時間を割いたり、お金を結構な量を渡したりしないといけないのかなというふうに思われがちなんですけれども、そうではなくて、多分グレースもお金をSPCAに寄附していたんですけども、そんなにいっぱいのお金じゃなかったと思うんですね。ですので、自分のできる範囲で、その人のそれぞれやれること、直接的であるのか間接的であるのかは別として、やれることをやろうという形でメッセージを伝えれると思いました。

また、シェルターが必要なことも結構おっしゃったので、シェルターを必要としていることもわかるのではないかと思います。

6番目が、どのようにしたらこのような活動を他の社会的問題解決の働きかけに使えるのでしょうかということなんですけれども、これは先ほどのA班と回答が似ている

んですけれども、これは4番と5番の合体かなという感じがするんですけれども、ハードルが低くなると思うんですね。やっぱり知って、それを共感したりというまではできると思うんですけれども、そこから行動していこうというのがなかなか、小さい子ども大人の人でもできないと思うんですけれども、これを見ると、こういう小さいことからでいいんだな、じゃ、ちょっとやってみようかな、行動というのはそんなに難しくないのかもしれないなという前向きな気持ちになると思うので、そういうきっかけづくりに使えるのではないかと思いました。

そして7番目の意見なんですけれども、子供のころに、こういうことをやっぱり学んでおかなければいけないというのはあるんですけれども、やっぱり学校だけでは先生がいっぱいいっぱいになってしまいますので、学校だけにそういうことを任せるというのではなくて、行政とか家族も一緒にやっていく必要があると思いました。

そしてきっかけは、学校がメインになって与えてあげて、大人でもきっかけを引き出すのはやっぱり大人です。そういうのを意識してあげればいいのかと思います。例えば、きっかけといっても映像を見せたりというのではなくて、例えば、こういう映画賞というのでも、賞品にすごい豪華賞品が出るよということで子供にちょっと言ってみたりとか、そういうのでも使えると思うんですけれども、そういうきっかけを大人が与えてあげたほうがいいと思いました。

以上です。ありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。まず先生のコメントの準備ができていますか。

○ジョイ・レネイ先生

いやいや、皆さんのほうに先に。皆さんのほうから今のチームに対して質問、コメントはまずないですか。先に皆さんから。

○司会

Bチームに何かコメントやクエスションはありませんか。私たちじゃなくて場内に聞いてちょうだいと言われてますので、まずは場内の方。日本の方は手を挙げてくれないので、こういうときとても困ると、きっと学校の先生もクラスできっとこうやって困っているんだろうなど。あそこで高校生がうなずいていますけど、自分のところで出した意見について、高校生のコメントを聞いてみましょう。せっかくだから、英語で。

○参加者

どういったいいかわからないんですけど、一番大事なことは、かわいそうな犬、かわいそうな猫と言うのは簡

単なんだけど、その後何をすることが非常に難しいと思うんです。行動に移すところが難しいと思うんです。この女の子、グレースちゃん、彼女は本当にちゃんと行動に移したんですよ。どうやっていいのかわちょっとよくわからないんですけど、勇気があると思うんです、グレースは。

グレースさんが、その思ったことを行動に移したということが一番大きかったと思います。やっぱり思っても行動に移せないことがたくさんあると思うので、私はそこがすごかったと思います。済みません、何かこんなコメントで。

○司会

せっかく高校生が来てくれたので、みんなの前で発言するチャンスをあげなければと思いました。

○ディーパシェリー・バハラム

私、ちょっとコメントをしたいんです。ナミさんに対するコメントです。ナミさんがおっしゃったことに関して。闘犬、これはいいことじゃない、子供が知るには余りいいことじゃないかもしれないとおっしゃった。けさ、文化の違いという話がちょっと出たと思うんです。

グレースはニュージーランドに住んでいます。皆さん、ニュージーランドという国、どれぐらい知ってらっしゃるでしょうか。ニュージーランドというのは非常に厳しい国、人口は少ないです。そして男性も女性も非常に強くて、タフなんです。ラグビー、これが国技になっています。小さな子供でも、3歳、4歳の子供でもラグビーをするんです。土曜日、日曜日にはラグビーをしています。子供たちは、こういった屋外のアウトドアの活動が多い。なので、いろんなことを知っています。かなり年齢の低い段階でも、知識をたくさん持っている子供が多いんです。闘犬、これ子供に聞いても、子供たちは知っている子供が多いです。うちの国ではそうでもないかもしれない。でも、ニュージーランドだったら、こういった闘犬などについても、事実を中心に教室でもいろいろ話をしているんです。

文化の違いというコメントがありましたけれども、これを考えることも大事だと思います。例えば、ヒューメイン教育の教材は何にしようかと考えるときに、例えば非常に美しいきれいな色のものを皆さん考えるかもしれない。でも内容は、教師や親がこれだったら話しやすいなというものを教材に選ぶべきじゃないんです。そうするとやはり、この闘犬なんて話せないわと思うかもしれない。なので、文化の違いというのは、とても大事だと思います。文化を踏まえて選ばなきゃいけないと思うんです。

きのうの夜も、ちょっと私たちが話をしていたんですね。例えば、いろんな国でデモンストレーションをしますよね。国によって、これはよくないことだと。例えばデモをする。町に出てデモ行進をするのはよくないという国もあるんです。一方で、国によっては、自分たちの意見を伝えるためには、デモ行進をすることはいいことだという国もあるんですね。なので、国によってそれは違いますので、例えば闘犬というテーマがいいのかどうかということ。これは皆さんが自分の国で、今、自分の今の状況で、これが正しいことかどうかということ判断する必要があります。人権団体もあれば、動物保護団体もあれば、環境保護団体もあるかと思うんですね。そういったところも、国によって違うと思います。でまた、その活動がメディアの注目を浴びることもあるけれども、時にはやろうとしたことで逆の影響を与えてしまう、マイナスの影響を与えてしまうこともあるかもしれない。なので、やはり文化ということをしっかり踏まえて選ぶ必要があるかと思うんですね。

それから5番、グレースのアクションを使って、その皆さんのお仕事にどういうふうにやりますかということ、資金集めの手だてにもなると。グレースの行動を使って、意識啓発もできるかと思うんですね。市民啓発できるかと思うんです。これは一つの例だと思います。動物保護、これによって、そしてまた教育によって違いが生まれるのだということの一つの例だと思います。

例えば、日本の子供たちの映画を使って、それで啓発するということではできると思うんですね。意識啓発をしていくと。これ、闘犬についての啓発じゃないんですよ。意識啓発、一般的に皆さんがやっていらっしゃる活動について、例えば、犬を愛しましょうとか、犬に優しくしましょうとか、そういったものでも子供たちの作品を使って、意識啓発ができるかと思うんです。

それからギャンブルですけど、日本の文化では、ギャンブルは認められているんですか。闘犬はギャンブルだから存在してきたという言葉がありましたよね。これが、ある種、文化の名のもとに正当化されているとも言われています。

インドでは、ギャンブルといっても、また違うものもあり、認められているもの、受け入れられていないものがあるんですが、何かを社会的に認めないようにしようとするならば、やはり時間はかかるかと思うんですね。英国でもそうだと思いますし、例えば、毛皮がそうですね。なので、時間はかかるかと思うんですね。だから、そのあたりも考えていかなきゃいけない。ギャンブルだから許されているのかということですよ。例えばスポー

ツに参加をしていると、そしたらそれが、でもそのスポーツをやることは社会にとって恥だといったようなスポーツもあるかもしれない。なので、ギャンブルだから許されているのかどうかということについては、ギャンブルでない、ギャンブルを許さないようにするためには時間がかかると思うんですが、そのあたりも考えていく必要があるかと思います。

○司会

Cグループの方の発表をお願いします。

○参加者

どうも、Cチームで当大学、学部3回生です。こういう場合はふなれなのでとても緊張しますが、よろしくお願いします。

1番についてなんですけれども、映画内では特に条件は述べられなかったもので、うちの班で出たこととしては、学校と家庭によるチャンスが与えられた、あるいはそのような環境を与えてもらえたということもありますが、子供自身が生まれつき持った好奇心や気質というものもあったのではないかなということ、それぞれについて具体的に述べると、家庭の与えたものとしては、漫画とかを読ませるばかりではなくて、こういうちょっと厳しい闘犬のようなドキュメンタリーでも堂々と見せるような家庭であったこと、あるいは映画などをつくるのは簡単なことではないかと思うんですけれども、それを支援できる家庭であったということ。また、親自体が子供の感性に共感してあげて、考えることを促してあげられる人たちだったということがあります。また、これに関連して、両親自身が豊かな教育を受けていたのではないかと。それに基づいて、子供を1人の人間とみなして、こういうのはだめだからとか決めつけしないで、ちゃんと見せてあげる教育をできたのではないかなという考えが上がりました。

また、一方の学校によるチャンスとしては、先ほどのA班が述べられましたけれども、先生がコンテストがあるよというきっかけを教えたのではないかとということ、あるいは生徒に目標を持たせてあげようとする学校の方針。詰め込み型で、算数とか理科のようにどんどん教えていくわけではなくて、今回の映画製作のように、自分からどう動けばいいのかなと考えさせてあげるような教育をしたのではないかなということが出ました。

最後になりますけれども、子供の条件としては、この子供自体がそういうふうに関心を持っていて、学校や家庭によるこのようなチャンスがなくても、夏休みの簡単な宿題でも勝手にしたんじゃないかなという意見も出ました。

次、2番に移ります。ディーパシェリー先生からちょっと、先ほど質問も上がってましたけれども、ここまで残酷なものを、特にそんな一々残酷なものを見せる必要はないですけども、こんなネットとかも普及して、どうせ残酷な映像が見れるようであれば、動物がそのような犠牲になるという現実を、もう大人や周囲の手で伝えてあげるといことも大事ではないかなという答えが出ました。言いかえにはならないかもしれませんが、知らないよりは調べたほうがいいだろうと。それに関連して、闘犬への残酷な知識ばかりではなく、世界じゅうの出来事を含めて知る必要が今後あるのだろうなど。

ちょっと話がずれちゃうんですけども、それに関連する意見として、日本のマスコミはBBCのように、事前に残酷な映像が映る前に告知のようなものをしないから、そういうのをしていくような社会にしていっていいのではないかと。あるいは、大人たちが自分で調べる、考えるような、ヒューメイン教育になっちゃうんですけど、ものをしてあげていくことが大切だろうなど。

3番で、これも意見として上がったんですけども、日本でも、子供が逆にそういう残酷なシーン、日本の闘犬を見過ぎてなれてしまって、闘犬という怖いものを見ているはずなのに、ほおづえをついてのんびりと見ているような光景もあったらしいので、そういうものを訂正してあげていく。それが、血が出ているということが、痛い、つらいという現実も教えてあげなくてはいけないのだろうなどという答えも出ました、ちょっと質問からずれちゃいましたけれども。

3番で、これもほかの班とかぶるのですけれども、これはもう伝統という答えが出ました。ただ、伝統といっても、土佐犬というものが作出されたのが恐らく明治以降であると言われていて、また、ピットブル自体もそこまで伝統があるのかどうかと言われれば、怪しいよなどという答えも出ました。

また、かませ犬という練習用の一方的にやられるような犬が、闘犬の本当にかませ犬として使われているという事実を知らないという現実もあるのだろうなど。3番は以上です。

4番については、グレースを褒めてあげた上で、生徒たちみんなもできるんだよということを教師が教えてあげた上で、行動に移してもらうために、みんな興味を持とうと、いろいろ指導してあげたらいいのだろうなどという答えが出ました。そのためには、ヒューメイン教育であることを踏まえて、好きなもので何ができるか、闘犬でも何でもいいので、つまらないことでも一人一人調べていって、その過程で、先生が、それがヒューメイン教

育につながるように、ちょっとずつちょっとずつ手を貸してあげてもいいだろうなということで。そんな感じでした。

まだちょっと続いたり。ちょっと切り上げたほうがいいでしょうか。

5番で、7歳の子でもここまでできるのですからということでアピールして、大人ならもっとできるよねという方向で行ってもいいのではないかと。具体的には、映画の中で流れていた、タオルや毛布が必要ということがわかれば、私たち大人であれば、ある程度簡単に提出することもできますし、また、映画の中で登場した団体や個人が存在することを周知するだけでも意味があるのではないかと。その上で、映画を見せている側の人間が、身近な団体を紹介したり、それらに対して意見を伺って、気持ちに向けてあげることも大切だろうなどということが出ました。

6番で、事実から、その過酷な事実から調べていくという手法は同じなので、さらにそれを調べているときに、それについて深く知ることで、ほかの出来事でもそうではないのかなという気づきや興味を持つことができる、それが人権や福祉などのさまざまな問題をつなげていくのではないかなという意見が出ました。

最後で、最初にもちょっと述べたように、一番大事なのは、子供たちだからということで、教育者である大人たちがどのような姿勢で行くのが大切ということになりました。今回の話とは直接つながるかわからないんですけども、例えば、大人がごみ清掃の方を見たときに、勉強してないみたいな感じで、ああいう人にはならないで、もっと勉強して立派な人になろうとかいうことを言うのではなくて、ああいうことをしてくれる人もいると前向きな言葉を与えることが子供には大事ではないかなという意見が出ました。その過程で、ありがとうは何度も言ってもいいと教えてあげたり、ジョイ先生のように、笑顔でどんどん教えてあげるのが子供の脳にいいのではないかなということで、そういうふうに教育していきましょうという答えが出ました。

○参加者

ありがとうございます。

○司会

あそこに笹井先生が座られたのをちらっと見てから、急に真っ白になったような気がいたします。それはまず皆さんに、何かコメント、あるいは御質問ありませんでしょうか。今度は、きっとほかの方が助けしてくれると思います。ババ君、よく頑張りました。まあ何と、通訳のレモンさんが、彼女はとても教育に関心があります。

○レモン

済みません、とても最後にいいコメントをくださったと思ひまして、きょう、大人のあり方というのが。実は私、娘が今ニュージーランドにおりまして、震災があった後に、もうすごいニュースが、海外のニュースのほうにショッキングだったので、ものすごく心配して何度も何度も電話をかけてきてまして、ある日から突然電話がぱたつとやみまして、何をやっているのかなと思つたら、できる人で集まって日本への応援メッセージを送ろうということになって、ビデオをつくることになりまして、それですごく大変だったと。

まず資金を集めないといけないから、カルチャーイベントとかをオーガナイズして、日本人で集まって、そのほか日本人といろんな国の留学生がいるんですが、日本に興味を持ってくれる人は全部日本人協会に入って、そこで頑張つてつくつた。そこの中のだれかが、それではもうついでだから、ちょっと総理大臣にコメントをもらえないか、一か八かやってみようやということになったらいいんです。そしてお手紙を出したら、何と、送るので待ってると言つて、本当にちゃんとしたすごいクオリティーの高いメッセージビデオが送られてまいりまして、本当にこれつくらなあかんやんということになりまして、これ、こんなえらい人のビデオをつくるんだつたら、メッセージを載せるんだつたら、こつちも頑張つて質のいいものをつくらないといけないし、音楽もついでに歌も作曲してつくろうとなつて、すごいのができ上がつて、ユーチューブで2万人近くの人に見ていただきました。福島に届いてほしいという思いが本人たちにはとてもありまして、いろんな方に協力をいただきました。

そのとき思つたのは、本当にその首相のすばらしさとか、大人のほうが、本当に子供のそのお金も何も無い子たちに向き合う。この子7歳の子でも、多分警察の方もそうだと思うんですが、本当に大人が子供だましではなくて、子供に親切にするとかではなくて、本当に対等の立場で人としてつき合ってくれるという姿勢がニュージーランドの人にはあるんだなと思つて、何かどうも日本だと先生がこう上から言つちゃうことが、済みません、先生の方いらっしゃいますけど、ことが多いんですが、そうではなくて、本当に年齢とか関係なく、国籍とかも関係なく、1人の人と人として向き合ってくれるという姿勢に私はとても感動したので、ちょっと済みません、長くなりました、ごめんなさい。

○司会

どうもありがとうございます。そのビデオにつきましては、Knotsのトップページから今でもリンクしており

ますので、見ることができます。とても感動的なビデオで、そのときにオリジナルの歌をつくつて歌っているんですけども、それをつくつて歌っているのが、通訳のレモン・由美さんのお嬢さんです。ハけちゃんと言ひます。

○司会

馬場さんのコメントに感動して、今の話をつい、自分の娘の話をしてしまったと。でも、私もそれは見ましたけれども、本当にニュージーランドっていい国だなと本当に心から思ひました。ジョイさんもニュージーランドに行かれていて、ちょうど、この準備をするのはニュージーランドでしていたので、あなたの通訳のお嬢さんは、今ニュージーランドの学校で勉強をしてるのよとやりとりして、ニュージーランドは私は常々本当にいい国だと思います。やっぱりシンプルに考えて、何が一番よくてというのが、大人が取り組んでいる国というのは、やっぱり子供たちもそういうふうになるのかなと、そこで大阪経済大学の先生が笑つているので、先生にも一言コメントをお願いしたいと思ひます。

○参加者

ごめんなさい、今、何にも考えずに普通に笑つていたので。いつも私は上から目線でつい学生に言うんですが、やっぱり私たちのグループで出たのは、感謝する気持ちを言葉に出して人に伝えましようという、とてもシンプルな話なんですけど、清掃の人がいらっしゃるから町がきれいになるんだよとか、ふだんあんまり実は思つても口に出せなかつたりするので、私自身もできなかつたんですけど、できるだけありがとうという言葉がたくさん言ひましようというような、そういうのでちょっとずつ世の中が変わるといいねみたいな、とても漠然としたことだったんですが、そんな話が。でも、彼がとてもうまくまとめてくれたので、とても私たちもよかつたなと思ひます。

○参加者

私たちのグループで、最後に笑顔ということが話題になったんですけども、さっき教えていただいた先生は、はい。ちょっといいお話でしたので、もう一度皆さんにお聞かせいただきたいんですが、よろしいでしょうか。

○司会

Knotsのメンバーですから、Knotsを代表していい話をしてください。よろしくお願ひします。

○杉浦 僭越で済みません。私はこの回に本当は参加したいほうだったんですけど、ボランティアとしてバックヤードのほうに立たせてもらつて本当によかつたのは、皆さんの意見を一度に聞けたということなんですけども。やっぱり人間は、笑顔を見せることによって右脳が

開くんですね。右脳が開いたということで、受容、受け入れがまず第1歩にできるんだそうです。左脳が、その次に言葉として発せられるようなシステムになっているそうなんです。

私は保育士として日々、ちびちゃんたちと一緒に暮らしているんですけども、私自身も、姪っ子に実験してみたことがあるんです。もう10歳になるんですけど、生まれて半年もたつてなかった子なんです。こうやって上を向いて寝てるときに、ウニツとやると、顔をヒュツと、これを3回も4回も5回も6回もやったら、おなじようになるんです。やっぱり左脳というのは、次に攻撃のほうに入るんで、その場から逃避したいという感情が出るそうなんです。

私たちは0、1、2、3というちっちゃな子たちを相手にしてるんですけども、お子さんがけんかをして悪いことをしたら、どうしてそんなことをするのと言うと、いきなり目を背けてしまいます。でも、私たちが中立に立って、何々ちゃん、何々がしたかったのと言うと、ふうん、でもこうしたかったんだよね、うん、でも相手の子はどう思ったと思うと言うと、うんと、話を聞き入れる窓が開けるといことも日々実感しております。

動物もそうなんですけども、やっぱり私たちがにこやかにしていると、気持ちがほぐれていると受け入れてもらえますよね。私の飼っているペットでも、とにかく私とだんなが大きな声で言い合うだけで、シュルシュルと真ん中に寄ってきたりするんです。けんかじゃなくても、ただ大きい声を出しただけでも寄ってくるんです。やっぱりそういう恐怖という左脳が働いたときに、やっぱり動物、生きてる、脳が働いている生き物としては拒否をする、逃避してしまうということをしごく実感しております。

脳科学の先生に教わったので、私が代弁しているだけで、私も実感としてありましたので、まずは笑顔、あいさつからすることによって、皆さん受容、受け入れていただけるかなということで、ごめんなさい、余分なことになりました。いいですか、こんなことで。はい、済みません。

○司会

ありがとうございました。だんだんお時間も迫ってまいりましたので、ケアをしてくださった先生方からも一言ずつ、ケアをしてみて、コメントをいただけたらと思いますので、まず、犬伏先生からお願いします。

○犬伏

いろんな形で、こういうセミナーとかに参加させてもらう機会はあるんですけども、やはり自分たちはいつ

も身内の中だけで準備から実施までやっていることを振り返り、次回に向けた改善のためにも外部からの意見を聞くということは我々も勉強になるんです。否定的な意見を言わないということが若い世代から発せられたということで、我々も改めてふだん気を遣っているつもりなんですけども、若い人にも受け継いでほしいなという思いはありますね。

子供って、本当に否定するとしゅんとなっちゃうんでね。間違っている意見、例えば、「犬の手の指が3本しかない」と言い張っても、「もう1本あるね」という形でフォローしてあげる。単に、「いや4本やで」、「いや5本やで」とだけ言うと、彼らは間違ったことに対するものすごく落ち込むんですよ。

そういう落ち込まないようフォローするということも常に心がけて啓発をやっているんですけども、それを若い世代から聞くことが出来たことはとてもうれしいです。

○司会

獣医の卵ですからね。獣医の先生に褒めてもらって本当にうれしいと思ってると思います

○藤井先生

ちょっと何を話していいのか混乱してるんですけど、今回のセミナーのことを言っていていいんですね。

また宝の箱が一つふえたかなというのが印象で、たくさんの方をやってきて、自分の中では一応完結した気になっていたことが、いやいや、まだまだ奥深いぞというのがとてもありました。

たくさんたくさんヒントをいただいて、ノートにいっぱいヒントのメモ書きがふえて、またあしたからこれを使っていろいろやってやろうと思っています。なので、このグレースのお話も、私にとっては、おお、なるほどということばかりで、あと、皆さんの御意見も、どうしても行政をやっていると一方的な見方、それからやっぱり上からということが多くなってしまっていたんですけども、いろんな角度からいろんな方々の知恵を借りて進めていけるかなというんで、またこれでコミュニケーション、ネットワークができたわけですので、御意見をいただきながら、みんなで何か本当に、奈良県をまた宣伝して申しわけないんですが、奈良県の動物愛護センターのスローガン、「動物と楽しく暮らせるみんなの街」なんですね。私はこれが、動物と楽しく暮らせるみんなの日本になるんじゃないかなときょうは思いました。ありがとうございました。

○司会

さすが藤井先生、うまくまとめていただいて、ありが

とうございました。

それでは、ジョイ先生とディーパ先生に全体のコメントをお願いします。

○ジョイ・レネイ先生

ちょっとばたばたして済みません。

子供に新しいことを教えるとき、私どもは気づきが必要です。皆さん気づいていらっしゃると思いますけれども、最近では子供の側にたくさんいろんな需要があります。そして両親の期待も高いわけです。ですから子供に対しては、よい子であって、学力も高く、スポーツでもよい成績をおさめ、音楽もできて、何でもできるようになってほしいと思っているわけです。最大の可能性を引き出してあげたいからです。日本では、ほかの国でも同様ですが、力点が生徒のこの大学に入れるようになること、これは私の子供、そして孫に対しての期待と同じですが、こういうものがあると思います。

しかし、私どもは人類の一部なわけです。ほんの一部の方だけが大学に行けるわけですね。その地球上の人類の多くは行けないわけです。それで、ほかの人はいろんな方に毎日出会っていきます。ですから、私たちの子供たちが非常にバランスのとれた人間になるようにしなければなりません。ヒューメイン教育というのが唯一の道だと思います。研究者になれる方はわずかです。研究者は、社会の中の重要な役割に協力してもらわなければなりません。ほかの興味を持つべきではないと言っているのではないのですが、私が申し上げていることは理解していただけたと思います。

私どもの子供に非常に達成をしてほしい、いろんなことをやってほしいと思うゆえに、認めてあげること、そして家族の中で認められることが必要だと思います。ですから、グレースのフィルムを本日お見せしたわけです、子供を認めてあげるという意味で。一番の賞はとりましたね。彼女の家族も、それからこの地域でも、これは重要なことでした。ヒューメイン教育のプログラムをやる上では、競争の部分というのはよい働きをしたいと思います。皆さんのお子さんのすることが認められる可能性があるからです。

サマリーをしていきたいと思います、本日やってきたことについて。幾つか写真を、これはフィルムではないわけですが、お見せしていきたいと思います。けさ、ディーパから、ヒューメイン教育の基本原則をお話ししました。そして、これを幾つか行動に移していけるかどうかということについて、動物の福祉についてのお話もありました。動物の福祉というのは、「E arthlings」を見ることでわかったと思いますが、これが重要な部分に

なるわけです。動物が人間と同じような、そしてセンス、感覚、そして感情を持っているということです。ほかにも、動物が好きであるということだけでは十分ではないということです。私どもの愛というのは、違う方向に向いてしまいがちです。いい方向に向くとは限らないわけです。

世界じゅうにたくさんの人々が、この家の中で野生動物を飼おうとしているということがあります。チンパンジーが多くで飼われています。チンパンジーというのは、例えば小さいときにはだっこしたりして楽しいと思います。しかし、大きくなると危険な動物になり得ます。家の中で飼うには危険な動物になるわけです。どうしてでしょうか。なぜかというと、彼らは野生の動物だからです。これが自然な行動だからなんです。

これはハンガリーでお会いした男性です。16頭のクマを飼っています。自分のクマを愛しています。しかし、彼にとってこれが間違っていると言われるのは、なかなか難しいことでした、このクマを愛しているからです。昼間も夜も、このクマの世話に明け暮れています。ハンガリーのような場所においては、このようなことが可能になっています。

しかし、この間違った愛というのは、これは動物にとっては十分ではないわけです。よきものではないわけです。例えば1匹犬を飼って、十分ではなくて、次々犬を入手していく。しかし、一定数を超えると、本当に福祉を、彼らにとっての福祉を与えることが難しくなるわけです。ですから、私どもとしては、こんな判決を下すようなこと、人格を判断するようなことは避けなければなりません。しかし、この動物たちにとって、よりよい生活の仕方があるんだよということを穏やかに指摘する必要があります。

そして、教育者についてですが、ヒューメイン教育を授業で紹介することができますね。ティーチャーズガイドで、これは台湾で始まったものでありますけれども、教育者のガイドというのは、この教育者用のワークショップで使われているものです。これも日本で実行が可能だと思います。この午後のグループディスカッションのような、例えば状況分析をするようなセッションをして、ほかの考えを得るためには、非常によいやり方だと思います。この動物保護について、ほかの団体にコンタクトをするのもよいことだと思います。御自身のなさっていることについて支援をしてくれる可能性があるかと思っています。これはブルードッグのプログラムであります。これは獣医の間でのプログラムでありまして、今、ホームページもあります。このブルードッグドットコム

にして変わるものではない。でも、やっていかなきゃいけないと思うんです。

本当にきょうは皆さんと時間が共有できたこと、感謝をいたします。そして、HCJの皆さんに、こちらに来る機会をいただいたこと、お礼を申し上げたいと思います。皆さんのこれからの進捗と、そして皆さんが感心を示してくださったこと、それを非常に感謝をしています。

皆さん、ヒューメイン教育ということで、もうたくさんのごことをなさっています。なので、近い将来、皆さんは、素晴らしいヒューメイン教育の事例を世界のほかの地域に対して発信してくださることになるかと思いません。ヒューメイン教育というのは、自分たちの権利として、これを受け入れる第1歩だと思うんです。でも、そういった機会を私たちにも与えてくださったことありがとうございます。

○司会

Thank you very much Deepashree.Thank you very much Joy. もう一度先生方に拍手をお願いします。

○ジョイ・レネイ

本当にどうもありがとうございます。

○司会

そして、本日お手伝いをくださいました、奈良の桜井保健所動物愛護センターの藤井先生、そして兵庫県の動物愛護センター淡路支所の犬伏先生にも、もう一度感謝の拍手をお願いします。お二人のおかげで、本当に今日は素晴らしいレクチャーになりました。本当にありがとうございます。

そして山口先生にもう一度御登場いただきまして、レクチャーのまとめをしていただき、皆様にセイ・グッバイをしたいと思います。山口先生、お願いします。

○山口先生

きょうは1日、長い1日を、もうぐっと詰まってお勉強なさったと思いますが、本当にお疲れさまでした。

ジョイ先生、ディーパ先生、最後にとっても私たちに勇気づけられるコメントをいただきまして、ありがとうございました。先生のコメントに恥じないように、これから日本で頑張っていきたいと思います。

きっと、日本から何か発信できるようにね、皆さん頑張らしましょうよね。日本からヒューメインエデュケーションができるようなことになったら素晴らしいなというふうに思っております。

皆さんの1日を見てますと、本当に皆さん熱心にお話を聞いてらしたし、それからグループディスカッションも、私も入って、私が何か長引かせたように、ディーパ先生からいって、まだ終わってないと言われるほど、

皆さん熱心に討議をされておられました。本当に私にとっては、皆さんとそうやってお話できたことって、すごく勉強になって、こちらから感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

それと、この立派な会場、私が大学にいるころは、こんな立派なところがなくて、私がこんなところで勉強できたらよかったなと思っているんですが、この立派な会場を貸していただけまして、それと貸してくださるだけじゃなく、このセッティングから準備から全部、教授の身であるにもかかわらず、細々と動いていただきました笹井先生に御礼申し上げます。ありがとうございました。

○山口先生

ありがとうございました。

それから、本当に皆さんからお金を徴収することなく、これだけのことができたのも、マースさんのおかげでございます。どうも本当にありがとうございました。

では、これで閉めさせていただきたいと思います。どうぞお気をつけてお帰りください。ありがとうございました。

○司会

本当に今日は皆様、長い間ありがとうございました。お疲れさまでございました。

ヒューメインエデュケーション・寄り添う心を創る

日本におけるヒューメイン教育プログラム

日時：2011年11月13日（日）9:30～16:30

場所：ヤマザキ動物専門学校レインボーホール

○山口先生

これから12時35分ぐらいまでパネルディスカッションということで、今までお話しいただきましたディーパ先生、ジョイ先生と、それからこれからは、日本で既にいろんなところで自治体の先生方はやっぱり悩んで悩んでいろんなことに努力してられています。それで、ここは東京でございますので、東京都動物愛護相談センターのほうで、今、所長をしてらっしゃいます山下千恵先生から東京都の取り組みをお話しいただき、それからヒューメイン・エデュケーションということでは長年、私は恐らく先駆者と言ってもいいのではないかと思います。赤坂動物病院院長及び公益社団法人日本動物病院福祉協会の顧問をされております柴内裕子先生のほうからお話しいただいて、10分、10分ぐらいそれぞれの活動をお話しいただいた後、皆様から日本の先生方及びディーパ先生、ジョイ先生への御質問をいただきたいと思います。

それでは柴内先生のほうからお願いできますか。

○柴内先生



皆さん、こんにちは。お顔なじみの方がたくさんいらっしゃいますが、私、実はこの主催をなさっているKnotsさんの、顧問というお役割を頂いています。

いつも余りお役には立てないので、少しはお役に立ちたいと思って、本日は富永さんからの御依頼をお受けし

ました。日本動物福祉協会の山口先生には、震災後全国を、駆け回っていらっしゃる、その多忙な中で今回のこの催しも関西からお手伝い下さっています。

本日のこの会も knots と日本動物福祉協会が立ち上げられているということを知りましたが、開催に関わる費用などの御準備は先ほどごあいさつされましたマースさんが支えてくださって、このように恵まれた機会をくださったのです。

私はマースさんとは大変長いおつき合いなのですが、マースさんはもう30年も前から日本から子供たちをバスケットとか、バレーとか、アメリカなどで行われる、そういう大会に小学生さんを連れて行く、サポートをしておられたのですね。フード関連の、もちろんM&Mというチョコレートなども販売しておられることも御存じの通りですが、なぜそのようなことをなさっているのかと伺ったことがあります。そうしましたら、その御担当の方が30年先、動物たちが、自分たちがつくっているフードを本当に幸せに食べられる社会をつくりたいからだ、こうおっしゃった言葉が強く印象に残って忘れられません。

あれから既に30年が過ぎようとしているのですが、そうした会社の方針といいますか、目指すところがあってこうした会を、そして3年毎のIAHAIOの世界大会を、マースさんが支えてくださっていたのですね。こういうことの基本には、動物たちを通じ、社会に貢献しているという、ポリシーを持たれた会社、またサポーターがいらっしゃらないとなかなかできないこのような催しです。

今日のこの機会は、皆様30年先の地球上はどのようなだろうかと、50年先はどのようなだろうかと問われていますので、マースさんのそうした心がけを少々御披露させていただきます。

さて、私は、日本においては、きょうのテーマは何となくわかっているようでわからないような言葉、本当に理解されているでしょうか。しかし、よく考えてみます

と昔から日本には道徳教育というのがありました。これでごく自然におじいさんおばあさんから孫にまでゆっくりと、本当に生活を通じて伝えられたものが既に核家族化して、都市化が進んで、自然も遠のき、そしてまた動物も一緒に住めないような状況が起こってきている日本の社会の中に、道徳教育もままならない学校教育、この中に大きな問題が生じていると思います。

私は最近、人と動物の絆、ヒューマン・アニマル・ボンドのお話しをするときに、この理念に基づいて行われる CAPP 活動が今の社会で具体的でとても大切であることに合わせて、今、地球上の人類は責任者だというお話しを申し上げています。

なぜかといいますと、ここにお集まりの多くの方々も動物を愛し、自然を愛し、そして動物とのかかわりのある仕事に注目していらっしゃる方が、ほとんどだと思うのですけれども、よく考えてみますと、そうした愛する動物たちを幸せにできるかどうかというのは、人類が幸せでなければ絶対にできないのですね。

人類の幸せって何だろうかと思いますが、今、皆様はひしひしと日々感じていらっしゃる、この地球上の大きな自然環境の変化。地震、津波、ハリケーン、洪水、このような地球上の変化はなぜ起こっていると思案します。人類が地球上に、ついに 70 億人になったのです。毎年 1 億 5,000 万人が生まれます。そして 7,000 万人の人が死亡します。8,000 万人ずつふえているのです、地球上汚しに汚しているのです。

地球上の生物、先ほどもお話しにありましたけれども、このままでは生活していけない状況は目の前にあるわけです。きょうの講師のお二人の先生のお話しを伺ってもそのとおりです。今、ここで人類が本気になって地球上の安全を考えなければ、まだ戦争などを行っているどころではありません。世界遺産をどんどん壊して、人類は本当に間違った道を進んでいると思います。私たちは、今、大震災があって、生活を見直すようなことにもなりましたが、このような東北の大災害に対しても、捉え方、感じ方に関西、九州では既に温度差があり、もう東北のことは遠いことのように思ってしまう場面があります。節電も忘れがちです。

私はこのような機会のある度に、節電に加えて節水もお願いしています。皆さんがお風呂に入るときは 5 センチ水位を下げてください。歯を磨くとき、顔を洗うときは流したままでしないでください。そうすれば 1 日に 1 人が 15 リットルずつ水を節水することができるのです。今、使った水が、今、使えたようにするためには大変なエネルギーと水が要るのです。

今日来てくださった方が実行していただければ、1 日に何リットルの水を汚さないで過ごせるでしょうか。それだけでも地球上の動物を助けることができるのです。私が動物と人との関係のことについて考え出したのは、私がちょうど 10 歳のとき、皆さん、経験した方はここにはいらっしやなくて、私が最年長だということです。その私が 10 歳のとき日本が戦争に負けました。広島・長崎の原爆、それは悲惨で、この戦争で 300 万人の人が死んだのです、日本の国土は焦土と化していた。その中で生きてきたわけですけれども、そのときに私の自宅、東京の代々木、明治神宮の森続きでした、きょう弟が来ております、弟も獣医師ですけども、研究者です、歴史をサイドワークにしており、Knots の富永さんと私の祖先が同郷で 500 年も前に同じ船で海外に向かっていることが分かりました。ご縁ですね。戦争で私の自宅は焼けました。

そのときに、私の自宅にはたくさんの動物たちがいましたが、チャボがひなを抱えて焼け死んでいました。ひなを抱えて。そして、私の祖母の大事にしていた犬は、今、考えればリンパ腫でしょうか、あごにできていた腫瘍を診てもらう獣医師が 1 人もいませんでした。もちろん男の先生ばかりですし、みんな軍馬のために戦争に行っていなかったわけですから。私は戦争に行かない女性の獣医師になりたいと願い、10 歳のときに決心して、本当にその道を進んでよかったですと思います。伴侶動物の医療というのは、今、このような地球上で、HAB 活動することによって、人と動物と両方の福祉と健康と教育のためにお役に立てるのです。とても大切な分野です。

25 年前にスタートしました獣医師が正会員である日本動物病院福祉協会は当初厚生省の認可を得て、CAPP 活動をスタートし、それから全国のたくさんのボランティアさんとその家族である動物たちのおかげで、きょうまで 1 万 3,000 回以上の訪問活動が無事に実践されてきました。

今日はこの活動の最も古くからのボランティアリーダー小林さんを初め、たくさんの方々が来てくださっていますが、本当にこうした方々のお力のおかげで動物たちが悪者にならないで全国各地で活躍してくださっています。

このような HAB 活動をすることは動物を大切にすること、動物たちの働きをたくさんの方に見ていただくこと、そのことで、動物たちの社会的処遇も変わります。HAB 活動で大事なことがあります。0 歳児から動物と暮らすことでアレルギーや花粉症の発症の少ないことも世界的に認められてきています。さらに、10 歳までの子

供の脳のハードができあがるまでに、動物と暮らしているということは人の脳の発達にも大いに役立っています。人間は前頭前野、おでこの動物なのですが、このおでこの動物である人類が、この大切な前頭前野でつかさどるものは何かというと、この地球上でハッピーなこと、ポジティブなこと、幸せなことをつかさどる脳が人類だけにあるのです。

こうした前頭前野の発達するのも10歳までなのです。10歳までに脳のハードできあがります。そのハードの中で育つ細胞は、経験したことでなければ大人になってから活用出来ないのです。そのように幸せを発想してくれる脳の育った人類が多ければ、地球は安全で幸せになります。そのような前頭前野の発達した人類になるために、動物たちがそばにいることはとても大切なのです。そのような情動の安定した人キレない人を育てることで、家庭を、社会を、地球を安全に支えます。動物たちは私たち人類にとって本当に必須の存在です。

この写真はよく見ていただくのですが、ご存知の方おられると思います。十数年前に日本の新聞紙上に出ました。シカゴの動物園のゴリラの檻に幼児が誤って落ちましたが、ゴリラが子供を抱いて安全なところに運んでくれました。というキャプションでした。このゴリラさんには何か必ず理由があると思って新聞社にお願いしました。そうしましたら、とてもすばらしい写真が返ってきました。先ほどのシカゴ動物園のビンテージというゴリラさんは、子供のときに人間の子供とふれ合っていたのですね。体感、体得です。10歳までは数字や文字でもは覚えませんが、私たちもみんな体で触れたこと、体で体得したことを覚えるのですね。この大事な時期にこのゴリラ、ビンテージさんは人間の子供と触れ合っていたおかげで、落ちてきた子供を無事に安全なところに運んでくれたようです。

この写真どうでしょうか。人類の頭とゴリラさんの頭、たくさん能力はお互い持っています。しかし、人類は前頭前野が大きいですね。この発達した前頭前野をもらった私たちは、何とか地球を大事にすることと、人類が幸せになって動物や植物、地球上のあらゆる生命を大切にしていくことを本気になって考えなければなりません。自分たちはもちろんですが、同時に動物を幸せにすることもできません。このような理由からも子どもたちのヒューメインエデュケーションの基本は小学校に上がるまでの家庭教育にあると思います。

お父さん、お母さんになる人が本気で子供たちを育てなければ、そのような家庭教育のされていない30人も40人もの子供が集まってクラスが編成される。一般教

育もできるはずがないのです。中途半端なお話して申しわけありませんが、私たちが本気で地球の責任者でありたいと、そう願っておりますので、皆さんもよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○山口先生

どうも柴内先生ありがとうございました。

済みません、先生、時間が短くて申しわけございません。

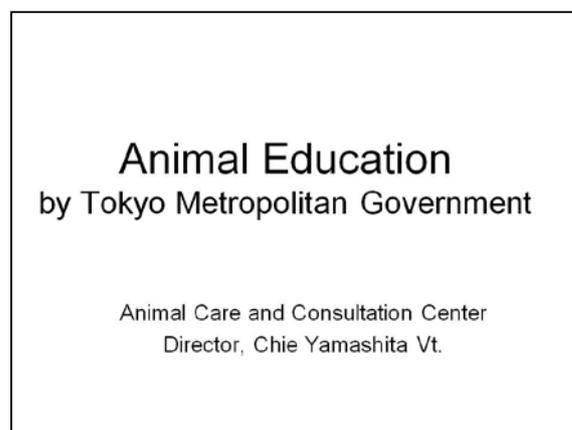
それでは、山下先生から東京都としての取り組みを少しお話ししていただきたいと思います。よろしく願います。

○司会

今からお見せするスライドなのですが、文字部分だけは皆様のお手元のほうに届いておりますので、先ほどお配りいたしました資料で、東京都の山下先生の資料のほうを差し上げておりますので、そちらをまずお手元に御用意いただきたいと思います。万が一これがうまくいきませんでしたら皆様、お手元の資料でよろしく願いたいと思います。

○山下先生

それでは、ちょっと時間かかるようなので、東京都の事業ということで説明させていただきます。写真部分除いたものがお手元のハンドアウトにございます。



【スライド1】

1枚目のスライドなのですが、これ全国の動物の統計、厚生労働省のものと環境省のものをあわせたものをつくってございます。日本全国には68万頭の犬、猫はちょっとわからないということなのですが、これだけの動物がいると。大体年に1%ぐらいずつ死んだりということ届け出があるということです。

私ども、動物愛護相談センターなのですが、路上で放浪している犬であるとか、あるいは負傷して苦しんでいる動物を保護する、収容するということをやっています。

法定の抑留期間というものが残念ながらございまして、飼い主さんが探しに来るための期間を設けておるわけなのですが、それが法律では2日、東京都では手続期間を割と長目にとっておりまして、1週間からもうちょっとということ。人をかんだ動物の場合は狂犬病の検診を行いますので、2週間程度になるということです。

その間に飼い主さんが見つけて迎えに来てくれない場合は、残念ながら処分ということなのですが、なるべく譲渡の道を設けようということで、最近は大変努力しまして、2ページ目、東京都における動物の取り扱い頭数ということで、全体像が上です。下が犬を挙げてあります。1980年に矢印がついていると、1990年のちょっと前に矢印がついていると、これ動物愛護法ができた年、それと改正された年ということで、犬の場合は非常に効果が、私どももこの死亡させる動物を減らしたいということで努力しまして、かなり飼い主さんの意識が高まってきました。1984年のところを見ていただくとわかるのですが、当時6万頭処分していたということです。ほとんどが譲渡も返還もされずに死んでいたということです。【スライド2】

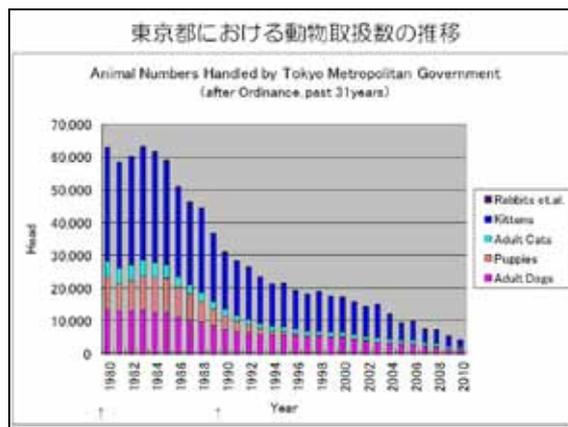
| 全国犬猫統計（平成21年度） Statistics for Dogs and Cats in Japan(2009) | | | | | | | |
|---------------------------------------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------------------|-------------------------------|-----------------------|--------------------------------------------------------------------|---------------|-------------------------------------------------|
| | 登録頭数 Registered Numbers | 子防注射 済交付数 Numbers Vaccinated for Rabies | 引取り数 Captured and Received | | 返還・譲渡 Returned to Owner or Transferred to Foster Owner | 殺処分 Killed | 犬の死亡 届出件数 Reported Numbers of Death |
| | | | 成 Grown Animal | 子 Puppy/ Kitten | | | |
| 犬 Dogs | 6,880,844 | 5,112,401 | 74,297 | 19,510 | 32,944 | 64,061 | 467,414 |
| 猫 Cats | - | - | 44,565 | 133,220 | 10,621 | 165,771 | - |
| 合計 Total | 6,880,844 | 5,112,401 | 271,592 | | 43,565 | 229,832 | 467,414 |

・日本人20人に1人が犬を飼っている 1 dog per 20 people (in Japan)
 ・東京都の状況は？⇒ 人口に比して登録数が少ないのでは⇒ 室内飼いの増加？等
 Current Tokyo situation ⇔ Registered pet numbers seems too small for population size ⇔ maybe due to increased indoor keeping, etc?
 ・犬の約1割が毎年死亡・更新 10% of dogs die or renewed annually
 ・猫の殺処分数のうち、8割は子猫 80% of cats killed are kittens ⇔ No-owner cats, cats not spayed or neutered

【スライド2】

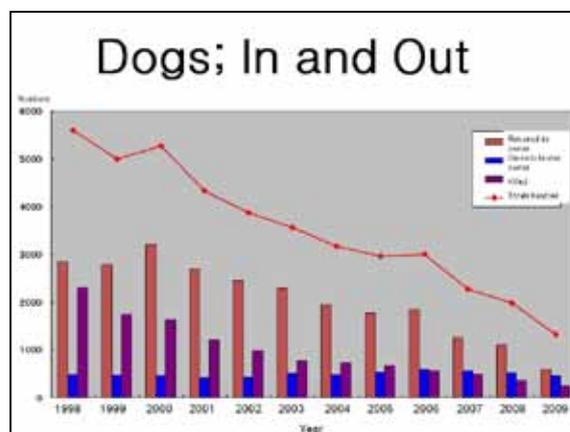
こういうことではいけないと思ひまして、いろいろな普及啓発活動を行ってきました。動物教室もその一環なのですが、学校へ出かけていって、この物すごく悲惨な状態を何とかしなくちゃいかなとということで、いろいろな普及啓発活動をやってきました。当時、不妊去勢手術をやるとということについて社会的なコンセンサスが得られてなかったと。健全な体を傷つけるのはかわいそうという方が非常に多かったので、犬も猫も不妊去勢手術をするということが普通ではなかったのです。ただ、水道の蛇口を閉めないことには死ぬ動物の数というのは到底減らせませんので、それは必死になってやってきたと。最近になってやっと子犬の数、子猫の数が減ったと同時に、動物のシェルターからもらっていこうという方も

だんだんふえてきました。飼い主が迎えに来なかった動物でも何とか飼い主さんを探して、新しい家庭に行けるといことが大分普通になってきた。【スライド3】

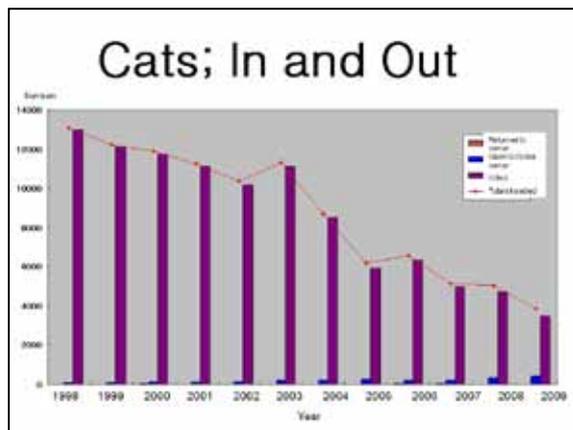


【スライド3】

これは犬です。上のほうの折れ線グラフが入ってくる犬、下の茶色のものが飼い主に返ると。ブルーの部分が新たな家庭にもらわれていく動物ということで毎年400頭ぐらいですか、もらわれていくことができるようになっていきます。最初は個人への譲渡が主体だったのですが、今は譲渡団体さん、東京都がここなら大丈夫ということで施設や取扱方法等を確認しまして、団体として認定した方々にもらってもらおうと。そこから間接的に住民に差し上げることができるようになりましたので、徐々にふえていくかなと。ただし、高齢であるとか病気であるとか、あるいは取り扱いが不十分になったためにかみつくとあるとか、ちょっと問題行動が重くてとても差し上げられないという動物がどうしても残ってしまうのです。それらは残念ですが処分せざるを得ないというのが犬の現状です。おかげさまで本当に処分しなければならぬ犬の数というのがすごく減りまして、年間300ぐらいですか、しか処分してないです。本当に皆様方の御努力のおかげだというふうに考えています。



【スライド4】

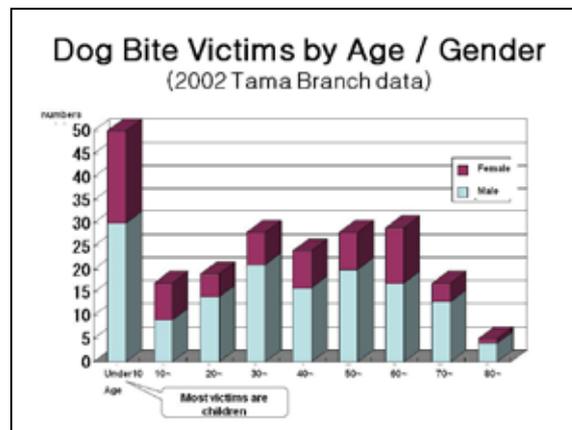


【スライド 5】

こちら猫です。同じように折れ線グラフが入ってくる数、飼い主へ返る茶色い部分が全くありませんよね、ほとんど見えない。猫の飼い主さんはほとんど迎えに来てくださらないですね。ブルーの部分が新たな飼い主さんにもらわれていく数です。じりじりとふえてはきています。大体、年間 300 頭ぐらゐは新たな家庭を見つけることができるようになった。ただ、圧倒的に処分せざるを得ない数がほとんどということでございます。ですから、猫ちゃんの場合、やっぱり外で飼われている猫ちゃんが多いので、どうしても不妊去勢手術をされないままずっといるということが多いです。今、各区や市で飼い主のいない猫対策ということで、自治体が認めた町内会何なりということも活動の一環として、地域の猫として認めましょうと。捕まえて不妊去勢手術をしてまたもとの場所へ放しますという活動が持たれています。おかげさまで、うちに引き取られてくる生まれたての子猫の数というものが非常に減ってきたと、とてもありがたいことだと考えております。

我々、動物教室というのを古くからやっておるのですが、やはり動物たちがたくさん処分される現状を減らしたい、なくしたいということが主です。子供たちが大人になって動物を適切に飼えるように、あるいは飼ってなくても動物に適切に触れられるようにという長い夢を描きながらやってきたわけです。【スライド 5】

これは多摩のランチのデータなのですが、咬傷事故、犬による事故は圧倒的に 10 歳未満のお子さんが多いと。子供さんは背が低いのでかまれるのは顔面とか危険な部位が多い場合があります。手を出して手先ということもあるのですが、これは狂犬病予防上、非常に危険でございます。というのは、狂犬病の潜伏期はかまれた部位によっていろいろなのですが、顔面をかまれちゃうと三、四日で発症ということがあり得ます。ですから海外へ、日本以外の国々というのは狂犬病の常在国ですので、適切な振る舞いできないと非常に危険なことが



【スライド 6】

あるということで、子供の事故を減らしたいという二つの面から動物教室に取り組んでいます。【スライド 6】

経緯 History of Animal Education

1980年～ 幼稚園・保育園児対象 (young child 3~5歳)
紙芝居 storytelling cards、心音聴診、子犬 puppies
ねらい: 動物への興味、温かさの実感
feel the animal's warmth
..... decreasing puppies, dog bite incidents...

1990年～ 小学校低学年対象 (school child 6~7歳)
絵を描く drawing、パネル panels、心音聴取、
動物の体の構造・機能: 行動・習性を知る
成犬 adult dog: あいさつ greetings、さわる touch
散歩する walk with dogs
ねらい: 動物を適正に取扱う good treatment
事故・感染症予防 prevent accidents and infection

【スライド 7】

概要 Outline

Animals: Adult Dogs (Mixed Breed), Rabbits, (Cats)
Contents:

- ◎ 犬との正しい接し方実践 Best Handling Practices
 - ・からだや習性行動 Physical, Behavior
 - ・危害防止 Preventing Accidents
 - ・感染症予防 Preventing Infection
 - ・動物愛護 Treasuring Life
- ◎ 働く犬 (盲導犬、聴導犬、介助犬等) への理解
Functions of Animals in our World
(eg., guide dogs, companion animals)

【スライド 8】

我々獣医がやっておる仕事なので、犬との正しい触れ合い方ということを主にやっています。体のつくりや行動習性を学んでいただくと。危害防止ということで、こういう場合にはこういうふうに振る舞いましょうというような場面ごとの対応方法。きょう、パネルを展示する場所がないからということで、うちで使っているパネルを 8 分の 1 に縮小したものを黒板のところにちんまり置いてありますので、中身をごらんになっていただければなと思っています。

それと感染症予防ですね。触れ合ったら手を洗いま

しようと、過度の接触はいけませんということと、動物を大切にしましょう、生きている仲間ですよということで、心臓の音を聞いてもらうというようなことをやっています。拡張心音器というのを持ってきて、これを使ってお子さんたちにウサギさん、猫、犬、あるいは子供、大人の心臓の音を聞き比べてもらうということで、ああ、同じ心臓が動いているよと実感を持ってもらうことが可能であると。それと社会で働く犬たちがいますと。こういう役割をしていますよというような御紹介もするということをやっています。

こんな感じでやっていますね。体育館にお子さんに集まってもらって、これ大体1学年と思うのですが、1クラス30人ぐらいで、当時これ10年ぐらい前のフィルムなので数が多いです。でも、よく集中してくれて、講師の言うことをちゃんとお話し聞いてくれます。大体、学校の生活科の授業を拝借しましてやっていますので、大体1時間なのですが、並んだり位置を変えたりするのに時間がかかるとおっしゃるので、大体2こまもらっていると。でも、お子さんたちに途中で休憩を挟みましょうかと言うと、いや、ワンちゃんと早く遊びたいからと言うので、大体ぶっ通しでやってしまうことが多いです。

これは心臓の音を聞いているところです。子供に心音を聞ける話になりますと、僕も、僕もと切りがないので、いいかげんところで切り上げるのですが、大変興味深く聞いてくださると。

触れ合い猫ちゃんなのですが、適正のある猫が余りいない、ほとんどいないので、こうして連れてくることはまれです。うちへ来てくださったときには、飼っていますので、さわってもらおうと。さっきの学校へ訪問するというやり方だったのですが、これは城南島支所なのですが、遠足に来てもらって同じようなことをやっておるというシーンでございます。

ちょっと歴史的なものが後になったのですが、随分昔からやっています。子犬が多くいた時分には子犬に触れ合ってもらおう、動物のかわいさ、温かさというものを体感してもらおうという話だったのですが、90年代からは小学校へ展開しておるということでございます。

以上が東京都が今やっていることの現状でございます。

○山口先生

どうも先生、ありがとうございました。

それでは、会場から4人の先生方への御質問をいただきたいと思っております。御質問のおありの方、どの先生に、あるいは4人の先生にということをお指名いただいた上

で御質問いただければと思います。手を挙げていただけますか。御質問ございますでしょうか、遠慮なく。

○参加者

済みません。順天堂大学の刺がチと申します。はじめまして。

もともとは先生方に、ヘルスエデュケーションとコミュニケーションを研究しているので、きょう、教育の教材等を御紹介いただきましたが、心理学の先生方との共同というところも御提示いただいたと思うのですが、まさにそれを今やっています。

それでキャンペーンが幾つかありましたが、メッセージを一つに絞るといっても同じようにやっています。

日本において、この動物福祉について詳しくはないのですが、先生方、済みません、専門を私がいまいよく理解してないのですが、社会学、心理学、公衆衛生学、獣医学などの先生方と一緒に共同作業をされているのかということをお尋ねしたい。

そして、フィルムのほうは恐怖喚起コミュニケーションの要素が最初に強かったような気がしているのですが、あえてその恐怖喚起コミュニケーションの部分を時間的にとっているのかということをお尋ねしたいという2点です。

○山口先生

ありがとうございます。

○司会

リスクコミュニケーションのほうがお専門なのでお願いします。

○ディーパシェリー・バララム

ちょっと明確にしたいのですが、いただいた御質問というのは私たちが学際的に仕事をしているかということをお尋ねいただいたかと認識しているのですが、それではよろしいですか。そうであれば、やはり学際的に仕事をしています。そのようにしようとしています。そしてこれは場所によると思うのですね。



例えば日本なのですけれども、素晴らしいと思って感銘したのですけれども、獣医学の人たちがヒューメイン教育に関心を持ってらっしゃると。その関心の高さというのはインドではなかなか実現できないのですね。獣医師の人たちが自分たちの役割の一環としてヒューメイン教育を考えてくれてないということがあるのですね。でも、実際には獣医師には果たすべき役割があると思っていますのです。心理学者であるとかいうところなんですけど、そういった人たちにかかわってもらおうとしているのですが、でも社会学者はほとんどいないのですね。ほとんど児童心理学の人たちにかかわってもらおうとしているのですね。

私は動物保護団体にいるのですけれども、ですので、私たちが中核的な仕事をやって、そして専門家を集めて、そしてコメントやフィードバックをもらうというようなことをやっているのですけれども、でも多くの場合には動物福祉団体がその中核となって仕事をやるということが一般的だと思います。そして多くの人たちから承認をもらうということをやっているのですが、でも、専門的な知識が必要という場面もあると思うのですね。

児童対象ということになりますと、基本的なところを提供しなければいけないから余り難しくないのですが、もっと専門性のある獣医教育とか、あるいは動物の取り扱い、それから、その臨床における動物福祉ということになってまいりますと、専門家を動員しなければいけないと。その資材の準備、それから教育も実際に行っていくと、彼らのほうが知識が豊富ということもありますけれども、その観客のほうがやはり専門家の口から聞きたいということもあると思いますので。

そして、動物の福祉のシラバスのところのコンセプトなのですが、この中身というのはブリストル大学の獣医師が作成しました。ですので、できる限り専門家の人たちを集めて実現するというのが望ましい形かとは思いますが。

もしかするとフィルムが恐怖を誘発すると思われたことに関しては、ちょっと残念でありました。というのは、そういったことを描写するということはもともと意図していなかったの、そこは残念だと思うのですが、ああいう映画というのは子供たちには見せるのは適してないと思うのですが、でも大人ということが対象になりましたらいいと思うのですね。

でも、現実であるということは否めないと思うのです。あの映画の中のある部分で毛皮とか、それから娯楽で使われる動物とか、そういったところが描写していてもう

目をつむっちゃうのですけれども、見ていられないような状況なのですけれども、悲惨な状況で。でも、ああいうのを初めて見たような場合には、観客としては信じられないと、ひどいと思っちゃうのですね。でも、動物の福祉に身を置いて、そしてその教育を提供するということになると、やっぱり現実を直視しなきゃいけないと、起こってないことにしてはいけないということになると思います。

動物は本当に困難に立ち向かっていると思うのですね、直面しています。そして、そのレイシズムとかセクシズムというところを対比しているのですけれども、その動物の置かれている状況を描写しやすいということがあると思います。人は生来悪いかと思ってはいません。

最も大きな虐待というのは多くの場合には恐らく無関心、あるいは理解不足から来ているのではないかなと思うのですね。きのうはセミナーでも言ったのですけれども、私が小さい子供だったとき、地方のほうに住んでおりまして、田舎のほう。そして戦争の後ということだったので。そのときはやっぱり生活はシンプルだったので、動物にもうとってはひどかったと思うのですね。というのは、畜産の動物が飼われているようなところ、それから屠殺場とか、ああいったところは私が住んでいるところの近くにもあったのですけれども、ひどいと思いました。

とても親切心のある父が定期的に子供たちの前で子猫をおぼれさせるということがあったのですね。でも、もうこんな猫を飼うような余裕なんかはないよ、ごめんねというふうに言いながらおぼれさせたということがあったのですけれども、その後、大人になるにつれてだんだん思うようになったのですね、もっと改善できるのではないかと。私たちがやったことがいいか悪いか理解できてなかったのではないかと思うのですが、その判断を下したくはないのですけれども、科学的な根拠もそろっていると思うのですね。動物にも感覚があるのだと、感情があると。そして、感情も表現するということを知ってきていて、そして人と変わらない共通項がいっぱいあるということもわかってきているわけです。これがちゃんと理解できれば、そしてもっとよりよい状況に改善することができたら、それをやるのが私たちの責任なのではないかと私は思っているのですね。

恐らくアメリカの方法で描写をしているのかもしれないですね、ああいうふうな感情的な音楽をバックミュージックに使って、ああいうナレーションの仕方でも、あんなひどいことはどうのこうのとか言っているのですけれども、それをちょっと側に置いておきたいと思うので

すね。この男の人というのはもう徹底的に調査をした上であの映画を制作しているということがあるのですね、初めての試みでありました。もしかすると、映画を最初に見て怖かったというのは、やはり正直な多分感覚だと思ふのですね。

Knots に対して、これを見せたいと言ったときにはすぐ丁寧なメールが返ってきました。もしかすると、余りいいアイデアではないかもという御回答を最初にいただいたのですね。でも、どういう意味かということもわかりました。というのは、もしかすると適切ではないかもと思つたのですね。というのは、もう見てられない、やってられないというふうに思わせてはいけなわけですよね、見ている人が。でも、やっぱり直面しなきゃいけない現実があるわけですね。情報をもらわなければ、そして直面しなければ何か行動を起こそうとは思わないわけですから。

○山口先生

ありがとうございました。

それではほかに。まだお時間ございますので。

○参加者

2人の先生にお伺いしたいのですけれども、柴内先生のほうで子供のことについてお話しされていたのですけれども、私も平日は保育士として働いているので、共感できるところがとてもあって、そういうふうにしたいのですけれども、保育の現場としては犬とか猫は汚いものだからというような感じで、さわらせないというのが現状なのです。

それで、ちょっと最後に先生の言葉で理解できなかったところがあって、小学校に上がるまでは家庭にいたほうが、何て言うんだらう、小学校に上がるまでは子育てをしたことがない人がというので、ちょっと私も子育てはしてないけど保育の現場に立っているのですごく、すごく私も保育士をしながら家庭で育てことはとても大切、触れ合うことは大切と思っているのですけれども、そここの先生の理想としてのお考えを伺いたいのと。

あと山下先生なのですけれども、犬と猫とということちょっとグラフとかもあったのですけれども、休日のほうは愛護のほうで活動しているのですけれども、譲渡するので一緒に犬と猫が里親さんにもらわれることが多いのですけれども、犬と猫の共存というところでのようにお考えか聞きたいのですけれども、よろしくお願ひいたします。

○柴内先生

保育とか0歳児からの願ひもしなくてはならない

のですね。

私の申し上げている意味は普通の家庭、今まで願っていた家庭、大家族であっても小家族であっても家庭というものが基本だと思いますから、子供を産んだ親は全責任ですね。そうした家庭の中での保育ということももちろんですが、保育をお願いしている先は、今は時間的に親よりも長い時間を見ていただいていることが多いのだと思います。

小学校に上がるまでにしなくてはならないこととしてはいけないことを人類として、それはきちんと身につけておかなければいけないことだと思います。私たちが生まれたときには冷蔵庫には氷を入れなければいけなかったのに、今やiPadでポッポ、2歳、3歳から使える子供たちなのです。

環境が違うわけですから、その違う環境の中でも人類であることに違いはないので、そうした意味での教育をしていただきたいという願ひで、そして学齢に至るまでの間の、その時期の体感教育、体感、体得、体で覚える教育が非常に大事だという意味でお話をいたしました。そのようなお答えでいいのでしょうか。

よろしくお願ひします。

○山口先生

ありがとうございました。

では山下先生、お願ひします。

○山下先生

動物との共生ということで、犬と猫と一緒に飼うという意味ではないですよ。

○参加者 犬と猫と一緒に飼えると私は思っていて、……一緒にいるんですけど……。

○山下先生

一緒に飼えるかどうかというのは、それは環境の問題だと思います。基本的には、家庭における犬、猫の適切な飼養管理ということについて、うちの譲渡前、譲渡時の講習会ががっちりお話ししております。

つまり、動物というのはおもちゃでも慰み者でも何でもないわけで、やはり命があって健康に生活していく、人と良好なコミュニケーションをとっていくことが必要ですし、飼い主はその義務があるわけで、それができない方は飼うべきではありませんということでお断りしています。

ですから、譲渡条件の中に、例えばペット不可の集合住宅に住んでらっしゃる方とか、高齢者の方でサポートする方がいない方とかというのは、これもだめな条件になります。

○参加者

ごめんなさい。そういうことを伺っているのではなく、一緒にいることは、先生としてはどのようにお考えなのかな。私はいいと思うけど、先生の中では。

○山下先生

その動物の個性によると思います。やっぱり神経質な猫ちゃん、犬ちゃんと一緒に他種の動物を置くというのはそれだけでストレスになりますので、それは避けてあげるべきで、部屋を分けるとか、フロアを分けるとかということが必要だと思います。

基本的な飼い主がやるべき管理ということについて、きょう、災害時のパンフレットを持ってきました。それが参考になると思います。ただ、不妊去勢手術という項目が抜けちゃっているの、健康管理の一環ということととらえてください。室内域で飼うには不妊去勢手術は必須でございます。

○山口先生

ありがとうございました。

ほかに御質問は、どちらでもお任せします。もうちょっとだけ延ばしますので、時間は。

○参加者

済みません。山下先生にお伺いしたいと思います。

私は隣にいらっしゃる柴内先生の動物病院で獣医師をしています。活動もしています。その中で、東京都のきょうは出張方式と来所方式というのを初めて私、知ったのですが、出張は年間どのくらい行われていますでしょうか。

それと来所はどのくらい来所されるものなのでしょうか。済みません、よろしく願います。

○山下先生

出張方式なのですが、年度末に各市の教育委員会あてにお手紙を差し上げています。反応があったところに向向いていくということなのですが、やっぱりこちらも人手不足で全部に対応仕切れないので、残念ですがということになる場合もあります。去年までの実績だと年間70件くらいですか、やっています。こしはちょっとほかの仕事、動物取扱業の監視等が入っていますのでごく減らしてしまったのですが。

来所方式では、実は城南島から触れ合い動物を全部本所のほうへ引き上げてきて、本所で動物教室を主宰するようになりましたので、城南島へは来所していただけないのですが、多摩のほうでしたら日程が合えば何とかなるのかなと。駐車スペースも若干はありますので、土手でお弁当を食べていただくとかということでもよろしければ、課外授業でというのは可能だと思います。

○山口先生

ありがとうございました。

あとお一人ぐらいになってしまいますので、申しわけございません、もう時間が詰め詰めになりました。

○参加者

考え方についての質問で、ちょっと難しいのですが、質問も。

文化を超えた考え方について、海外から来られた先生を中心に御意見を伺いたいのですが、動物の福祉を考える場合に、直感的に優しい気持ちを共有する、先ほどのゴリラの写真であるとか、私なんか電車をおりて駅の前で、町の状況がわからないのでちょっと迷っていたら猫のほうがあいさつをしてくれたとか、そういう優しい気持ちを人間と動物が共有するという直感的なところは文化を超えた概念として生き続けるというか、非常に重要な、だれにもわかりやすいポイントだと思うのですが、私が質問したいのは次の点で、今、日本では宇宙物理学者や遺伝子工学の世界的権威の先生方が命の重要性、命が存在するという事実自体が奇跡だと。宇宙が創造された、それから地球が創造されて、それから地球に最初の生命が、細胞が誕生して、私たちはみんなつながっていると。ゲノム的に見たら他の生物と構造自体はみんな共有しているという、そういう奇跡的な事実ですよ。それは科学で証明されつつあって、命のメカニズムというのが徐々に明らかになってきていると。これはだれが見ても否定できない、純然たる事実、科学が証明する事実として、文化、それから伝統、歴史なんかを超えた世界を束ねる大きな力になると思うのですが、そういうムーブメントが日本の世界的頭脳を持った先生方が提唱し始めていると。そういった流れが世界的にあるのか。先ほどの「Earthlings」のコアのメッセージは共通点がありましたけども、そういうところで世界を束ねていけると思うのですが、そのあたりについての、済みません、長くなって。御意見をお伺いしたいと思うのですが、よろしく願います。

○参加者

ちょっと明確にさせていただきたいのですが、意見を聞いてくださっているのかしら。私たちが連携しているという事実を啓発のメッセージとして活用するということをおっしゃっているのでしょうか。いいえ、私はすべての生命体が接続している、コネクティングしている、つながっていると、これが科学的な根拠として担保できているのだと、明らかになってきていると。すべての生命体、生き物が一つの細胞からつくられていると、10億年もの前につくられている。

ということで、質問というのは、私たちのメッセージ

としてそれを使っているかということなのでしょうか。

このような概念というのが多くの人たちに共有されているという事実があると思うのですね。世界各地で文化、それから国家の違い、あるいは関心事の違いを超えて出てきていると思うのですが、そういった動きというのが、御存じの国、あるいは御自身の国でこのような概念を使って人々を統合する、あるいは連携すると。

つまり、生命の重要性そのものを大事にしようという動きがあるのかどうかと。これはもう科学的に、奇跡と言わんばかりの科学的な証明というのが出てきているということなのですが、ちょっとまだ明確ではないのですけれども、でも、基盤としてあると思うのですね。実際におっしゃるとおりだと思し、多くの科学的な研究、あるいは知見が出てきているということがあると思うのですね。その科学的なメンバーもやはり納得してきていると思うのですね。実践的な人たちも納得するようなものが出てきていると思うのですね。

そのプログラムそのものはシンプルなのであっても、例えば子供たちを対象に、彼らに説明するような場合にも、おっしゃったとおりのことを説明することができると思うのですけど、もうちょっと簡便にすることができると思うのですね。私たちはもともとつながっているのだと。だからこそ、ある一つの集団、あるいは種の違いがあっても差別したりしちゃいけないのだというメッセージがあると思うのですね。ヒューメイン教育の根幹にあると思いますので、おっしゃるとおりだとは思いますが、だから、本当にヒューメイン教育の基盤となっていると思います。

そういった動きがあるかという御質問をいただいたと思うのですが、そのメッセージを促進するような、推進するような動きがあるのかということなのですが、その質問に対してはそんな大きなうねりにはなっていないと思うのですね。でも、ヒューマン・アニマル・ボンドというものもありますものね。いろいろな団体がそういったものを推し進めているところもあると思うのです。

例えば、環境団体というのが環境だけに集中して動物のことを忘れるとか、あるいは動物愛護の団体が動物のことだけを考えて、人とか環境のことを考えないということがあられると思うのですが、それを超えて全部を保護してみる、やっているというところの団体があると思うのですね。

ヒューメイン・エデュケーション研究所というところがあるのですけれども、いろいろなセクションがありまして、そのホームページを見ていただきますと、動物だったり環境だったり、それらをそれぞれ取り上げているセ

クションもあると思うのですが、あるいはその活動、あるいは教育プランと、あるいは授業のプランというものがこの接続性、あるいはつながりということに関しても取り上げてはいるのですね。多くの団体がそういったこともやっております。

それから、人、動物のつながりに関する組織、あるいは協会というのがあられるのだけれども、日本でも知られていると思うのですが、彼らもヒューマン・アニマル・ボンドを推進している、そして私たちの共通項を推し進めているということがありますので、いろいろなところが出てきているとは思いますが、そういった答えでよろしいでしょうか。

映画の名前「Earthlings」なのですが、そして Make the Connection ということでつながりをつくろうと言っているのですね。ですからおっしゃったことにも本当に関連性があると思います。おっしゃっているとおりのことが映画でも言われていたと言えると思います。

○山口先生

これで午前中のセッションを終わらせていただきます。

(休憩)

○司会

それではプレゼンテーションを始めたいと思います。ten minutes 厳守でお願いしたいと思います。

Aチーム、どうぞ。よろしく申し上げます。

○参加者

何か押し上げられてここまで出てきてしまいましたけれども、私たちの考えたことを発表させていただきます。まず私たちが一番最初に定義した問題なのですが、たまたま通学路、通園路に当たっているところに家を持っているというのが私なのですが、そこを通る子供たちに対して、長年住んでおまして気がついたことがありまして、それは動物に興味を持つ年代というのが大体3年生ぐらいまでなのですね。それを過ぎますと、やはり友達同士のほうに重点がおかれまして、いつも通ってさわっていい、だっこしていいと言っていた子どもも素通りしていく。

それで一番感じましたのが、やはり3年生ぐらいまでの間に動物とどう接したらいいのか、どう動物を扱ったらいいのかということを教えるということはすごく大事なことじゃないかなということを考えたわけです。

そこでこの映画を見まして、彼女の興味を持って疑問を持った。それに積極的に働きかけた周りの、多分この陰には御両親も学校の先生も、いろいろな大人がかかわっていると思うのですが、その方たちが真摯に

彼女に向かい合ったということが非常に大事だったと思うのですね。

それで彼女がそれをどうしたら自分のものに変えていくことができるのかということを考えて。それに周りのみんな協力をした。そして受け入れる子供の体質というか、耐性、それからその子の持っている性格、そういうものを御両親がよく見きわめていたのではないかと思うのですね。

というのは、そういう残虐な姿勢を見て、それがトラウマになってしまう子もいるでしょうし、彼女のようにそれを積極的に取り入れて、どうしたらこれを改善できるかということをや、前向きにとらえてできたということは、やはりそれをよくわかっている御両親がいて、この子はこういうことに立ち向かっていける子だということを知って、多分この問題を解決していったのではないかということですね。

それから、最終的に映像としてとらえたことによって、子供からの働きかけというのは非常に社会にとって大きな影響を与える。大人がそういう問題に対して、闘犬はいけないだとか、何とかと言うことよりも、子供が見て、これはまずいのではないか、これは考えくちやいけないのではないかということ提起したことによって、社会でそれをまた改めて考え直すチャンスをつくったのではないか。そしてまた、そういう映像をきちんと流したこのテレビ局というか、そういう番組を制作したところも非常によかったのではないかということをや最終的にまとめさせていただきました。

よろしいでしょうか。済みません、どうも失礼いたします。

○司会

ありがとうございます。

まだ持ち時間が3分ぐらい余っているのですが、ほかのA班の方のコメントというのはございませんか。ありがとうございます。

それではB班の方、よろしく申し上げます。

○参加者

よろしく申し上げます。

まず、今回このケーススタディの話をする中で、順番1番から7番ということで項目それぞれの話をしていったのですが、最終的にはやはりこの子供を教育することというのが強いては社会全体に広めていく一番の近道なのではないかという結論に達しました。

その背景としまして、まず1番目、このグレースという彼女が映画をつくるに当たって、やはり家族からの影響というのは、多分その御家庭の中で動物愛護の精神で

あるとか、動物をかわいがる、慈しむ、そういった考え方をもともと御家庭の中で背景としてあったのであろうということが考えられますし、また学校教育の中でも、これは当然想像しかないのですが、学校の中で動物を飼っているですとか、教室で動物を飼っている、または先生が動物に対してどういう考え方で子供たちに接しているか、そういったことが背景にこのグレースの場合は動物が好きになって、さらにはこのドキュメンタリーを見たときにすごくかわいそうだなという、先ほどちょっとお話しもありましたけど、一番純粋な動物に対する根源的な部分に感銘を受けた、心が動いたのではないかな。それによって、こういった映画をつくらうという気持ちになったのではないかと思います。

2番目にあるように、7歳の子供に見せるか見せないかというのは、多分お子さんの考え方だと我々のグループでは結論に達しました。それというのはやはりこのグレースのように自分みずからが興味を持って動物の、言い方はあれですけど、残酷であったり残虐な場面を見たときに、それに対して問題意識を持って、ああ、自分かわいそうだと思うからどうしようと思うお子さんもいれば、やはりそれを見ることによって心に傷を負ってしまった、トラウマになってしまったり、場合によってはそういう社会というものに対して不信感を持ってしまふようなお子さんも多分いらっしゃると思うのですね。

そうすると、自分みずからがそういったものに目を向けるお子さんには見せることで、家族がバックアップをして話し合えば、それがよい方向に向くでしょうし、逆にそうではなくて、そんなものは見たくないというお子さんに無理にも見せるようなことをしてしまうと、すごく悪影響しか出ないのではないかということで、これは本当にそのお子さん、そのお子さんによって違うのではないかと。

そして、やはりこういった闘犬であるとか動物に対するさまざまな残酷なことがいまだに先進国でもなくなっていくというのは、いろいろなことがあると思うのですけれども、やはりその国々の文化であるとか伝統であるとか、そういったものが背景にもあるでしょうし、もっと根本的なことを言えば、言い方は悪いですけども、人間のもともと持っている残虐な本能、残酷な、戦うというような、戦わせるというような本能、さらには娯楽、こういったものが残念ながらいまだになくなっていく。

さらには、動物が大好きで、動物がかわいそうという心を持っている人たちもいれば、まだまだというか、動物なんてというような考え方を持たれている方たちも実際には数多くいらっしゃるということが根底にはあるの

だと思うのですね。

後での話にもつながってくるのですが、先進国に限らずこういったものをなくしていくというのは世論の力しかないと思うのですよ。いかにその国々の多くの方がそういったものはよくないよね、かわいそうだよ、だめだよという声をすくく発信することができれば、多分先進国に限らず、こういったものというのはなくしていけると思うのですね。

じゃあ、どうすれば世論の声をあげることができるかというのが多分この、今回の4番、5番、6番になる部分になると思うのですが、先ほども言ったように子供からの教育というのは非常に重要になってくると思います。

この4番にあるように、例えば我々の、Bグループで話をしたときに自分たちがこういった、このグレースの先生だったらどうするか。まず、自分のクラスの生徒さんたちに見せると思うのですね。見せた上で、当然一人一人意見というのは違いますから、意見を子供たち同士でディスカッション、戦わせることによって自分たちで考えるということをしていくのではないかと。考えていく中で、当然先生としての役割として、動物に対する優しい心を持たせるですとか、動物愛護の精神、福祉の精神、そういったものを持たせるような指導をしていく。教育というとおこがましいのかもしれないですけども、そういったことを子供たちに自然に誘導していくという教育が、せっかくこういった映画が賞をとってというような背景に、自分のクラスの生徒がそういったことをした場合は、そういったことをしていくのが自分のクラスの子供たちにとってもいいのかな。さらに、それが福祉団体ということであっても同じだと思うのですね。やはりこういったものを、今、1クラスの担任であれば自分のクラスにしていけますけれども、それが福祉団体であったり、そのほかのいろいろな団体であるならば、そういったことをいろいろな学校に同じように広めていけばいい。いろいろな学校の先生と一緒に協力し合うことで、それぞれの学校のそれぞれのクラスで同じようにこのビデオ、映画を見せることによって考えさせる。

これまた7番にもつながっていくのですが、子供たちに考えてもらうことで、それを家庭に持ち帰ってもらって、子供たちが親御さんにお話しをする。そうすると、そこで一緒に子供と親御さんの中で話が生まれますし、親御さんが考えてくれる。もっと言えば、親御さんを交えた授業参観的な授業をしていくことによって、親と子供の中でこういったことが広まっていく。そして、さらにはその親御さんが地域社会に広げていく。さらに

は、その国の社会に広げていくという輪を少しずつ子供から発信していくことによって大きくしていくというのが一番、このヒューマン・エデュケーションの大きな効果でもあると思いますし、また、そうやることによって先ほどの先進国での、先進国というか、世論ですね、動物愛護に対する、動物福祉に対する世論の声を大きくしていくことができるのではないかなというのが我々Bグループが出した結論になります。

最後にこのヒューメイン教育について、やはり大事なのは動物に対する正しい知識であるとか、動物との正しいかわり合い方、正しい扱い方をしっかり理解させるということと、あとはやっぱり一番大事なのは、どれだけ動物と生身の触れ合いができるかということがこの教育をしていく上では非常に重要なのではないかなというのが我々B班の結論でした。

以上、簡単ですが、けれども。

○司会

ありがとうございました。

ぴっちり10分でした。さすがです。

それではC班お願いします。

○参加者

よろしくお願いします。

私たちは先ほどのB班のようにすべての項目についてはなかなかまとめることができませんで、まず1番目のテーマなのですが、どういうふうに決心したのか、そして行動がどの程度影響されたかという部分なのですが、恐らく、まずこのグレースちゃんという女の子がふだんからいろいろなメディアの媒体とか、そういったものを通して常に家族とか、あと学校とか、そういったところで話をする機会があったのではないかと感じ取りました。その疑問を家族とか学校で話さず中で協力してもらえ環境があって、その行動を少しずついろいろ協力してもらいながら形にしていっていったと思います。なので、どの程度ということは本当にあくまでも推測なのですが、家族の協力もありましたし、学校でもそういったことが受け入れられる環境があったと感じました。

2番目の7歳というこの彼女ぐらいの子供に闘犬の残酷な知識にさらされるべきかどうかという部分なのですが、ここはすくく議論したところでして。ただ、残酷な問題とか、子供にとってちょっと早すぎる問題であったとしても、それが事実であれば、それが現実問題として子供にあえて隠すということはベストではないのではないかなという意見がありました。なおかつ、もし可能であれば、ここのところはすくく難しい部分だなということ

答えが最初からヒューメイン・エデュケーションという
ことで、動物をいたわらないといけませんよという答え
が先にあって、そこに誘導するような形で子供が踊らさ
れているのではないかという御意見があったのですね。

そういった反対の意見も取り入れながら自由なディス
カッションをすることによって、本当に何が問題で、ど
うしなければいけないかということを広い心でもって、
一部の人たちの利害関係、あるいは信念や理念だけを力
で押さえつけるとか、例えばアメリカが自由主義という
名目のもとに戦争を正義として人の命を奪ったりしてい
ますけども、そういうことにつながるのではないかみた
いな大きな議論になりました。

ということで、反対意見も取り入れながら議論をする
ということの大切さということをこのチームでは学んだと
いうことなのですね。

その場合に、ここに集まっている人たちは少なくとも
ヒューメイン・エデュケーションという理念、その具体
的な方法論をよしとして、それを日本に反映させてい
こうじゃないかという志を持って集まっていると。世の中
というのは、それぞれの人の考え方を世の中に反映させ
ていく上で信念とか理念というのがまず前提になります
よと。

先ほど横山先生が指摘された反対意見ということを取
り込んで、非常に大きな広い議論をしてしまうと話が拡
散してしまって集約しないから、前提として、議論をす
る場合は基本的な共通の基盤として、理念や信念とい
うものは確認し合ひましょうよということで、人間の命も
含めて、命というものを大切にしましょうよ、それから
優しい気持ちであるとか、愛というようなことをはぐく
んでいきましょうよということを前提に考えると、必ず
しも自由な議論さえあればいいというのではなくて、事
前に最低限共通の基盤として確認し合うべきところは確
認した上で、自由な議論を通してより進んだ考え方に発
展させていきましょうと。そういうことをこのケースス
タディを通して、地球の反対側のニュージーランドの7
歳の子供がそのきっかけをつくったということに対して、
このグループDは非常に敬意を示して、ハッピーエン
ドで終わりましたということです。

どうもありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。きっと御苦労をされたのだ
と思います。どうも先生ありがとうございました。

でも、私は大学の先生に御議論のベースメントをきち
んと示していただいたという点で、これからこういうこ
とを進めていくときは前提だとか、そういうことをきち

んと調べてというのは本当に大事なことだと思うので、
それを改めて最初からやっていただけたというのはすご
く大事なことだったと思いますので、改めて先生、Dグ
ループの皆さん、本当にありがとうございました。

というわけでEグループのほうに行きたいと思いま
す。

○参加者

Eグループの発表をさせていただきます。

1人でじゃんけんにも勝ってしまったので、話が下手な
上に話もまとまらなくて、箇条書きを述べさせていた
だく形になります。

私たちは1番から1個ずつ追っていったのですが、
結局時間がなくて六、七番まで行かなかったの、そこ
まで行きます。

1番だと、グレースちゃんもともと動物が好きで、
幸せな家庭というか、闘犬とかちょっとショッキングな
映像を見る機会がなかったので、かなり闘犬の存在が
ひっかかる環境にいたのではないかという話になりまし
た。7歳の子のストレートな意見とか質問とかというの
には大人はうそはつけないので、家庭のお父さんとかお
母さんとか先生とかもグレースちゃんに逆に引っ張られ
るようにしてサポートしていったのではないかというふ
うになりました。

2番なのですが、この7歳というのは年齢的にすご
く難しいと思うのですが、男女でも成長が違ってくる
と思うので、個人の感受性の成長ぐあいによってくる
という答えになったのですが、結果としては、いい意味
でも悪い意味でもこういうちょっとショッキングな映
像を見ることはあってもいいのではないかというふう
になって、ちょっと年齢もあれなので段階をもうちょっと
踏まえて、いきなりショッキングな映像とかというので
はなく、話だけをしてみるとか、段階を経るべきなの
ではないかという話になりました。本人がこういうふう
に自発的に知りたくて調べ始めましたというのは、ぜひ
サポートしてあげるべきだなという話にもなりました。

3番なのですが、これもやはり前の班の方々と同じ
ような意見で、いい悪いというのは言えなくて、やはり
需要があるのでビジネスとして成り立つので、グレー
ゾーンみたいな感じで、隠れてでもそういう需要がある
ので成り立ってしまうのではないかというのと、あと文
化として地域に根づいてしまっているの、いいとか悪い
とかという判断は難しいのではないかと思います。人
間にそもそも闘争を見るのが好きという本能があるので
はないかという話になって、例えばボクシングとか人が
戦う姿でもみんなわあっと言って見に行ったりとか、そ

ういう戦っている姿を見たりというのは人間の本能に備わっているのかなという話にもなりました。

4番なのですけど、このグレースちゃんの場合だったらSPCAの方々のところにクラスメイトみんなで行ってお話を聞いたりとか、逆にお呼びして話を聞いたりとかというのができるのかなという話になって、日本だと教育と動物がまだ密接にリンクしてないのが現状なので、いきなり動物とかかわりましょうというのが段階を経ないと難しいのかなという話になって、できるとしても、こういうのを使ってみたらという夏休みの見本とか模範とかにするぐらいが限界なのかなという話になったのですけど、犬は闘犬みたいに犬の扱い方の一つとして提示する。こういうふうな家庭で飼っている犬でもこういう扱い方がされているのですよというのを教えることは、扱い方の一つとして提示することは大事なのではないかという話になりました。

5番なのですけど、これは7歳の小さな女の子でも、小さいようなことでもできることがあって、それがみんなやったら小さい力が大きくなるから、みんなやれば大きい力になって、動物福祉団体としてはこういう活動がどんどんふえてほしいので、みんなでやろうというのをアピールできるきっかけになるのではないかという話になりました。

六、七番は行ってないのですけど、今回、ヒューマン・エデュケーションという言葉で、ちょっと恥ずかしいのですけど、今回の会に参加させていただいて初めて詳しく知ることができて、最終的には教育のために動物が入ってくれることは大事だなというふうには班の皆さんで感じるねという話になったのですけど、実際には今は日本人と動物のつながりがなかなか、私たちもよく動物のことを知らないですし、教育者の方も知らないですし、実際に動物をさわるのが汚いからという施設もたくさんあると思いますし。なので、今はもうちょっと日本人と動物のつながりとかかわり方をもっと議論して、ベースをつくっていかなきゃいけないのかなという話になりました。

以上です。

○司会

ありがとうございました。

若い方がこんなに立派に発表していただくと、本当に将来は心強いと思ってしまいます。本当にありがとうございました。

それでは最後、F班に行きたいと思います。

○参加者

じゃんけんで負けまして発表者になりましたF班のヤマ

と申します。よろしく願いいたします。

私は本当にじゃんけんに弱くて、大学時代から、ソフトテニスをやっていたのですが、いつもじゃんけんをして相棒にしかられていて、きょうも負けてしまったということで、光栄なことです。させていただきます。

まず1番ですけれども、この闘犬について映画をつくることを決心したというのは、やはりこの子は闘犬ということがどういうことで、普通、おうちで飼っているワンちゃんたちとどういうふう違うのか、そしてどういう気持ちでこの犬がいるのだろうかとか、そういうことをきちんとわかっていて選んだのではないかなというのが意見でした。

こういう感情を持つお子さんがいるということは、家庭教育で動物に対する気持ちであるとか、飼育環境であるとか、そういうことをきちんとした形で御家族が成り立たせているので、こういうことを取り上げるお子さんがいるのだろうということで、やはり皆さんからも出ていましたが、この子の育っている、グレースちゃんのいる家庭というものがそこはかとなく……ようなことだなと思っていました。

そして、動物に対する大人たちの接し方が、自分とかかわっている人を含めて余りにも違う環境にあった犬の、闘犬という立場というのでしょうかね、ギャップから考えて闘犬というものがいけないことだとこの子は思ったのだろうと思いました。何かを子供たちが行動に移すときというのは、大人のリードがいかにか上手にできているかということが大事なのだろうということも結論が出ました。

そして2番目の7歳のお子さんぐらいの子たちに残酷な知識をどういうふうにするべきかどうかということなのですけども、これは今の時代では隠そうと思って隠せないという時代ですので、子供の疑問にはできるだけ真摯な形でまじめに答えるべきであろう。そして、大人が答えるときに困ってしまったり、うやむやにすると、子供がそれはいけないことなのだろうということを考えてしまうので、隠すのではなくてそれを探る方法を一緒に考えるであるとか、答える方法を導き出す、それが調べる方法を促すということができればいいけれども、わざわざ暴露させる必要はないであろうということです。

そして次は、闘犬がなぜまだ残っているかというのは、皆さんと同じようなことなのですけども、その地域の伝統であるとか、そして、いいことだと思ってしまっているとか、いけないことであるとかの認識がないとかということでなれている、昔からなれてしまってい

るのでそれに気がつかない。それから、ゲーム感覚になっている心地よさ、そういうことで続けられているということがあるのではないか。そしてこのおまわりさんも言っていましたけれども、ニュージーランドでは1999年で法律があるので、本当は法律違反なのだよという意見がありましたけれども、罰せられてもそれ以上に得をすることがあれば、これは続ける人があるのだろうということで。この残酷ということの基準が地域とか民族とか、そういうことによって異なるので、もしかしたら私たちが魚の生きづくりというのでぴちぴち動くような魚をいただいていますけれども、それはほかの方から見たら何て残酷なということをおられるかもしれないので、お魚のいただき方とか、そういうことでも、こんなに大きな、闘犬とかということでもなく、身近なことでもいろいろあるのではないかなと思いました。

それからこのビデオの中でグレースちゃんがSPCAの方にインタビューをしたときに、SPCAのみなさんができることをしてくださっているので私も自分にできることをしようと思ったということで、募金活動をして届けるわけですけども、そのときにももしも日本の子供たちだったら自分のお小遣いをためるだとか、何かを買うのを我慢して持ってきましたということがあるのかもしれないけれども、国民性なのでしょうねという結論ではあったのですけれども、きちんと自分たちでフリーマーケットであるとか、こういう販売をしてお金を得るということを考えた。これがすばらしいことで、日本の子供たちは、ここは違う方法を考えるかもしれませんねということでした。

それと、このような活動をほかの社会的問題解決の働きかけに使えるでしょうかということですけども、まずはこの子供の疑問に対して大人がいかにもじめに答えあげられるか、ここから始まることではないかなと思いました。それで、私たちのグループでも公的な仕事をされている方もおられたのですけれども、もしも自分の職場にこの7歳の子供がマイクを持って、そしてカメラを回しながら来て、おじちゃん、これに答えてみたいな場面があったら、自分はどうするだろうかということがあったのですけれども、その行動が行われる前には大人たちからのアプローチがあって、正しい方法にのって、お父様であるとか教員の方であるとかからのものがあると思うのですけれども、子供からの疑問に対してじめに大人が答えあげられるようにすることが必要だろうということも出てまいりました。

このビデオを使ってクラスの子たちに見せるとしたらどうするかということも話したのですけれども、この

闘犬という内容に関して私たちは、このグループというのは動物が大好きで、動物愛護とかそういう精神について知っている人たちの仲間なので、この闘犬ということを知るとばばぱっというんなことが走るのですけれども、全然知らない人たちのグループ、またはお子さんたちに関してはこの闘犬ということを先生が残酷でなく、このグレースちゃんはとても明るい雰囲気、音楽も含めて明るくとらえているのですが、どのように説明できるかということがまず難しいなと思いました。ですからこのグレースちゃんのビデオを使うときには、もしもあなたたちが自分で興味があること、または疑問に思っていることがあったらどういうふうに映画をつくっていくとか、そういう方向で教育材料として使えるのではないかなと思いました。

先ほども反対意見がある中での議論はとても大事だということもあったのですけれども、私たちがきょういただいたこの議題というのは、テーマというのは、知っている内容とかイメージがわく材料だったのでいろいろ意見が出せたと思うのですけれども、全く知らない、私にとってだったら経済のことであるとか、法律のことであるとか、そういうことのテーマをいただいて、そして語りなさいと言われたら、貝のように口を閉じてしまって何も意見は出なかったかもしれないので、そういうような自分たちのかかわりのないものをテーマにいただいたときの議論の仕方であるとか、かかわり方であるとか、そういうことも知っておく必要があるなと思いました。以上です。

○司会

ありがとうございます。

大阪の会場と比べますと東京の会場は年齢層が高いせいか、やはり幅広い御指摘ですとか、幅広いところに意見が行きまして。大阪では何が一番すごいと言ったかという、大人が子供が持った疑問に対して、だれもいかげんに上から目線でないで、彼女が聞きに行ったところにきちんと、そういう子供だからという答え方ではなくて、1人の人間として対峙して答えているその態度がすごいというのが府立大生の感心した一番のポイントで、そこにいらした保育士の先生がジョイ先生のようにすてきな笑顔でお話しをすると、アクセプタブルな受け答えになってくると、そういうふうにして、やはり子供というのは否定をしてしまうと途端にしゅんとなってしまふと、経験上そうだとことを行政の方もお話しになって、それを仮に例えば間違えたことを彼らが言ったときにも、それをどういうふう誘導してエンカレッジしながら彼の疑問に答えさせていくとか、いわ

ゆる手法のほうのお話しにフォーカスした部分が多かったので、ちょっとそのあたりだけフォローをさせていただきます。

それでは、皆さん方にお時間のほうもごさいませんので、このことについてきょうのジョイ先生と柴内先生と山下先生にそれぞれコメントをいただきたいと思いません。

○ジョイ・レネイ先生

皆さん本当に頑張られましたね。私たちはこちらで会話を楽しませていただいたのですが、皆さん、御参画どうもありがとうございました。本当に積極的にやってくれました。

おわかりいただいたと思うのですが、このケーススタディを検討する目的というのは、やはり話し合いを誘導するというところであったのですね。話し合いを刺激する、もしかすると物議をかもしようような内容についてやってくれたいということが、子供たちの教育の場合にはそういった場面にも遭遇するかと思います。

一つ、二つコメントを提起したいと思うのですが、全体的に考えますと、すばらしいマテリアルもあっても、やっぱりなかなか正しいメッセージを伝えにくいんだと。そして、一貫してそのメッセージを強化するのは難しいと思うのですね。相手が子供ですし、そして一人一人違うし、そして家庭環境だったり背景も違うと思うし、また性別の違いもあると思うのですね。あの年齢の子供たちは特にそうだと思います。そして闘犬というところを検討するというのは余り典型的な例ではないのですけれども、真実にもとづいたものであります。ユーチューブでもそれを確認していただくことができるのです。

でも、幾つか、皆さんのほうから言ってきたもので、ちょっと懸念があるような、心配になるようなことがありました。グレースのお父さんと話して、そして例えば警察とかSPCAとどういうふうに連絡をしたのかということを知ったのですが、父親が連絡をとって、そして子供を1人行かせていいかと。そしてその疑問に答えてやってくれということだったようですね。だから、1人で子供が行って、そして警察官と会ったのですけれども、こんな闘犬に関してはちょっとかわれないから、映画を流さないで、撮影しないでということだったので。でも違反でしょうと、法律違反でしょうと、これが長く続いているのでしょうか。いや、でもだめだと、撮影しないでくれと。でも、コメントは出すから使ってくれていいよということだったのです。だから、わかったと思うのですけれども、俳優さんを採用したのですね。警察官の役割を果たしてくださった俳優さんを使いまして、実際の

警察官ではなかったということがありました。これを聞いたときには、ちょっと残念だねと。法律違反なのに、警察だって余りかわりたくないのだなと、表に出たくないのだなということがわかってちょっと残念でありました。

もっと残念だったのはSPCAの査察官というのかな、の人たちが余り知らなかったと。グレースが小さい子だから余り言いたくなかったのかもしれないということもあるのですけれども、そういった現実もありました。

おっしゃるとおり、サポートしてくれる家庭がありました。お父さんは教師で、そしてお母さんはオンコロジストということで、乳がんのファンドレイジングの経験ということがあったので、経験として何かやりたいことがあったら、お金を捻出するためには募金をしようということをおもいついたのだと思うのですけれども、それ以外にグレースみたいな子供たちもいて、そして親のガイダンスが得られない子供たちもいると思いますので、こういった物語を書いてもらったり、あるいは映画制作をしたりということ子供たちにかかわってもらうときにはやっぱり慎重にしなければいけないと思います。全体的なクラスを見渡してどうかということを考えなければいけないわけです。正しい活動の水準というものを決めていかなければいけないと思います。

というのは望ましくないのは、彼らが目を背けてほしくない。それから、担任の先生が学校集会において、700人の子供たちを対象にこれを公開しました、共有しました。実際にそれをそこまでやったのですね。もしかすると、何か賞ももらったのでやってみようということになったのかもしれませんが。

そして、ヒューメイン教育を学校教育に導入することなのですから、動物と子供たちがかわりというのは、特に生身の動物に関しては重要であります。そして、それは動物にとっては学校に連れて行かれたり、あるいはそれ以外の現場に連れて行かれるというのはストレスがあるかもしれないので、そこも考慮しなければいけないのですが、動物は子供との、特に病気を抱えている子供とのかわりにおいてはすごく大きな価値をもたらすのですが、いつ、それをどんなときにやるのかということをお考えなければいけないと思います。

そして、調査がバイアスがかかっているという話もありました。もしかするとマフィアには調査したいと言ったら、両親は許さなかったと思いますのでなかなかその調査はできなかったのかなと思います。

それから、あと文化の違いというものも強調されたかと思えます。というのは、前に研究したように、ニュー

ジールランドは私も何回も行っているのですけれども、本当にあれ自身いろいろ問題のある国であります。人々は野外活動をするし、3歳、4歳の若さでラグビーをやったりというようなことがあって、それを週末やると。そして、本当に週末も疲れるということで、本当に早熟になるということがあるのですね。多くの人たちは農業に携わっていたりということがありますが、トラクターを運転したり、あるいは合法なのですけれども、15歳になりますと車の運転もできるということがありますので、やはり日本とも全然文化的な違いがあると思います。ですので、一つの文化でうまくいっても、必ずしもほかの国でうまくいかないというシチュエーションがあり得るということでもあります。ですので、国際的な機関から用意されている資料を検討いたしますと、わくわくするかもしれないのだけれども、しっかり審査してスクリーニングしてください。そして、日本で活用する折りに適用していただきたいと思います。

これに関しては以上にしたいと思います。

すごくいいコメントもちょうだいしました。そして明らかに皆さんは本当にこの問題の中核の部分も触れられたと思います。グレースは本当にまれに見る子供だと思います。実際、その基本的な方法として、どういったプロジェクトをやりたいかと子供に聞いたような場合、そしてやりなさいとサポートを与えるというのはいいことだと思うのですね。というのは、自分が所有権を持って積極的にやることができます。また、そのコンペにおいて、子供たちは好きな映画をつくっていいということをやったということで、枠組みも基準も設定しなかったということもよかったと思いますし、興味深いと思います。子供がそういった自由な意思を発揮することができれば、私たちも子供から学ぶことができるといふうに彼女たち、あるいはその子供たちを大人として支援または援護することができるのかということ、とつても示唆を富むような教訓を得ることができるわけです。

○司会

……コメントをいただきたいと思います。先生お願いします。

○山下先生

貴重な御意見を聞かせていただいて、ありがとうございました。

コメントというよりは補足というところで。私個人的な見解としましては、何年前に亡くなられたコンラッド・ローレンツさんのおっしゃることを思い出したのですね。文化ということで動物を傷つけることについて、すべてがすべてに対して神経質になる、慎重になり過ぎ

るというのは間違いだと思っています。特に、日本の伝統である捕鯨は終戦直後、陸上に何も家畜がない、食べる物が無いという極限状態において、ぼろぼろの船を仕立てて南氷洋に出かけて行って、国民が食べる食べ物をとってきたということがそもそもあるわけで、それを知的生物だから絶対にだめだというのは、それはちょっと違うだろうというのが一つあります。

それとローレンツがおっしゃるのは、人間というのは攻撃武器を持たない生物であると。きばを持つのも持たない。したがって、行動抑制をする機構が生物として備わってないのだと。だから、人間は自分の行動を抑制することを学ばなければならないというのが非常に印象に残っています。ですから、ボクシングやプロレスリング、あるいはフットボールやラグビーで肉体がぶつかり合う、勝手にけがをするのは、それは好きでやっているのだから、どうぞ御自由にと言いたいのですが、動物同士を戦わせるというのは、これはひきょう者のするプレイだと思っています。

1点、新潟県で闘牛が行われているというお話があったのですが、日本の闘牛は牛同士が押し合う牛のレスリングです。ハンドラーがついていまして、必ず一方が逃げかけると引き離すと、それで勝負あったというところで終わりますので、流血騒ぎにはならないということですので、御心配なさらないように。

ということで、動物とのかかわりというのはやはり皆さんが、より多くの方が考えていただく必要があるのだなということで、どんなきかけでもいいので、やっぱり小さい子が世の中に発信していくということもすごくインパクトがあることだし、それを考えるということも非常に意味のあることかというふうに感じました。

以上でございます。

○司会

ありがとうございます。

きょう、本当にいろんなところで活躍して、もう一度



山下先生に、きょう本当に1日お世話になりました、ありがとうございます。

それでは、柴内先生にもコメントをお願いしたいと思います。

○柴内先生

お疲れさまです。皆様からこんな御意見が出るとは、私、感心しました、きょう。と申しますのは失礼な言い方かもしれませんが、こうして、どなたがいらっしゃっているかわからない状況で各々のグループが、突然こういうテーマをいただいて、これだけの時間でまとめて発表なさる。発表なさっている方々もすばらしいお一人一人ですけれども、各チームがこのような形で表現して下さったということはとても参考になりました。

日本のこういう社会が成熟してきているのだなとつくづく思いました。それが最初の感想です。

それから、全体でこのテーマなのですけれども、なかなか難しいテーマで、先ほども山下先生もおっしゃっていますけれども、国とか文化とか歴史とかというものが大変違いますので。特に動物と人の歴史の中で、子供と動物のいわゆるかわりについての研究というのは大変浅いのですね。そういう意味でこうでなくてはならないとか、こうあるべきだということは非常にまだまだ浅い研究の段階だと思います。

その中で、私たちは生活をしながら経験をして、こうしたいという願いをしているわけですが、今、残念ですけれども、どんどん環境が変わってしまっていて、私たちも小学校へお尋ねして大変気になる場面がたくさんあります、特に集合住宅の多い練馬区とか豊島区、光ヶ丘団地とか、集合住宅の多いところの小学校からは継続的に、又は連鎖応的に動物介在教育と称しまして、私たちのCAPP活動は依頼されています。

そちらをお訪ねしましてとてもびっくりすることがたくさんあります。お子さんの質問の中にもありますけれども、クラスが三十四、五人で、いわゆる活動動物とともに、犬なのですけれども、CAPP活動でお訪ねします。その授業の中でお子さんたちに、一度人が死んでしまったら生き返るでしょうかという質問をしますと、三十何人の中で二、三人は手が挙がります。それはボタンを押すと、また復帰できると思っているのですね。当然だと思いますね。画面には、今撃たれて亡くなっても、刺されて亡くなってもまた復帰していますね。そういう画面をたくさん見ている子供たちは、そしてまた、お年寄りが亡くなったり、御病人が自宅で亡くなる場面の経験もなく、死は永遠だということも何も知りませんか

ら、そういうお子さんたちから見れば当然ボタンで起き上がる。

私たちの診療の場面でも、ハムスターを連れてきて、しばらく待合室で遊んで、ぱっと診察室に戻ってきて、治ったと言うのですから。そういうお子さんもいらっしゃるので、本当に危険な状態にある中で、動物の存在というのはとても今の子供たちには大切だと思います。

ただし、こういうふうの内容を伺いますと、やはり環境とかフォローする場面がしっかりしていなければ。特に、日本のお子さん場合は何でも大体隠されていますね。私、一昨日、今回の大震災の後の若手の獣医師の方々が何か応援したいということで、この春から、私も少々手伝っていますが、「どうぶつ家族の会」という被災地支援の会をつくりました。大会も開いて多大な支援金を送ったり、皆さん、一生懸命手伝っていただいたのですか、その中で何回かの現地の先生方の現場の講演を伺いました。その中で1回だけ初めて当時のその後の悲惨な写真を見ることができました。

これはやはりある程度のフォローが必要ですが、私たちは見なくてはいけないこととつくづく思いました、想像はしますけれど、離れている牛は、夏ですから、物を食べて元気に動き回っていますけど、小屋の中に残された豚や牛、それ以外の動物たちは無残な死を迎えているのですね。その遺体も処置しかねています。これは動物に限らなくて、今回、東北の大震災では人のそうした姿も同じようにあったのですね、津波の後に。しかし、それは私たちの目には本当に触れてないのです。それで本当のことを知るということはとても大事なことだと思います。そこに正しい指導して下さる方々がいれば、子供たちはしっかりと受けとめる力を持つように育てることができる。

子供たちには、現実をフォローしながら見せて、それを大事な糧にしていくような人類になって欲しいと思っています。

それで今回のテーマも、なかなか条件があつていろいろな場面でいろいろな人が出てきます。俳優さんであつたということを最後に伺わないと。

あんなに上手に話してらっしゃる、なるほどと思いました。わかりやすくお話しになっていますね。さすがの演技だったと、思います。それから世界の大会で、カナダの12歳のお子さんでしたね、たしかこの地球を汚さないでというテーマで話しました、もう10年近くなるとは思いますけど、そのことも思い出します。

やはり育ちゆく子供たちの声というのは本当に新鮮だ

と思いますので、私たち大人はなれてしまわないで耳を傾けたいと思います。

そして、今、山下先生がいみじくもコンラッド・ローレンツ先生のお話しをなさったのですが、とても大事な言葉がたくさんあります。私もよくローレンツのお話しの中の一言を伝えるのですが、ローレンツ先生は、「都市化が進めば進むほど人のそばに動物が必要」と、こうおっしゃっているのですね。

今日は、動物に縁がある方がほとんどで、本来なれば、もっと学校の先生、教育関連の方、福祉関連の方々に来ていただいて、もっとこれを生きたものにしていかなくてはいけないと強く思いました。

皆さんお疲れと思いますが、私のほうからこれだけ申し上げます。ありがとうございました。

○司会

ありがとうございます。

もう一度、柴内先生に感謝の拍手をお願いします。

先ほど私が皆さんに懇願したせいか、皆さんに御質問の時間を残すことができました。先ほどの懇願は皆さんに、最後に御質問の時間をもう少し設けたほうがいいのではないかというジョイ先生のお言葉がありまして、今までの、今日全体のことについてもう少し伺いをしておきたいというようなことがあれば、場内から御質問をおとりしてくださいということですので、お疲れとは思いますが、御質問のある方がいらっしゃいましたら挙手を願いたいと思います。

○山口先生

済みません、それではバトンタッチいたします。

済みません、お二方もう一度手を挙げていただけますか、マイクが行きますので。じゃあ次をお願いします。

○参加者

日本では私も柴内先生と一緒にアニマル・アシステッド・エデュケーションとして小学校の、主に低学年の授業に参加させていただいていますけれども、日本の公立の小学校の先生というのは非常にお忙しくて、ヒューメイン・エデュケーションの時間を持つことがとても嫌なような雰囲気をお持ちの先生が多いのですが、それをどうやって攻めていけばいいか教えてください。

○ジョイ・レネイ

学校の先生というのは既に生徒さんに対して質問でありましたりとか、答えを書かせたりとか、作文を書かせたりとか、物語を書かせたりとか、そういった作業をしてらっしゃるわけですね。例えば宿題を与えたり、課題を与えてプロジェクトをさせたりとか、課題を生徒

さんに与えたりということで、テーマを動物関係とか、動物と人のかかわりとか、お友達に関してとか。ヒューメイン教育というのは必ずしも奇跡の救いではないのですよね。いきなりこれを導入するとか、それで問題解決をするということではなくて、ヒューメイン教育そのものはプロセスなわけです。我々の態度を変えていくための適用のプロセスなわけです。そして何をしていくか。どのようなやり方であっても、より優しく、より尊敬を持ってということ非常にシンプルな答えでありますけれども、……ヒューメイン教育とかそういったことに過ぎないわけです。

ですから、どんな先生であってもヒューメイン教育的なことは導入できるということで、これは新しい、追加の負担ではないわけであります。先生方に、皆様方全員が納得させてほしいと思うわけです。こういったアイデアに関して論じていただけるようなセミナーに参加していただければ、先生方もおわかりいただけると。先生方は教えることが職業なわけですから、このようなやり方でヒューメイン教育を導入するということは難しいことではないと思うわけです。教えるということはしてらっしゃいますので。先生方は教え方がいろいろあると思うわけです。日本でもいろいろなことがなされているはずだと思うわけです。

奈良に行ったときのことをお話ししましょう。神社とか仏閣とかに行ったわけなのですからけれども、そして町を歩いておりました、奈良で。かわいらしい小学生さんでしょうか、8歳、9歳ぐらいの生徒さんがいらして、観光者の皆さん、ちょっと聞いてもいいですかと。英語の練習をしたいので、忙しければ行ってしまっても構わないわけです。だれもノーとは言いませんよね。お子様方が英語の練習をさせてくださいと近寄ってきて、嫌だと言う人はいませんよね。いろんなグループで、四、五名の生徒さんがいました。名前は何ですかとか、どこの国の人ですかとかいったようなことを書かされたわけなのですからけれども、それが確か授業の一環だったそうです。すなわち、英語の練習のために行ってらっしゃいと先生が送り出したわけですね。

英語の練習ということで英語で、例えば富士山の高さは何メートルでしょうかとかいったような、富士山の絵を見せられまして、それが折り畳まれてこのようなものになっていったわけであります。こういったものをいただきました。そしてそういったお話しをしておりまして、ほんの数分だったわけですが、ありがとうございました、そして御一緒に記念写真を撮りまして、プレゼントでこの折り畳みました写真をいただいたわけなのです。

けども、すでいい活動だと思いました。英語を学習するためには、また生徒さんが自信をつけるために非常に良かったと思うわけなのです。それに対して協力しない人はいないと思うわけですね。

このようなことは動物に関してもできると思うわけです。観光者に対しまして、うちの犬の話をしてもいいですかとか、私のペットの話をしていいですかとか、猫の話をしていいですかとか。シカのいるところでしたから、奈良公園にシカがいますから、英語の練習をしながら海外からの観光客に対しまして奈良のシカの話をする、英語の練習にもなるということです。私が日本に来ましてから、既にあること、既に行われていること、そういったことをしていけばよろしいのではないのでしょうか。

もう一つ追加したいのは、ヒューメイン教育というのは、だからと言って簡単だとは言えない、シンプルであるべきだと思います。でも、イギリスを振り返ってみますと、全体としては動物に関してちゃんと管理されている。そしてRSPCAにおきましては、これが動物に関して警察官の役割をしていて、虐待があれば必ずその当事者が懲罰されるようにといった査察検査があるわけですから、英国におきましては動物愛護ということ、動物の世話、動物に対して優しくするとか、人と同様に、あるいは隣人に対しても同様に、動物に対してもということになっているわけですから。

ヨーロッパ全体といたしまして、破産しておりますけれども、そうすると人がこのようにおかしな振る舞いをするのでしょうか。政治の話をするつもりはございません。正当な理由があるかと思しますので、なぜこのようなことがされているかとかに関しましてはそれなりに理由があるかと思っておりますけれども、この近代国家において、より多くの対話というのが必要だと思うわけがあります。人々の人生というのは、争いによって混乱があってはならない。そして、イギリスにおきましては非常に多文化になってきているわけですが、移民の方々もいらっしゃいますし、いろんな国々から移民が来てらっしゃいますけれども、そして、ほとんどの英国人は、例えばさまざまなエスニック料理でありますとか、異民族の方々のさまざまな文化的なお祭りとか、そういったことを楽しませていただいているわけです。

そのように、この異文化というものが統合化されている。それはうまくいっているわけです。ただ、ほかにもいろいろ問題があります。例えば、なぜかわからないのですけれども、我々は頑張ってきているわけです。そして、法律もあるし、法律は施行されているし、そのとお

りに守られているわけですがけれども、しかし、完全にはいっていない。完全には到達してないけれども、何もなければ何も達成することができないということで、今、お話ししたようなことをずっと話続けなければいけないわけです。

より幸せで、そして子孫の代までより明るい未来のために我々は努力を続けなければいけないと思うわけです。先生方の作業、これはすばらしいと思います。非常に立派な作業をしてくださったと思います。ですから、スタートとしては非常にすばらしいスタートを切れたのではないかと思います。

○山口先生

よろしいでしょうか。

それでは次にお手を挙げてもらいたいです。

○参加者

都内で動物病院を開業しています獣医師のサイトと申します。きょうどうもありがとうございます。

私、東京都の動物愛護推進員で、動物教室にもお手伝いで行っているのですが、それは小学校一、二年生、低学年対象のプログラムなのですね。犬と触れ合って優しい心をはぐくむということが目的で達成できるプログラムかと思うのですが、もう一步踏み込んで、この国の殺処分の問題とか、動物虐待とか、あと動物に不妊去勢が必要だというようなことを話しかけられて、大人としてというか、具体的に話が聞ける年齢というのは、もう一步進んだ授業というのができるようになる年齢というのは何歳ぐらい、小学校の高学年なのか、中学校か高校ぐらいの授業がいいのかという年齢層を教えてくださいたいのですが。

○ジョイ・レネイ先生

質問といたしましては、年齢ですよ。適切な年齢として、子供たちに対して、きょうお話ししたようなトピックに関しましてどのような年齢が妥当かということだと思いますけれども、話をできたらもう既にということでもあります。

例えば童話がありますよね、非常にすてきな童話の本がありますけれども、猫がいて、そして子供が猫をなでると、非常にこれはシンプルでありますよね。それからどんどん続けていくことができるわけがあります。非常にこれは失礼かもしれませんが、私に3歳になる孫娘がおりまして、5歳になるお兄ちゃんがいまして、庭の石の下に隠れているような昆虫、カブトムシとかそういったものが好きなわけですがけれども、3歳の子がトイレに行ったときに、おばあちゃんと呼んだわけです。私の出したものが虫と同じ形をしていたと言ったわけな

のですね。でも、彼女は知ってるわけでありませぬ。すなわち、スタッグ・トルというカブトムシの一種なのですけれども、その形を知っていると、スタッグ・トルというカブトムシの一種を知っているということでもあります。そういった石の下に住んでいるような生き物も尊重するようになったということですね。

ですから、若過ぎるということはないわけですがけれども、もちろん小さいときにはベーシックなことしか教えられないけれども、でも、すごく幼い年から知識を構築しているということでもあります。ただ、問題といたしまして、動物福祉で我々が遭遇することといたしましては、往々にしてある段階に来ますと何かをしたいと、すぐにシェルターに行って動物の世話をしたいと言うわけですが、しかし、時間がたちますと、そこで気がつくのは、どうやって適切に行動したらよいかわからない。すなわち、シェルターにおきましては、新しいスタッフやボランティアにはトレーニングが必要なわけですが、それはすごく簡単にしか練習しないので、実際にやってみるとシェルターで、例えばトイレの世話とか、そういったことがちゃんとできないと、非常に小さいうちからそういったことがちゃんと知らされていけば、そのような大人になってシェルターに行ったら何をしたらいいかわからないということはないと思います。ですから、話ができたらもう既にその教育は始めるべきだと思います。

○……

柴内先生は何年生ぐらいから。そういう具体的な、動物を使ったのではなくて、知識で心に刻む、日本に動物の問題があるということを中心に刻むようなことができる年齢はどの程度か、お考えがありましたらお願いします。

○柴内先生

今、先生がおっしゃっているとおりですね。私も先生と同じ3歳の孫がいて、今の子どもたちは、能力が全然違います。しかし、先生が御心配になっていることは、きっと触れ合い活動の現場などでプログラムをつくるのに、どういうプログラムをしたらいいかというご質問ですね。

IAHAIOのリオの宣言にもありますが、子どもたちと触れ合う現場での動物たちはどうあるべきで、どんなプログラムをつくるかということも大体段階があります。しかし、その段階が10年前につくられたものだとしますと、例えば、10年するとやはり変えなくては年々差が出てきているということを感じます。

それで以前の幼稚園のための動物介在教育プログラムは動物に優しく触れるだけを教えて、遊んでもらえばよいというプログラムでしたが、今の幼稚園のお子さんは

もうそれ以上のことをきちんとお話して十分理解ができるのですね。そういう意味で差は出てくると思います、小学校一、二年生、三、四年生、五、六年生、また中学生にお教えする授業のプログラムというのは段階別に一応スタンダードがあります、おおよそですからそれをグループが現場で活用できる内容であるかどうか、自分たちのグループの能力もありますから、動物もボランティアさんも。

ですから、そういうのをあわせて、それから伺いする学校の生徒さんの地域性もあります。そのようなことも加味して、もしお手伝いできればそういうプログラムもありますので、御一緒にまた研究をしながら情報を交換していけばよろしいのではないかと思います。例えば一、二年生は正しい触れ合い方。三、四年生になったら動物たちの世話は人間の役割であると。また無駄な命をつくらないためとか、人間と動物の歴史的なおつき合いなど、いろいろなことがプログラムにできますので、またぜひ、今、先生からいいお話を聞きましたので後ほどでもお話が出来るとよいですね。

よろしくをお願いします。

○山口先生

どうもありがとうございました。

それではあとお一方かお二方。時間によってできると思います。では、横山先生、どうぞ。

○横山

済みません、一つ教えていただきたいのですが、帝京科学大学の横山と申しますが、

こういう、ある価値観とかある信念というのは、最終的に世界はもうこっちのほうに行くだろうとお考えなのか。それともいつまでたってもいろんな考えがあって、それがせめぎ合ってRSPCAですか、それとかアニマルポリスとかいつまでも必要な世界になるのか。それとも最終的にはみんなは動物に優しくなって、そういうものは必要なくなるだろうという世界をお考えなのか、どちらなのですかということをお教えください。

○ディーパシェリー・バララム

私の個人的な意見になりますけれども、両方必要だと思います。恐らくそのヒューメイン教育が唯一の解決にはならないと思いますし、また、警察官的な監視というのがその唯一無二の解決策にはならないと思います。ですから、両方もが平行で存在する必要があると思います。

例えば、法制化する必要があるものもあるでしょう。

必要があれば禁止する必要があるというものもあると思います。例えば、インドのクマ、ヨーロッパでもそうですけれども、クマを食べるといのはひどいことだと思うのです。ただ、変化をもたらすためには多くの人の関心を集める必要があります。今はクマにとっては変わったのですね、禁止されましたから。このようなことは、例えばみんなを広く教育するというよりも、より時間が短くて解決できることだと思います。

ただ、変わっていかないこともあるでしょう。例えば伴侶動物あるいは農業動物に関する関係性、あるいは娯楽に使われている動物のあり方。また、法制化だけではなくてやはり消費者の力というのも大きいと思うのです。ですから継続的に変えていかないといけないところもあると思いますけども、今、発言された方の御意見はどうですか。個人的な御意見も教えてください、質問された方。

○横山

私は最終的には世界は善で。話し合っていくと最後は同じ答えになっていくのではないかと考えています。つまり、シーシェパードのやり方をしていると必ず逆の意見も出てくるので、みんな話し合っていかなきゃいけない問題を力づくでやってはいけないと考えています。みんな話し合っていると一つの正しい心理に導かれていくのではないかと考えています。

○ディーパシェリー・バララム

氏 いいと思います。御意見ありがとうございました。

○……

ずっとちょっと疑問というか、御意見をお聞きしたいのですけれども。私、以前イギリスに住んでいたことがあるので、それでその辺のいろんなそういう知識とかも少しあったのでお聞きしたいのですけれども、今のこういう日本とか特に、最近こういうヒューメイン・エデュケーションのいろんな教育とかも少しずつ盛んになってきて、動物を学校とか、そういうところに訪問で連れて行ったりとか、そういうことも盛んになってきたのですけれども。

例えば、よくイギリスとかでは余りそういう現場に実際には動物自体はそんなに連れて行かなくて、いろんなほかの教材とかを使って、そういうことを子供たちに教えるという方法のほうが結構とられているほうが多かったのですけれども。でもやっぱり実際には子供たちは動物を見てさわったほうが、体感して感じられる部分も大きいからそれも一つの方法だとは思いますが、例えば動物がそれをストレスに感じるリミットというのかな、どのくらいまではやってもそんなに動物

にも負担もなくて、子供たちも実際に楽しめて感じるということが出来るという、そういうちょうどいい時間というか、そういうのとかというのはあるのでしょうか。

○ジョイ・レネイ

国によって異なっていると思うのです。例えば地方でしたら、学校では子供を農家に連れて行くということもあって、それはとても人気があるのですね。大都市であれば私たちが言うところの都会の中にある農家、inner city farm というのがあるのです、都会の中に。ですから都会の子供たちも農家の体験ができます。学校で昔は動物を飼っていました。しかし、今では飼っていません。学校によっては飼っているところもあるかもしれませんが、一般的にはもう動物は飼っていないのです。

といいますのは、学校で飼っているとみんなが責任を共有してしまって、だれか1人が責任を持つということができなくなってしまいます。ですから、学校が休みのときに家庭で持ち回りで世話をしてもらうということになるとストレスがたまり過ぎてしまうのですね、動物に。ある調査によりますと、こういった小動物の死亡率というのはもうびっくりするほど高いということなのです。ですから、コンピューター支援のモデルが今は出てきていますけれども、多くの表のあたり、こういった実際の生身の動物ではなくて、実際に見る、体感できるコンピューターの機材というのも出てきました。ですからそういったものを使っています。

○山口先生

終わりのようなのですが、申しわけございません、時間がリミットとなってしまいましたので、これでQ&Aタイムは終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

これからジョイさんによるクローズコメント、きょうの全体についてのコメントをお話しいただきたいと思います。

○ジョイ・レネイ

簡単に、そうしましたら私のほうからまとめのコメントをいたしましょう。

けさ初め、まず理論的なヒューメイン教育の背景についての説明をいたしました。このヒューメイン教育というのは統合された形で動物、環境、そして人のこういった関連性を見るためのプロセスであるべきだという話がありました。しかし、私たちは自分たちの信念とか考え方というのがあられるわけです。それにも対処していかなければなりません。他者がよりよい、そして人を傷つけない形に変わっていくために影響を与えていかなければなりません。場合によっては優しい人もいます。

例えば、内緒で野生動物をペットに飼っている人というのもあるわけです。トラ、ライオン、チンパンジー、小さなサルなども家庭でペットとして飼われているということもあります。これはいけません。しかし、世話をしている人たちは、実際にはすばらしいことを自分はやっている、そして動物に対してきちんと管理をしているのだと感じているということが大きなヒューメイン教育の中での課題だと思います。野生に放ってあげなければいけないからです。野生動物を飼っているというのはいけないことであるということも、批判的ではなくその行動を変えてもらわないといけないというのが難しいチャレンジだと思います。

それから、先生が使えるような資料がサイト上にありますという話をしましたし、またCDもあります。それからブルー・ドッグ・プログラム。獣医師協会が世界会議で、来年発表することになっています。ツールキットもありまして、先生方のための。これもウェブサイトからとることができます。獣医師の方の知識、それから先生のための知識、それから社会学のための知識といったものがありまして、この獣医師との科目の中とのリンク付をして教えるということができます。

それからグレースのケーススタディについて話をしまして、皆さん、参加ありがとうございました。「Earthlings」のフィルムも見ました。それからまた捕捉されている動物についての話、チンパンジーもたくさんつかまっています。それから17頭のクマを飼っているこの心優しい男性なのですけども、しかし、クマにとっては生やさしい人生ではなかったと思います。しかし、男性は本当にクマが大好きだったのです。集団でこのクマが飼われていたのですけれども、実はクマというのは集団生活はしないのですね、単独行動をする生き物ですから、そういった意味では違っていると思っています。

これはWSPAというもののなのですが、ウェブサイトでも確認していただくことができるのですが、このプログラムは台湾で開発されたものです。そして包括的なプログラムになっていますので見る価値はあるかと思えます。このようなWSPAのような組織、機関というのは比較的裕福でありますので、活動やプロジェクトのスポンサーになってくれる可能性もありますので、アプローチの価値もあるかと思えます。

そして獣医学が指導したブルー・ドッグ・プログラムがあります。黒馬物語という話もしました。ヒューメインのメッセージ。それから文献ということで文学からもあります。そして闘犬のケーススタディというのがありました。そして、格言なのですが、三つ子の魂百までも

という言葉が日本でもあると思うのですけれども、カリッの格言だったのですけれども、これはもう50年間にもわたる研究にも使われました。

基本的なメッセージというのは、7歳もの小さい子供であっても基本的な人間としての資質なり性格というものを備えてしまっていると。7歳の子供を見たら、優しい子供を見たら、恐らくよい大人になるだろうと。そして反対も言えると思います。なかなかややこしい子供であったような場合には大人になってもそうだろうということです。さまざまな職業の人たちにおいては、これは恐らくもしかすると信じるに足るかもしれないということをするのですが、私はこれについて疑問があります。というのはそうであれば教育の意味もなかなかなくなってくると思いますし、ヒューメイン教育に関してもそうですし、何も手が施せないという状況になるのではないかと思うのですが、現実にはそうではなく、確かに遺伝的な要素というのも無視できないと思いますし、環境の外的要因というのも私たちの性格や資質を決めると思うのですが、でも、この格言によると、私たちはクローンみたいに言っているわけですね。そうではなく、私たちは個々の個性を持っている、性格を持っているということで、それぞれが個々に特別なわけですから。これは「Earthlings」という映画でもそういうことを明確に描写しているわけです。

私たちはいろいろな選択肢の機会がある国です。そして、その周辺にいる子供も含めて影響を与えるチャンスもあるわけです。子供と時間を費やして、そして自然を考えるとこのようなことはどれぐらいやっているのでしょうか。そんなに頻繁にやっていないと思います、みんな忙しいですから。でも、皆さん、あるいは皆さん一人一人がお母さんやお父さんとやったように、本当にシンプルな形で、覚えてらっしゃると思うのですが、そういった経験もあったかと思えますし、皆さんに影響力があつたと思えます。子供たちの生き方を変えることもできると思えます。形成をすることができます。

そのリスのことを見ている子供、そしてパンを食べようかどうかを考えているのですね。もうそこから離れなさいと、かまれるわよということと言われるかもしれませんが、じゃあ、じっとしなさいと、リスというのは、彼自身の住居に暮らしていて、そして自分たちがそこに侵入しているわけだから、リスの反応をしばらく見ようということになるかもしれません。動物はほとんど人にかみつくということはないわけで、じっとしていることが多いのですね。これはリサメイということなのですが、彼女、かわいらしい写真になっていると思うのですが、小

さいネズミを本当に優しく包むように抱いているのですね。そして、彼女の表現は、もう絶対握り締めちゃだめよと。でも、彼女も幸運だと思うのですね。というのは恵まれているし、愛情を受けていると。それから、だれか周辺にいる人たち、動物を慈しむということを教えてくれる大人がいるということであるかと思えます。

ですので、サメイは恐らくそういった環境下においてそういったお母さんになると思うのですね、グレースもそうだと思うのですね。親からのガイダンスを得ていると思えます。私たちも子供たちに対しても関心があると思うのですね。子供に対して、そして孫に対してもできると思うのですね。私たち次第だと思えます。

ですので、ACTAsiaを代表しまして、そして私個人、実際にはちょっとまだ時差ぼけに苦しんでいるのですけれども、本当にお招きいただきありがとうございました。私たちもそうだと思うのですが、お互いに学ぶということが大事だと思います。互いにますます学んで切磋琢磨したいと思えます。

世界じゅうは私たち全然違わないということですが、もちろん伝統とか、それから文化と、そういった違いも尊重しなければいけないし、違いがあると思うのですが、そういったものが障壁になってはいけないと思うのですね。私たちが障壁をつくっているのだと思うのですね。ここ40年間いろいろなところに出張しまして、75カ国ぐらい訪ねているのですが、もう人は人だと、どこに行っても同じだということで、みんなも同じような欲求を持っているし、みんなやっぱり幸せになりたいし、それから基本的な安全保障が欲しい、家族も大事だし、やっぱり自分のために一生懸命やりたいということがありますので、ヒューメイン教育をとて信じております。私自身にできる小さなことをやりたいと。そして、その他に影響を及ぼして、ちょっとでもいいことをやりたいなと。そして、できる限り悪いことはやりたくないなと、そういうふうにはやっていきたいなと思っているわけです。本当にありがとうございました。

○司会

ディーパ先生もありがとうございました。もう一度、2人に拍手をお願いします。

Thank you Joy and thank you Deepa. Thank you very much.

そして、山下先生と柴内先生にも本当にありがとうございました、長い時間。

そして、最後に主催者を代表しまして山口先生に締めたいと思います。

先生お願いいたします。

○山口先生

本日は朝から長時間のセミナーに御参加いただきまして本当にありがとうございました。

ジョイ先生も本当によい時間を持てたというふうにおっしゃってくださっておられますけれども、きょう、皆さんでお集まりいただいて、ここでも経験したことが、皆様がそれぞれの持ち場に帰られて、さらに生かしていただけたらこんなにうれしいことはございません。それとともに、またここに集まったというこの機会をぜひぜひ十分に御活用いただいて、もっともっと同じ気持ちをとにする方の輪が広がっていけたらなというふうに思っております。

私たちがセミナーをするときはいつもその輪が広がってほしいなという気持ちもいつも持っておりますので、ぜひ皆さんお互い自己紹介をされた方もたくさんいらっしゃると思えますので、ぜひ、ともにここで集まったことで、そしてここから日本のヒューメイン・エデュケーションが広がっていくことを願って、きょうの最後のごあいさつとさせていただきますと思います。

本日はどうもありがとうございました。どうぞお気を付けてお帰りくださいませ。

○司会

本日は本当にありがとうございました。